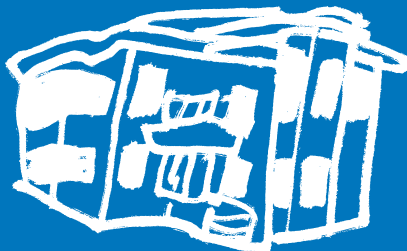
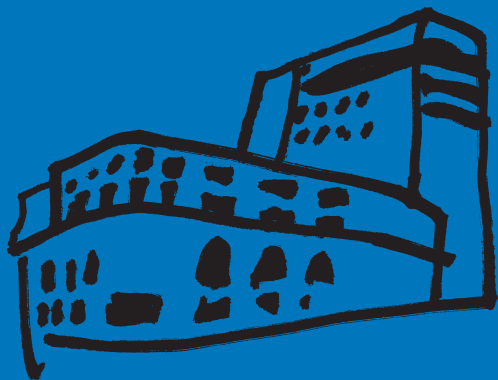
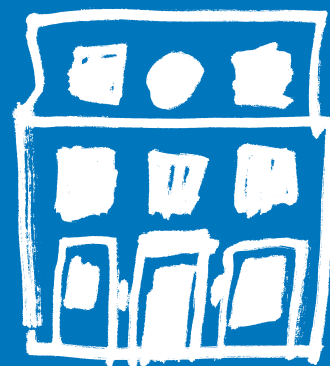


REVIEW OF STREAM OF URBAN AND LIFE DESIGN,  
FACULTY OF ARCHITECTURE AND BUILDING ENGINEERING,  
KANAGAWA UNIVERSITY

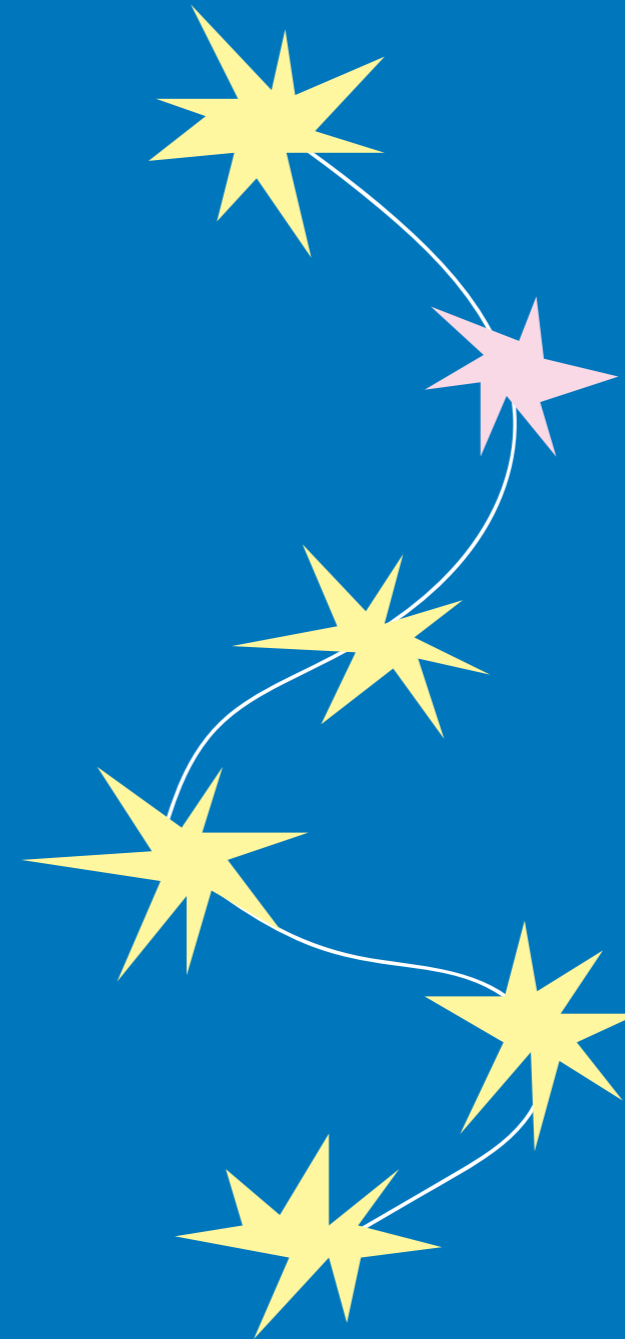


【特集】 建築史という学び 過去と未来をつなぐ



## 目次

・特集 建築史という学び 過去と未来をつなぐ	1
プロローグ 過去を学び、未来を考える ～建築史、これからの建築を造るもの～	2
内田青蔵の軌跡 ー実績と研究の記録ー	4
横浜散歩 関内～山手編	8
内田青蔵先生に聴く“建築史”	12
編集後記	16
・2022年度学生優秀作品紹介	17
修士論文	18
修士論文 全作品リスト	48
卒業設計・論文	49
卒業研究 総評	60
卒業研究 全作品リスト	65
学部設計課題 優秀作品	67
・NEWS 建築ものづくり工房	90
学外受賞	92
留学生レポート	96
研究室紹介	97
・沿革・クレジット	98



## 建築史という学び 過去と未来をつなぐ

建築を学び、その世界を自らの場とする多くにとって、建築史は一種特異な存在かもしれない。とりわけ現代は意匠・構造・環境工学といった設計や計画の現場に直接かかわる実学・実用的要素、さらには最新の建設技術や素材へと注目は集まりやすい。

その一方で荒廃する地球環境への危機感からサステナブル社会やSDGsに関する周知や興味が広がり、古い建物の保存再生や利活用の模索など新たな分野も生まれつつある。知識教養の範疇とも見なされがちだった建築史に、時代が光を当てなおそうとしているようだ。

また本年は神奈川大学で長く教鞭をとられ、現在も第一線で研究をリードする建築史家・内田青蔵教授が退職を迎えられた年である。多くの学徒に歴史を学ぶ意味と意義とを説き続けてきた教授が投げかける「建築史は新しい建築をつくるための学問」の言葉に、建築史学の核心を示す響きを感じられはしないだろうか。

未来を知るため過去を学ぶ。先人がつないできた途方もない歴史こそ、わたしたちを新しい建築へと誘う偉大な道標にほかならない。(二階さちえ)

## プロローグ

### 過去を学び、未来を考える

#### ～建築史、これからの建築を造るもの～

建築学の一つの分野である“建築史”が日本で学問として成立したのは、明治期以降である。辰野金吾が渡英した際に「日本の建築には、どのような歴史があるのか」と聞かれたが何一つ答えられなかった。それを恥じた辰野が帰国後に、宮内省の技師である木子清敬や教え子の伊東忠太などとともに大枠を築いたのがこの学問の始まりとされている。日本や西洋、東洋などの場所性と、近代や現代などの時代性、住宅や商業などの機能性に建築史は細かく分類することができる。

その建築史について内田先生は「過去を学び、未来を考えること」とおっしゃった。本特集では、学生が独自に作成・実践した年表やまち歩き、内田先生のお話を通してその本意について掘り下げていく。

年表では、内田先生の研究活動や実績を可視化し、まち歩きでは「保存・再生活用」の事例が多い横浜関内地区と内田先生の専門分野である「近代住宅」が多い山手居留地を舞台に建築史の興味深さを実感する。また、内田先生ご自身の言葉で建築史とは何かについて語っていただいた。

ものを造る学問において、過去の建築から学ぶことに面白みを感じられないと思われがちな建築史の重要性和面白さを紹介する。

2023年3月をもって、本学OBであり教授である内田青蔵先生が退職され、特任教授となられた。内田先生は、建築史を専門とされており、日本の近代住宅史の第一人者である。今号の特集では、内田先生とともに改めて建築史について考える。



加地邸家具図面 サンルームのソファ（内田研究室蔵）



内田先生は教育活動と自身の研究活動において、多彩な業績を残されている。

本学では、近代建築史の講義を担当されており、多くの学生が受講した。講義では、建物やその設計者について熱く語り、デザインの良さや価値、重要性について訴えかけてこられた。時には自身のペットである犬の話題を交え、ユーモアのある講義だった。

内田先生が教鞭をとり始めたのは、1985年の東京工業大学工学部附属工業高校（現東京工業大学附属科学技術高等学校）からである。工業高校では建築の教諭を担当されており、1995年に活躍の場を高校から大学に移された。その後、文化女子大学家政学部（現文化学園大学造形学部）、埼玉大学教育学部を経て、本学に2009年に着任され、多くの卒業生を社会に輩出されてきた。また、建築学科から建築学部への改組に尽力され、新たな学びの礎を築かれた。

研究者としては、日本の近代住宅史の第一人者であり、あめりか屋や同潤会、別荘建築など多くの建物の調査や保存を中心に研究活動をされてきた。日本近代建築史も専門分野とされており、本学に着任してからは東アジアに関する研究をはじめ、近年では和室に関する研究も始められた。



日本建築学会から『わが国の住宅の近代化に関する一連の歴史研究』の論文が評価され日本建築学会賞（論文）を、日本生活学会では著書『同潤会に学ぶ』で今和次郎賞を、日本生活文化史学会では『お屋敷拝見』『学び舎拝見』『お屋敷散歩』の著書3部作で日本生活文化史学会賞を受賞された。著書は、共著を含め専門分野を中心に幅広く出版されている。さらに日本生活学会においては、会長も務められた。

#### ■経歴

1953年 秋田県生まれ  
1975年 神奈川大学工学部建築学科卒業  
1977年 神奈川大学大学院修士課程修了  
1983年 東京工業大学大学院博士課程満期退学  
1985年 東京工業大学工学部附属工業高校 教諭  
1986年 東京工業大学より工学博士の学位を取得  
1995年 文化女子大学家政学部 助教授  
1997年 文化女子大学家政学部 教授  
2006年 埼玉大学教育学部 助教授  
2007年 埼玉大学教育学部 教授  
2009年 神奈川大学工学部 教授  
2022年 神奈川大学建築学部 教授 兼 学部長  
2023年 神奈川大学建築学部 特任教授



内田青蔵  
Seizo Uchida

#### ■受賞歴

1987年 日本建築学会 関東支部設立四十周年記念事業懸賞論文『二十一世紀の住まいと住環境』佳作入選  
1994年 日本建築学会 奨励賞（論文）  
2004年 日本生活学会 今和次郎賞  
2012年 日本生活文化史学会 日本生活文化史学会賞  
2017年 日本建築学会 日本建築学会賞（論文）

#### ■著書

『あめりか屋商品住宅』単著／住まいの図書館出版社 1987  
『日本の近代住宅』単著／鹿島出版会 1992  
『同潤会に学ぶ』単著／王国社 2004  
『図説・近代日本住宅史』共著／鹿島出版会 2008  
『お屋敷散歩』単著／河出書房新社 2011  
『受け継がれる住まい』共著／柏書房 2016、『和室学』共著／平凡社 2020  
『東アジアにおける租界研究 ― その成立と展開 ―』共編著／東方書店 2020  
『和室礼讃』共編著／晶文社 2022 など

# 内田青藏の軌跡 -これまでの実績と研究活動の記録-



## 1 内田先生とは？

神奈川大学のOBであり、入学して最初の設計授業を担当した先生であるため、多くの建築学生にとって初めての教授像として印象に残る。歴史家としてフィールドワークを多く行うため非常に活動的。また、活動の記録に映る先生は彩りある服を着こなしており、学生からはお洒落な一面があると噂されている。



内田先生誕生日会



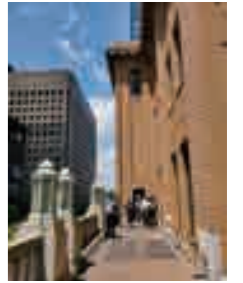
内田研究室の謝恩会

## 2 内田研究室とは？

「建築史研究室」- 歴史的建造物から建築の未来を見いだす -  
建築の調査・評価・保存を行う歴史専門の研究室



2009年、内田先生が神奈川大学に着任したのと同時に既存の歴史研究室を引き継ぐ形で設立された研究室。研究室としてのフィールドワークを数多く実施しており、日々の活動においては現地での実測と歴史的観点に基づいた評価を行うことで建物を保存する活動を主に行っている。また、歴史系の研究室として所有する書籍数も多く、「研究室独自の書庫」を有している。



歴史的建築の見学



現地で実測



卒業論文発表会

1953	1975	1977	1983	1985	1986	1987	1992	1994	1995	1996	1997	1999-2000	2002	2003	2003-5	2004	2005	2006	2007	2008	2009	
★	★	★	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	★
秋田県にて生誕	神奈川大学工学部建築学科卒業	神奈川大学大学院修士課程修了	東京工業大学大学院博士課程満期退学、研究生	東京工業大学工学部附属工業高校教諭	東京工業大学より工学博士授与	『あめりか屋商品住宅』 住まいの図書館出版局 日本初の住宅専門会社から新たな住宅史を考える。	『日本の近代住宅』 鹿島出版会 和室の洋風化と洋室の和風化	奨励賞 日本建築学会(論文)	文化女子大学家政学部助教授 着任	立教大学校宅二号館建物調査報告書	住宅総合研究財団 軽井沢の洋風別荘調査	『住まうの100年』ドメス出版	『お屋敷拝見』 河出書房新社 お屋敷めぐりの心得	『同潤会に学べ』 王国社 同潤会は何を手がけたか	鹿兒島学術振興財団 軽井沢の洋風別荘調査	『新版図説・近代日本住宅史』 鹿島出版会	『旧川上貞奴邸復元工事』 報告書	埼玉大学教育学部助教授	東京学芸大学連合大学院教授兼任	『新図説・近代日本住宅史』 鹿島出版会	内田研究室 設立	神奈川大学工学部教授 着任

実測調査 旧大川邸

所在地：東京都小金井市桜町 3-7-1  
竣工年：1925(大正14)年  
実測調査：1992(平成4)年

実測・移築・復元 旧本多忠次邸

所在地：岡崎市町字足延 40-1  
竣工年：1932(昭和7)年  
調査：2000(平成12)年  
展覧会：2001(平成13)年  
復元工事：2008-2010(平成20-22)年

1986年 - 住宅専門会社「あめりか屋」研究

- あめりか屋を中心とした洋風住宅開拓史の再考 -

研究に際して  
大学院後半の「あめりか屋」に関する学位論文研究に際して研究内容を「あめりか屋」と「住宅改良会の活動」に分割。

最初の単著  
学位論文

「住宅改良会」の中心であった橋口信助が興した住宅専門会社「あめりか屋」はアメリカ住宅の導入を推進していた会社。その活動は日本住宅の洋風化として軽視されていた。その中で一連の建築の調査・評価を通し「あめりか屋商品住宅」を執筆。あめりか屋の住宅を「西洋館の和風化」として論じ、西洋館を基に伝統的な要素を付与していくことで誕生したのが「洋風住宅」であり新しい近代日本住宅史と論じた。

保存活用 旧安田楠雄邸庭園

所在地：文京区千駄木 5-20-18  
竣工年：1919(大正8)年  
保存活用の指導：2002(平成14)年

1999-2005年 旧川上貞奴邸の復元プロジェクト

復元計画について  
住宅専門会社「あめりか屋」が手がけた数少ない大正時代における和洋折衷の邸宅建築。電力王と呼ばれた福沢桃介が女優貞奴と共に住むために建てたこの建物は、自家発電機を携え現代的な生活をする事ができた。この建物の復元計画に際しては「調査・復元・施工」について指導を行った。

川上貞奴邸の移築復元および展示計画

所在  
竣工時：名古屋市中区東二葉町  
移築後：名古屋市中区種木町 3-23  
竣工：1920(大正9)年頃  
復元：2004(平成16)年

実測調査 旧足立正氏邸

所在地：三浦郡葉山町  
竣工年：1933(昭和8)年  
実測調査 2014(平成26)年

### 3 活動の様子



建築史フィールドワークin上海

中国の学生と横浜まち歩き

建築史フィールドワークin京都・奈良

鎌倉まち歩き



野村和宣先生と丸の内まち歩き



和室で講義

神奈川大学日本語・日本文化プログラムの一環で外国人留学生を対象として実施した横浜市にある三溪園の見学会。

#### 最終講義 再考「洋風住宅」 開拓史 - 「あめりか屋」を中心に -



研究と活動の原点となる「あめりか屋」に関する新たな知見を提示した。

<p>2009</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>『再生名建築 デザイン』 鹿島出版会</li> <li>『再生名建築 時を超えるデザイン』 鹿島出版会</li> </ul>	<p>2012</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>群馬県の近代和風建築調査報告書</li> <li>神奈川県の近代化遺産調査報告書</li> </ul>	<p>2015~19</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学会賞 日本生活文化史学会</li> <li>『ブラジル日本人入植地の常民文化』 共同研究報告書</li> </ul>	<p>2016</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>『受け継がれる住まい』 柏書房</li> <li>スクラップ・アンド・ビルドから キープ・アンド・チェンジへ</li> </ul>	<p>2016~17</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>『ケルムスコット・プレスとウィリアム・モリスのデザイン思想』 神奈川大学共同研究報告書</li> </ul>	<p>2017</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>『「持家」志向の高まりに関する研究』 科学研究費成果報告書</li> </ul>	<p>2018</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>日本建築学会賞(論文) 受賞</li> <li>大田区歴史建造物調査報告書</li> </ul>	<p>2020</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>『東アジアにおける租界研究』 東方書店</li> <li>漢口と日本租界</li> </ul>	<p>2020</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>『住まいの生命力』 柏書房</li> <li>日本人の暮らしから 持続型社会の生き方を探る</li> </ul>	<p>2020</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>『和室学』 平凡社</li> <li>明治維新後の和室</li> </ul>	<p>2021</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>『横浜建築』 御茶の水書房</li> <li>都市横浜を 様々な角度から</li> </ul>	<p>2016~21</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>『旧渡辺基吉邸の歴史的調査と評価』 VSPORT 研究助成共同研究報告書</li> </ul>	<p>2022</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>『和室礼讃』 晶文社</li> <li>和室らしきとは</li> </ul>	<p>2023</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>『同潤会が目指した理想的な住まいと住環境』 東京都復興記念館特別展示</li> <li>建築学部教授から定年退職 特任教授に就任</li> <li>建築学部の 初代学部長に着任</li> </ul>
---	--	---	--	--	---	---	--	---	---	--	---	---	--

#### 家具の実測調査 加地邸



所在地：三浦郡葉山町一色1706  
竣工年：1928年(昭和3)年  
家具の実測調査：2014(平成26)年  
設計者：遠藤新の研究の第一人者・井上祐一先生(神奈川大学非常勤講師)と協同で調査を行う

#### 2016年 - 旧渡辺基吉邸の移築活用プロジェクト



(写真提供/前田建設工業株式会社)

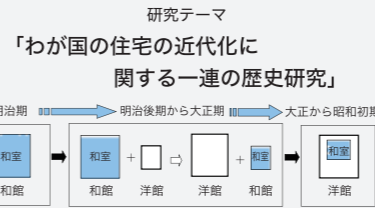
#### 旧渡辺基吉邸の移築・活用に際する復元計画

所在  
竣工時：東京都港区白金台4-19-10 移築後：茨城県取手市寺田5270  
竣工：1934(昭和9)年 復元：2022(令和4)年

#### 復元計画について

旧渡辺基吉邸は、大正期から昭和初期にかけて住宅専門会社「あめりか屋」の技師として活躍した遠藤健三と山本拙郎、二人の恩師である今和次郎の3人が共同でつくり上げた住宅建築で、解体部材を用いて移築保存が行われた。「旧渡辺基吉邸解体保管検討委員会」として基吉邸の建築史的価値を明確化し、神奈川大学・法政大学・早稲田大学の共同調査チームとして2017(平成29)年6~7月にかけて現地実測調査を実施した。

#### 2017年 日本建築学会賞(論文)



受賞した論文は、明治以降の日本の住宅の近代化過程を、社会・生活・形態・技術の相互連関する状況から読み解いた一連の論考。「このテーマでの市民的書物を刊行し学術的関心の普及にも大きな貢献をなしている」と高い評価を受けた。

#### 2022年 - 同潤会特別展プロジェクト



(写真提供/内田研究室)

「江古田・佐々木邸-1934(昭和9)年竣工-」とは現在の日本における主要な住居形態「持家」を提案した同潤会の現存する数少ない分譲住宅の一つ。住宅史における貴重な財産として2010(平成22)年に登録有形文化財に認定された。

#### - 同潤会分譲住宅の 実測 / 保存 / 展示活動 -

概要  
東京都復興記念館にて2023(令和5)年5-8月にかけて行われた同潤会の特別展示会に際して内田研究室が全面的に協力した。関東大震災の復興の際に新しい住宅供給の中心的な役割を果たした「同潤会」の住宅事業をテーマに、震災後100年が経過した今、今後の私たちの住まいのあり方について問いかけるものである。

# 建築史家・内田青蔵と過去から学ぶ

## 横浜散歩 関内～山手編



### はじめに

教科書では学ぶことのできない建築史を内田青蔵先生とのまち歩きを通して紹介する。

今回の対象地である横浜の関内、山手は歴史的な建造物が多く、その残し方に様々な創意工夫を施している。こうした歴史的建造物がどのように保存再生されてきたのかを、内田先生の案内と解説をもとに、当時の社会的・歴史的背景やその建物に関わる人々の思い等を加えてまとめた。

今日を生きる我々が歴史的建造物を未来にどう残していくのかを考えるヒントになれば幸いである。



### 関内編

#### 今に伝わる石造建築の存在感 旧横浜正金銀行本店

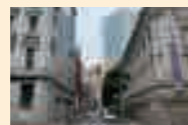
**DATA**  
設計：妻木頼興  
竣工：1904(明治37)年  
住所：中区南仲通5丁目60-60

外国商人との取引を正金(現金)により円滑に行う貿易金融機関として設立され、世界3大為替銀行の一つとなった。関東大震災により一部が焼失するものの倒壊は免れた。現在は焼失した部分を復元し、『神奈川県立歴史博物館』となり、重要文化財に指定された。



竣工当時、自らの伝統建築に石を使用した事例は少なく、異質で存在感があるところに明治期の日本人は憧れを抱き、この建築のような「びくともしない建築」をつくることで「びくともしない国」を表すことに繋がると考えた。しかし、石の代用品としてコンクリートが使われはじめ、また、モダニズム建築の影響で我々がこのような石造の重厚感の漂う建築との出会いは減少している。

旧横浜正金銀行本店にみる石造建築の存在感は時代を超えて受け継がれている。



**DATA**  
設計：矢部又吉  
竣工：1922(大正11)年  
住所：中区弁天通5丁目70

川崎銀行横浜支店として建設され、ファサード2面を残して歴史的建造物の保存・再生が行われ、オフィスビルとなった。

同じ石造建築である旧横浜正金銀行本店と比べ質感や厚みに違いがあるものの、並ぶと重厚感のある景観となる。一度は取り壊しが決まったが、幸いなことに外壁の正面部分だけが残された。この通りは人間の目線からすると、見上げることは少なく、一階部分を保存することで、石造りの街並みの雰囲気を残している。

改築の際は、1980年代に流行っていたポストモダニズムのデザインや装飾性を加味した保存方法が採用された。

過去と現在を重ねる部分  
保存建築  
損保ジャパン横浜馬車道ビル

#### 震災を乗り越えた横浜を支える建築 旧横浜商工奨励館

**DATA**  
設計：横浜市建築課  
竣工：1924(大正13)年  
住所：中区日本大通11



関東大震災後の復興事業として横浜商工界を再起させ、産業の振興と貿易の発展を目的として設立された。

開港後の横浜は貿易都市として栄えており、外国の実業家や経営者が多く集まり、貿易により外貨を稼いでいた。しかし、震災を理由に外国人の多くは横浜から離れ、神戸や他のアジアの国に移ってしまった。

震災で経済的にも莫大な被害を受けた横浜は、離れた外国人を呼び戻す必要があった。そのため横浜商工業界の復興と発展の拠点としてアール・デコの影響を受けた細かい装飾と日本の伝統的なデザインを使い、外国人に日本の良さを訴えかける建築とした。

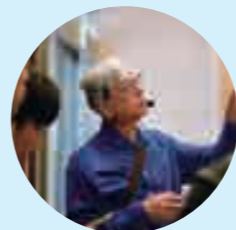
現在は改修・増築後、日本新聞博物館と放送ライブラリーを中心とした複合施設『横浜情報文化センター』となっている。



梁を押さえる柱は伝統的な舟肘木に見え、影られているのは若葉の装飾である。



貴賓室の天井は格子状であり、日本の直線美を彷彿とさせる吹寄せや格天井となっている。



#### 内田青蔵 歴史的・社会的背景から建築史上の位置付けを再考する の 解釈

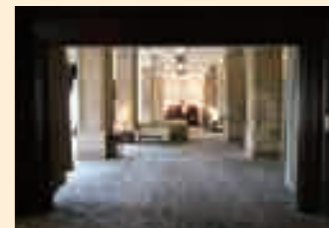
よくこの建物はいわゆる帝冠様式というナショナルリズムの台頭を背景として、近代主義建築に対抗して主張された様式といわれています。

震災後の日本は軍国主義化が進んでおり、日本のものを表現するという事は、自分たちの力を示し、支配しようとする思想を表しているといわれるけど、私は違うと思っています。横浜の人たちにとっては、むしろ日本という国の魅力や伝統的な文化を外国人に伝えたいという思いの表現であったと思います。だから、横浜の場合は帝国主義的な発想のなかで見えはけないと理解しています。

少なくとも日本の力という威圧感のようなものを示すよりは、日本の技術や文化はいいでしょと、こういうものを日本は持っているという意味で解釈するものだと考えるし、そのような観点を持って見学してもらいたいと思っています。

#### 横浜再興の象徴 ホテルニューグランド

**DATA**  
設計：渡部仁  
住所：中区山下町10  
竣工：1927(昭和2)年



関東大震災によりグランドホテルが倒壊したことを受け、横浜の官民が一体となって再建した横浜復興のシンボルである。

再建当時は、震災復興で横浜が不死鳥のように蘇るという願いを込めて、名称の案として『フェニックスホテル』が挙がったという。復興後に海外から訪れた人に横浜の復興の様子を披露するため、ホテル内の家具や装飾は工場生産ではなく職人が時間をかけて作り、重厚感のある落ち着いた空間に仕上げた。

現在は耐震改修工事が行われ、今でも横浜を代表するホテルとなっている。



建物はルネサンス様式であるが、時計の上には京都の川島甚兵衛作の綴織『天女奏楽之図』が飾られ、天井からは東洋風の伽藍の灯籠が吊るされており、東洋と西洋が融合したデザインとなっている。



この家具は『横浜家具』と呼ばれている。横浜家具は開港時に海外から持ち込まれた家具類の修理や注文家具の製作から始まり、優れた家具職人が西洋家具に横浜独自の工夫を加えた家具である。職人の技術に触れられる数少ない場所である。



日本の住宅を変えたスパニッシュ様式  
山手111番館



DATA  
設計：J.H. モーガン  
竣工：1926(昭和1)年  
住所：中区山手町111

アメリカ人J.E. ラフィンの私邸として建てられた。市が建物の寄贈を受けて保存、改修工事を行い、一般公開している。

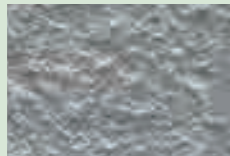
この建物に用いられたスパニッシュ様式は、スペイン南部で発祥し、アメリカで発達した建築様式の一つで、日本では大正末期から昭和初期において流行した。

この様式の特徴は赤い瓦屋根と白い外壁(塗り壁)の対比性である。日本の建築は外壁が全て板張りだったため、多くが関東大震災で類焼した。これにより、震災後は可能な限り木部を外に出さない塗り壁が奨励された。それを一つの理由として、大正期の終わり頃から塗り壁の建築が流行し、移行していくことになる。

館内は昭和初期の洋館を体験でき、設計者であるモーガンに関する展示を行っている。地階部分は、喫茶室として利用されている。



赤い瓦屋根・白い塗り壁・三連アーチのパーゴラが特徴的なスパニッシュ様式の建築。



壁面には凹凸があり光が当たると柔らかい陰影が建築に現れる。



一階ダイニングにある窓は当時の最大級の大きさであり開放感がある。窓からは港とともに公園や四季折々の木々や植物たちがみえる。



建物中央に位置する吹き抜けは、山手に存在する西洋館の中でも貴重なものである。日本では戦後の小住宅において空間を広くみせる方法として吹き抜けが使われていく。



築・改修を考える建築  
横浜地方気象台庁舎

DATA  
設計：神奈川県営繕管財課  
竣工：1927(昭和2)年  
住所：中区山手町99

関東大震災で庁舎が倒壊し、旧米国海軍病院跡地である現在地に再建された。直線や幾何学模様を使ったアール・デコが特徴的である。日本で3番目に古い気象台であり、現在は建築家・安藤忠雄により歴史的・文化的価値を活かす改修と増築が行われ最新の施設となった。

改修・増築される前は庇がなかった。しかし、耐震用に使われた鉄筋コンクリートは、雨による開口部の傷みや水漏れ等の問題が発生しやすい建築材料であった。そのため軒が伸び、庇がつけられ、日本の風土に合わせたデザインに変わっている。



増築・改修された開口部。オリジナルを踏襲している。

内田青蔵

の 建物の  
解釈 後世への  
残し方を考える

古い建物を修理する場合、どのように考えて設計したらいいか。同じ素材で同じデザインを作っていくというのが一つで、その一方で真逆のものにするという方法もあります。

文化財の場合、修理する箇所を竣工時と同じデザインにすると、それが古くなったとき、どちらがオリジナルかが分からなくなる。むしろわざと違うデザインにした方が「時代が違う」ことを表現するので良いのではという意見もある。

そういう意味で、横浜地方気象台庁舎は今後の修理のあり方を考える手本になります。例えばどのような構造補強をしたらいいのかなど。ここでは補強した鉄骨が剥き出しになっていますが、他にも何か方法がなかったかを考えてみるのも良いですね。



⑨横浜市イギリス館



⑩山手111番館



⑪横浜地方気象台庁舎



⑫エリスマン邸



⑬ベリック・ホール



⑭ブラフ18番館



⑮旧内田家住宅

ベリック・ホール  
素材を保存し、当時の姿を残す



DATA  
設計：J.H. モーガン  
竣工：1930(昭和5)年  
住所：中区山手町72

B.R.ベリック氏の邸宅として建てられ、ベリック氏が第二次世界大戦を機にカナダへ移住した後、インターナショナル・スクールの寄宿舎として使用された。現在は復元改修工事を経て一般公開されている。



山手111番館と同じくスパニッシュ様式でモーガンの代表作品である。この建物の特徴は開口部に素材として使われているスチール材である。戦前期に建てられた文化財建造物は、スチール製の開口部が傷むことが多く、アルミニウム材のサッシに変えられ、全て肉厚なものになってしまう。その厚みによって印象が変わってしまった場合もある。

この建物はスチール製のサッシが保存され、当時の雰囲気を保っている。

解体で判明した新事実  
ブラフ18番館

DATA

設計：不詳  
竣工：1933(昭和8)年  
住所：中区山手町16

貿易商R.C. バウデン氏の住宅として関東大震災前に建てられた。フランス産の瓦屋根や上げ下げ窓と鏝戸、南側のバルコニーとサンルーム等、震災前の外国人住宅の特徴を持つ。戦後はカトリック山手教会の司祭館として使用されたが老朽化により解体された。解体時の調査で、震災による倒壊と火災を免れた旧建物の部材を転用して同じ場所に建てられたことがわかった。横浜市が部材の寄贈を受け、山手イタリア山庭園内に移築復元し、外壁は震災の経験から防災を考慮したモルタル吹き付け仕上げとなっている。

現在は横浜家具が展示され、一般公開されている。



南側に位置するサンルーム

日本人のための洋館  
旧内田家住宅

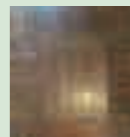
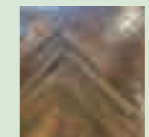
DATA  
設計：J.M. ガーディナー  
竣工：1910(明治43)年  
住所：中区山手町16



東京都渋谷区の南平台上に明治・大正時代の外交官を務めた内田定植の邸宅としてアメリカ人建築家J.M. ガーディナーの設計により建てられたが、横浜市に寄贈され、解体調査を経て現在地に移築復元された。現在は重要文化財に指定され、当時の暮らしや資料を見ることができるよう一般公開されている。

この建物は天然スレート葺きの屋根、下見板張りの外壁で、アメリカンヴィクトリアン様式で建てられており、創建時は洋館に付属する和館が付いていた。明治期の大邸宅は和館と洋館が並び建つことが多く、和洋館並列型と呼ばれている。

内田氏は外交官として海外生活をしていたため洋館を使っていたが、ご令嬢は和館で生活していた。まだ洋風の生活が日本の中で浸透しておらず、結婚した際に家事等を日本の伝統的な生活に合わせてできるようにするためだった。一般的にこの住宅が建てられた明治末期の洋館は応接の空間、和館は家族の生活空間というように使い分けていたという。



床を見ると、部屋によって板の敷き方が違う。当時はCAD等のコンピュータ上で図面を描くのではなく手描きであったため、建築家は平面図を描く際に床や天井の仕様を考えて描く必要があった。

サンルームは元々吹きさらしのペランダであり、雨で濡れて使えなくなるため、建具を入れて室内化した。増築したため室内側の開口にも雨戸がついており、上げ下げ窓と引違い窓が混在している。庭に面した腰壁は日本の引き違いの無双窓になっており、足元から風が入り、夏は涼しく冬は暖かい部屋となっている。



## 内田青藏先生に聴く “建築史”

建築史とは未来を知り、  
新しい建築に至る道標である



### 「設計するためには前の時代を理解しなければ」 その思いが建築史への扉を開いた

—なぜ建築史を学ぼうと思われたのですか。

神奈川大学の学生になった際、竹島卓一先生という建築史の先生がいらっしゃいました。竹島先生は日本建築史の講義すべてを、ご自身が研究されている法隆寺の話だけで終えられたんです。これが私にとって学者といわれる専門家との初めての出会いでした。講義内容は専門的で理解できなかつたのですが、淡々と講義をされる姿に尊敬の情を持ちました。それと同時に、大学は自分で根拠を探しながら解釈し、様々な問題を解決していく世界なんだと理解したのです。

それから、卒業後は地元の秋田に帰って設計事務所をやりたいと思いました。設計を生業とするには、コンサルタントに良いものをつくる必要がある、そのための知識として何を学べば良いのかを考えました。私は住宅設計をしたかったため、今の時代の住まいがどう考えられ、誕生したのかを知れば、次の時代が見えてくるのではないかと思います、それで建築史の先生の研究室で勉強しようと決めたのです。

### 生活と住まいの研究に興味をもつ者へ、 手元にいつでもあるような史料をつくりたい

—これまで様々な研究をされてきましたが、どのような姿勢で取り組んでいらっしゃいますか。

住宅を作ることは、生活を作ることだと考えていました。そのため、単に住宅という建築だけを研究することではなく、当時の生活がどう変わったのかを知るべきと思いました。例えば、日本の生活は、明治期以降に西洋文化の導入によって、それまで和服を着て下駄や草履を履く時代から、どんどん生活が変わり、洋服と靴の時代になりました。

こうした生活の変化から、住まいも変わったのではないかと。生活に合わせて設計しなければならないのではと、生活学や民俗学などにも興味を持ち始めました。

そういう考え方で色々な文献を見ていた中で、大正期の生活の洋風化を盛んに主張していた住宅専門会社である「あめりか屋」に出会いました。関連資料を探し分析していく中で、あめりか屋は日本人の伝統的な生活スタイルを変えるためにアメリカから住宅を直輸入し、新しい住宅を植え付けようとしていた

ことなどが次第に分かってきたのです。

こうした住まいと生活スタイルの変化を同時並行で見ながら、あめりか屋の研究を続けるために、明治から大正・昭和初期の雑誌や書籍を集めて読んでいきました。そのうち、私の中で住まいと生活の関係性を中心に研究するスタイルが作り上げられたと思います。

—書籍の執筆のほか、古い研究資料の復刻にも尽力しておられますね。

私が書籍などの分析を通して見つけたことや新たな解釈を学会での論文発表や本を書いて伝えていかないと、その発見は私だけのものになってしまいます。それではもったいないのでやはり誰かに伝えたいと思い、研究成果を発表し続けました。こうしたことをしているうちに、住宅史研究に興味を持ち始めた研究仲間が増えてきました。研究仲間たちに共通する悩みが研究の史資料の収集方法であることに気づきました。

例えば『同潤会』は、都市型の新しい住宅のモデルをつくったことで知られています。昔の暮らしを伝承しながらも鉄筋コンクリート構造のアパートメントをつくるなど、それまでの日本の住宅を変えていく、大きな役割を果たしました。

同潤会に関する研究用の史資料はある資料館に所蔵されているものの、それを入手するのが大変で、誰でも簡単に研究を行



戦前期の日本を代表する住宅専門雑誌『住宅』（住宅改良会の機関紙）復刻版



同潤会の記録を復刻した『同潤会基礎資料』

える状況ではありませんでした。研究者を増やし、研究を活性化させるためには史資料の入手が簡単になる環境作りが必要と考えたのです。

こうした考えのもとで、1916（大正5）年から1943（昭和18）年までに発刊された雑誌『住宅』の復刻を出版社に持ち掛け、出版できました。同潤会の資料も同様に復刻できました。手元に史料がいつでも見られる状態であれば、住宅史研究に興味を持ってくれる人たちが増えるだろうと思ったのです。



**実際に空間体験ができるものを残す。  
建築家同士が感覚で理解し、学べるように**

— 建物を残していく中で、その価値はどうやって判断しますか。

歴史的建造物を含め、建築の魅力は外観の美しさもありますが、やはりその空間性だと思います。大事な空間であれば、単なる文字や図面による解説だけではなく、実際の空間体験ができるようにすることが必要です。そのためには、建物そのものを残すことが求められるのです。そうした建築の多くは、二度と同じものが作れないぐらいの材料や技術、職人技などが駆使されています。そうしたことを理解しようとせず、すぐ壊して新たに建物を作る社会を変えるためには、古いものに魅力があり、そこで過ごしてきた人々の歴史があり、我々が学ぶべき対象であることを理解しなければなりません。存在することにより初めて、我々のように建築に深く関わる人々が見て、感じ、学ぶことが可能となります。そのために、歴史的建造物の保存が求められるのです。



ただ、全ての歴史ある建造物を大切に残せということではありません。歴史的建造物でも、オリジナルをきちんと残すべきものと、手を加えながら使い続けていくもので大別されます。また、建物全体をオリジナルのまま残すという考え方は、そろそろ改変すべきかもしれません。

今後は、一つの建物でも文化財としての価値がある部分と改変を行っても良い部分を明確に区分し、オリジナルとして残す部分を限定して保存する方法も検討すべきだと思います。こうした方法を取ることで、歴史的建造物をより有効に使用できる可能性が高まるのではないのでしょうか。私にとって文化的な価値ある空間とは、建設当時の時代性や設計者の個性が突出して表現されている豊かさを感じられるもので、現在の我々にとっても刺激的な学びの空間となると思います。

**「意識の違いで、ものづくりの仕方が変化する」  
それを伝える言葉が必要**

— 内田先生がつくられた「キープ・アンド・チェンジ」という言葉にはどのような意味が込められているのでしょうか。

スクラップ・アンド・ビルドという言葉は、建築界では頻繁に使われています。まさに、建築業界のスローガンのようなものでした。しかし、私は、歴史的建造物の保存を訴える中で、こうした保存の意味が浸透し始めつつあることを実感し、このスローガンを使うことをそろそろやめた方が良いと思ったんです。そのためには、これに代わる新しい考え方を表現した魅力的なスローガンを作らなければならない。こうした中で生まれたのが、キープ・アンド・チェンジでした。

今までのように古くなったから壊すという考えではなく、建物をできる限り使いながら維持し続け(キープ)、維持できなければ他者に譲るなど、機能変換して使おう(チェンジ)ということです。



やはり、我々ものづくりに関わる人たちは、先のスローガンの意味する問題点に気づかなければならないし、それに代わる、新しい時代を表現するキープ・アンド・チェンジという言葉が浸透すれば、ものづくりの仕方も大きく変わると思います。

**「歴史は建築を学ぶための大事なソースである」  
これに気づき、理解してほしい**

— 建築を学ぶ学生たちへメッセージをお願いします。

歴史は新しいものをつくるための基礎教育としてある、建築デザインを考えるための有効な学問領域だと私は学生たちに常々伝えていますが、その意味を感じ取ってくれる学生は少ないです。過去の建築ばかりを見せられ、それが未来に繋がるのかと疑問視している学生の方がはるかに多いように思います。

しかし、建築との関わりは一生続きます。独自のデザインをつくりだすために、自分自身の思考の中に歴史的な尺度を持つことが必要だと思います。

図面を書いて、模型を作る。大事なことです。しかし、そこで生み出されたデザインが、どのように位置づけられるのかを考えるためには、歴史という尺度が必要となります。建築教育の中で歴史を学ぶことは、多様な建築デザインソースの源流に触れることでもあり、同時に、自らの作品の意味を確認するための尺度を形成することでもあります。

**未来を知るためのヒントが  
過去には残されている**

— 建築史とは、何でしょうか。

建築史はこれからの新しい建築をつくるための学問です。過去の建築を学ぶことによって、当時の建築家ができなかったことの世界を見出し、また、建築家たちがどういう試みをしたのかなど多くの課題を発見することができます。

未来を知るためには過去を理解すべきです。建築史は、未来へのヒントを与えてくれる学問です。学生の皆さんもぜひその点を意識していただければと思います。



## 編集後記



私は年表のページを担当した。このページはレイアウト検討に多くの時間を要し、検討を重ねる中で情報収集の大変さと、特集制作では様々な確認・連絡を責任もって行う必要があることを実感できたので良い経験となった。  
(伊東歩武 P4-P7 担当/六角研究室)



私が担当した年表のページは内田先生の実績や研究活動が一目で分かるように心掛けた。そのためにシンプルなレイアウトとし、研究活動や建物に関する文章も簡潔にまとめている。何度も検討を重ねたのでじっくりと読んで欲しい。  
(小菅大雅 P4-P7 担当/六角研究室)



大学院より神奈川大学に就学することとなり、RAKUは私が神奈川大学に来て初めてのグループワークとなった。右も左もわからず、先生と学生達のお力添えがなければ、完遂することはできなかった。感謝を申し上げたい。  
(田中宏武 P12-P15 担当/中井研究室)



今回の関内山手間の街歩きを通して、古き建築の素晴らしさや、建築の保存活用の意義を再度確認する機会になった。今回の特集ページを読んだ読者に建築史を深く知るきっかけとなれば幸いである。ご協力していただいた全ての方に感謝を申し上げたい。  
(富田響真 P8-P11 担当/中井研究室)



「過去を学び未来を考える」というテーマを、特集全体で一貫性を持たせて進めていくことに困難を極めた。何度も構想を練り直していくことは大変であったが、その過程から建築史を知ることが出来、学ぶことが多くあった。  
(長谷莉菜 P12-P15 担当/上野研究室)



今回の特集では「過去を学び、未来を考える」をテーマに進めた。建築史とは当時の時代背景や暮らし方がどのようにその時代の建築に影響をもたらしたのかを考えることであり、現代建築を理解する上でも必要である。  
(濱大智 P8-P11 担当/山家研究室)



内田先生、この度はご退職おめでとうございます。今号の特集は、内田先生の退職を機に建築史について改めて考えたものを掲載した。掲載するにあたり、内田先生が歩まれた建築史を調査してきた中で、内田先生の偉大さを感じることができた。  
(山下由聖 P2-P3 担当/野村研究室)



恩師である内田青蔵先生のご退職を記念する一連の活動に関われたのは、先生の背中を見て建築史研究者としての夢を育てた自分にとって何よりの喜びであった。本号を通して、建築の未来を見いだす建築史分野の魅力が伝わればと幸いである。  
(姜明采/助教)

## 書影提供

『あめりか屋商品住宅』 内田青蔵/住まいの図書館出版局  
『日本の近代住宅』 内田青蔵/鹿島出版会  
『お屋敷拝見』 内田青蔵/河出書房新社  
『同調会に学べ』 内田青蔵/王国社  
『受け継がれる住まい』 住総研「受け継がれる住まい」調査研究委員会 編著/柏書房  
『東アジアにおける租界研究 その成立と展開』 大里浩秋、内田青蔵、孫安石 編著/東方書店  
『住まいの生命力』 住総研 清水組「住宅建築図集」現存住宅調査研究委員会 編著/柏書房  
『和室学』 松村秀一、服部寿生 編/平凡社  
『横浜建築』 内田青蔵、中井邦夫、曾我部昌史、安田洋介、島崎和司、須崎文代、山家京子、上野正也/御茶の水書房  
『和室礼讃』 松村秀一、稲葉信子、上西明、内田青蔵、桐谷邦夫、藤田盟児 編/晶文社

## 参考文献

名古屋市住宅都市局都市景観室『登録有形文化財 旧川上貞奴邸復元工事報告書』名古屋市 2005  
内田青蔵、中谷礼仁、三浦清史、須崎文代『VSPORT 研究助成 共同研究成果報告書 旧渡辺甚吉邸の建築的特徴に関する歴史的調査と評価』2021  
内田青蔵、姜明采、小園崇明、野々村明佳里『同調会がめざした理想的な住まいと住環境 ～新しい都市と郊外の暮らし～』公益財団法人 東京都憲法協会 2023

## 監修・編集協力

二階さちえ(青空編集事務所)

## 修士論文

谷本 優斗

嶋谷 勇希

鈴木 碧衣

高田 晃

中澤 美那

半井 雄汰

林 眞太郎

林 淳平

●ディプロマ賞



谷本 優斗  
Yuto TANIMOTO

曾我部研究室  
SOGABE lab.

人間のためでもある建築  
Architecture not only for humans

**中井** 様々な生き物や環境と呼応するような断片化した全体を持つということですね。でもこのように積み重ねると強い全体を持ってしまつて結果的に閉じているように見える。

**谷本** 詰め込んだようには見えるのですが、美術館のように開かれた空間としてつくるというよりは、一番身近にある住宅で建築の力を表現しようと思つたようなつくりになっています。

**六角** 部屋同士の間みみたいなものを考えてこのような組み方になっているのですか。

**谷本** 部屋というよりは個別のものたちの関係性からどうエリアが作られてくるのか、そのエリアの繋がりがどうなっていたらより良い関係が生まれるのかを考えました。



敷地内に散らばる多様なエレメントにどこか一体感を感じさせる、建築を包み込む大きな屋根。妻入面、平入面の双方が現れる方形屋根とすることで多様な表情を見せると共に住宅街のボリューム感に馴染むような計画。

床、階段を吊る建築の構造材としてだけでなく、手すりや、外気を取り込む小窓としても機能する多義的な役割を担ったトラス。

外壁面に付属するように取り付いた LVL フレームは大屋根妻面とは異なる屋根方を見せ、異なる二つの立面が現れる。また水平にわたる横材は、猫や鳥など、生物の居場所でありながら、長押のように水平をつなぐ構造的役割を担う。

メッシュ素材で面が形成された、内部のような半外部空間。プライバシーを守りながら外部を感じられる開放的な居場所を演出する。植物が絡み、季節や音を楽しませてくれる装置でもある。

緩やかに湾曲した面が多様な行為を受け入れる。中空スラブを採用することで、その断面は小さな生物の居場所や動線にもなる、多様な他者を受け入れるエレメントである。

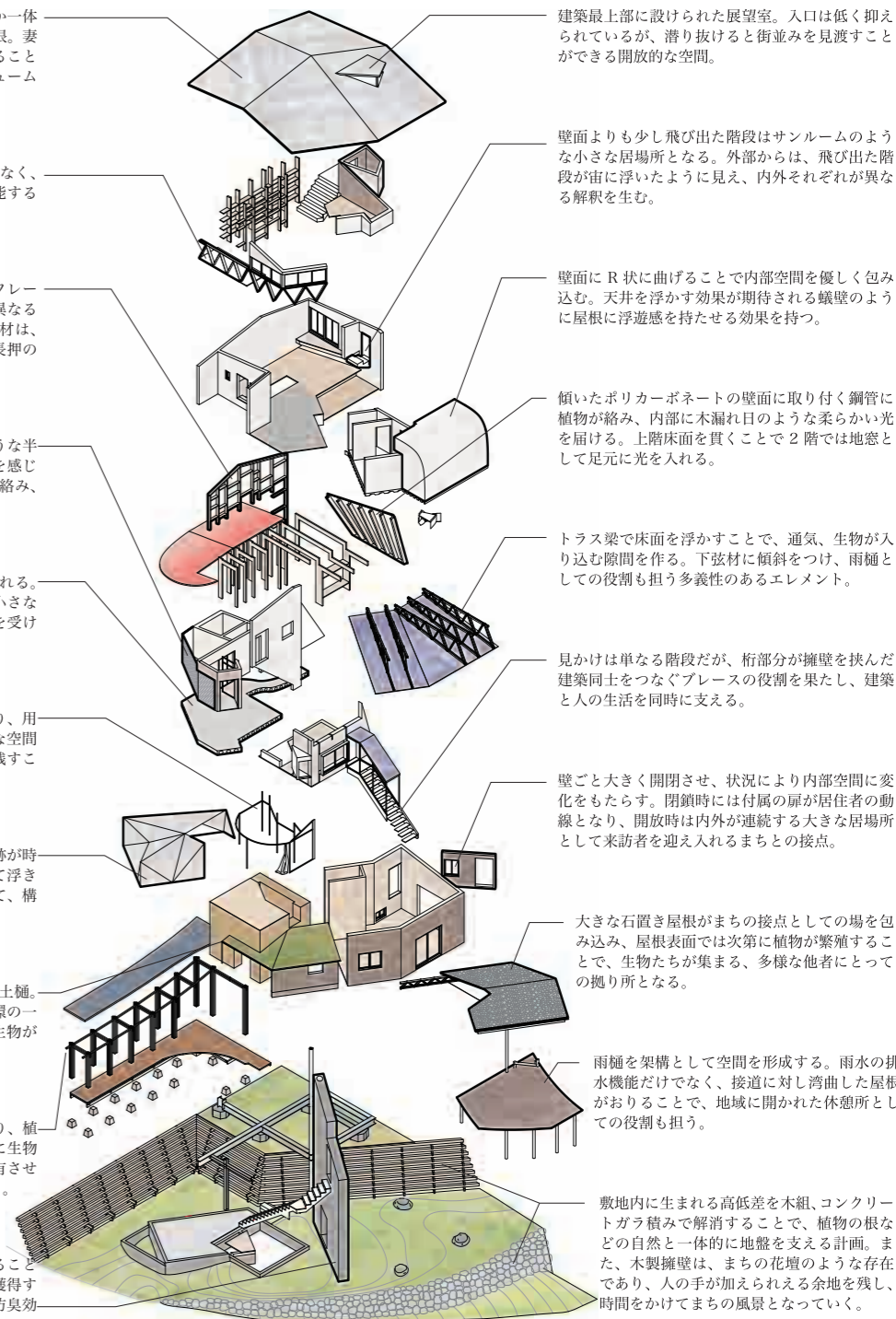
テラスに組まれた鉄骨には、カーテンが通り、用意された空間ではなく、天気や気分で多様な空間を作り出せる。人の手が加えられる余地を残すことで、生活が建築に染み込んでいく。

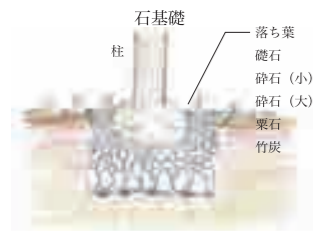
壁面に折れ目をつけることで、雨水の流れ跡が時間の経過とともにファサードデザインとして浮き上がる計画。また折れ目をブレースに見立て、構造壁としての機能を持つ。

草屋根に付属する縦樋は、雨樋ではなく、土樋。土壌を立体的に連続させ、建築が自然の循環の一部となる計画。屋根表面に植物が繁殖し、生物が集まる、季節により異なる表情を見せる。

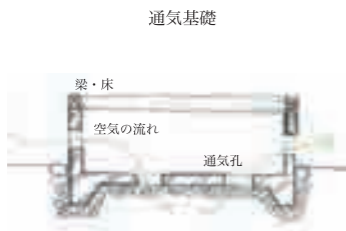
4本の東柱、2本の挟み梁でパーゴラを作り、植物が絡みやすい構成とする。絡まった植物に生物が集まり拠り所となる。また擁壁と梁を共有させることで、土木と建築に一体的な関係を築く。

蛇籠を壁として利用する。砂利を敷き詰めることによる圧縮応力から耐力壁としての性能を獲得する。またゼオライトを混ぜることで吸湿、防臭効果のある壁面となる。





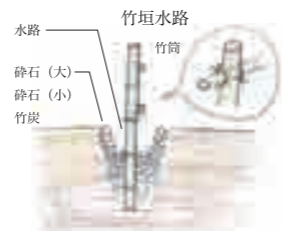
建築を支える大地にとって良質な環境とするため、接地面を開放する。水と空気が循環することで、菌糸と植物の根により地盤が安定し、自然と一体的な建築の立ち方を実現する。



建築基礎部分をコンクリートで埋めるという解答ではなく、通気口を設ける。建築を支えるという性能を担保しながら、地中に水と空気の通り道を作ることで地中にとって良好な環境を築く。



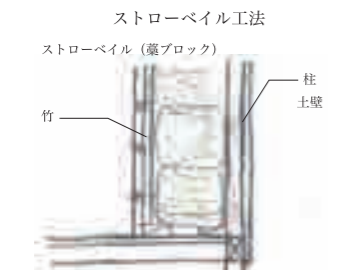
コンクリートガラや木材を組み、表面を形成する。植物の根が絡むことで強度が増し、造作と自然とが一体となり、時の流れと共にまちの風景を作り出す。表面に現れる隙間が、小さな生物たちの住処となる。



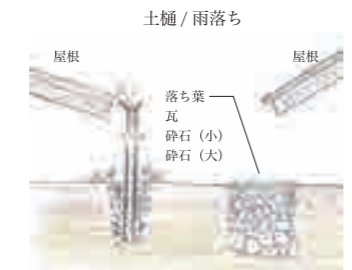
コンクリートブロックや線材の多い柵、フェンスではなく竹などの有機物で境界を形成する。側溝に杭を刺すことで落ち葉や枝が絡み、水の流れの勢いを弱めるとともに、集まった植物は小さな生物の拠り所となる。



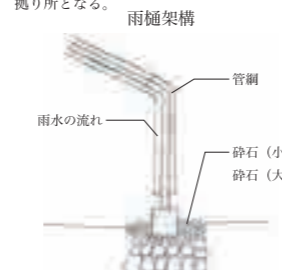
古くから境界に用いられた土塁を、単なる境界としてのツールだけではなく、地形に沿った動線空間として計画する。自然の流れと共に風景になり、人の居場所となり、境界を和らげる。



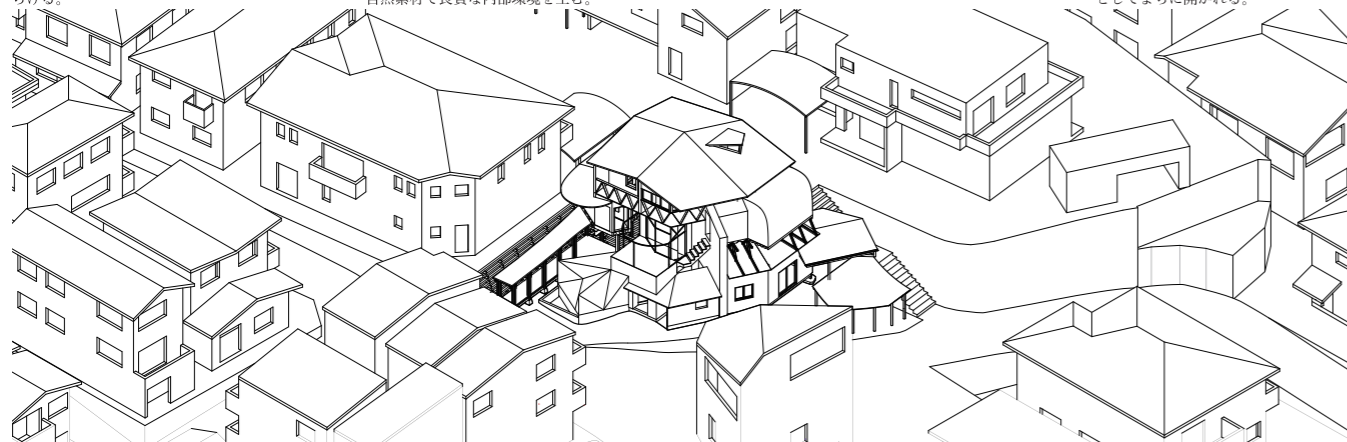
ストローベイル工法（藁のブロックを積み、土を塗って壁を形成）を採用することで、部分的に自然に還る。循環が可能な建築になる。藁による壁は、断熱・蓄熱・調湿性能が高く、自然素材で良質な内部環境を生む。



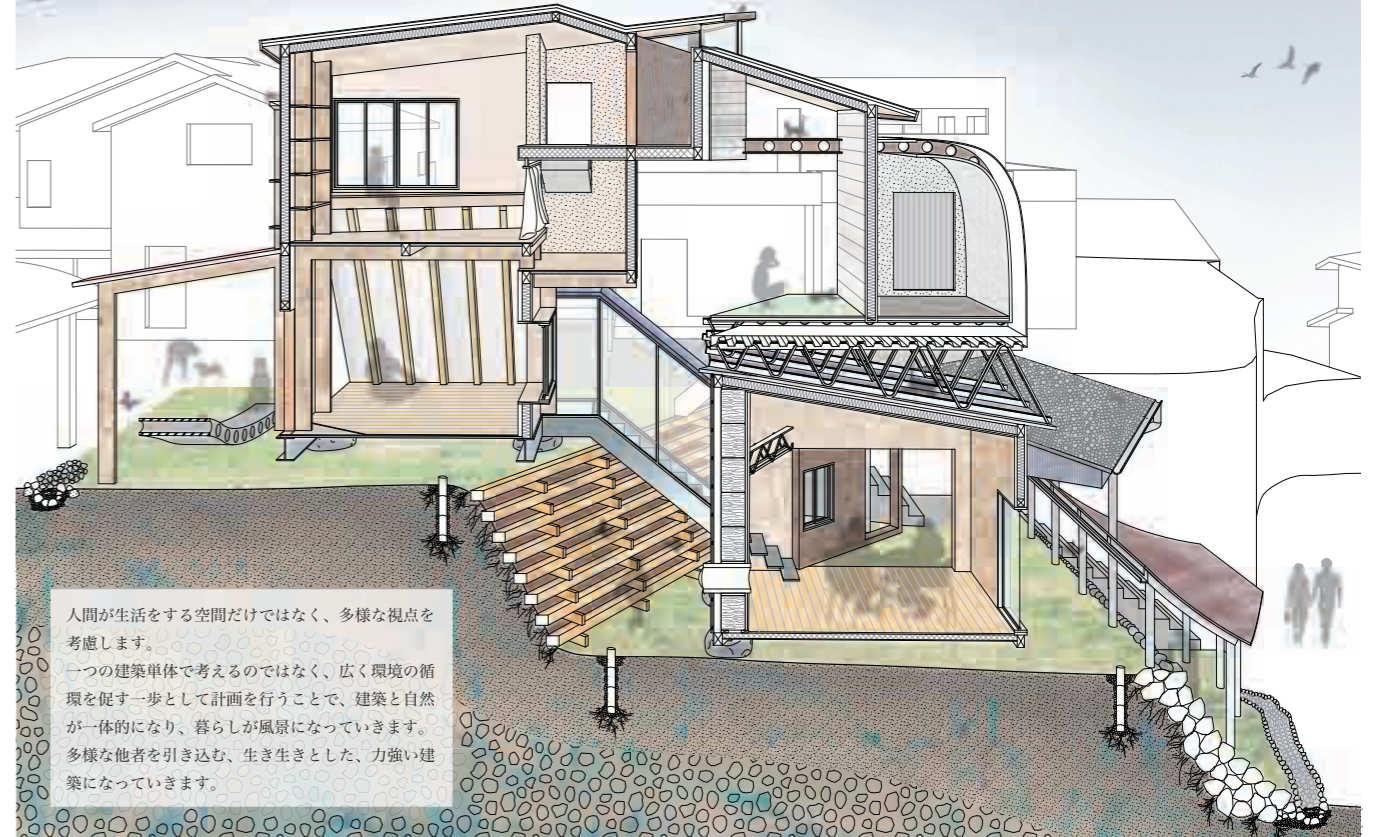
雨樋ではなく土樋。土壌を立体的に連続させ建築と自然を一体的に考える。コンクリートガラや瓦など、建材を利用しながら雨落ちを作ることで、流れた雨水が地中へ浸透するよう計画。



一般的に雨樋は、屋根から流れ落ちる雨水を地面に落とすための部材であるが、外部への単なる排水機能だけではなく、架構として設けることで居場所としてまちに開かれる。



この建築には、多様な隙間が存在します。人間にとっては、単なる隙間かもしれないが、鳥や猫、虫など、小さな生物にとっては心地の良い居場所になるかもしれません。それぞれが異なる理由から導かれた部分の集合で建築を構成するため、不完全さは残るかもしれません。しかし、その不完全さがあらゆる要因を許容する寛容さにつながるのではないのでしょうか。長い時間をかけて、他者からの愛着を受けるような、依代のような建築を提案します。



人間が生活をする空間だけではなく、多様な視点を考慮します。一つの建築単体で考えるのではなく、広く環境の循環を促す一歩として計画を行うことで、建築と自然が一体的になり、暮らしが風景になっていきます。多様な他者を引き込む、生き生きとした、力強い建築になっていきます。

● 優秀賞



嶋谷 勇希  
Yuki SHIMATANI

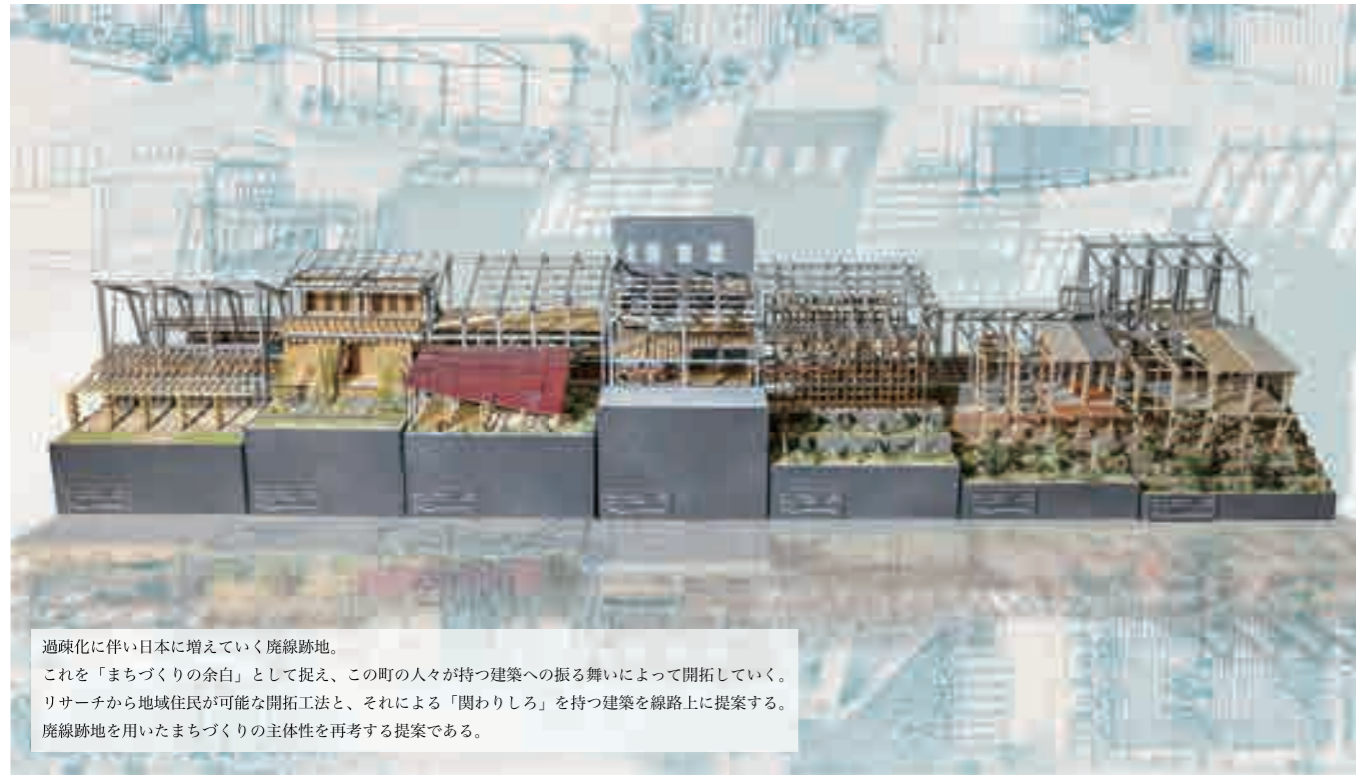
六角研究室  
ROKKAKU lab.

開拓される鉄道土木

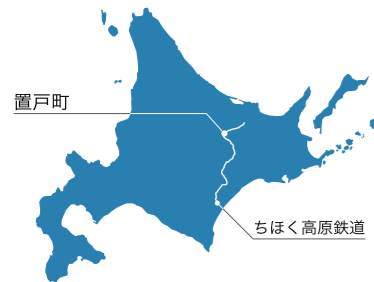
The railway civil engineering that being cultivated

-民芸的工法に基づく「関わりしろ」を持つ廃線跡地の建築提案-

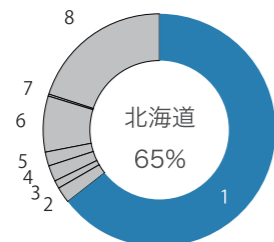
-The architecture proposal at abandoned line that Attractive Margine based on folk art architecture-



過疎化に伴い日本に増えていく廃線跡地。  
これを「まちづくりの余白」として捉え、この町の人々が持つ建築への振る舞いによって開拓していく。  
リサーチから地域住民が可能な開拓工法と、それによる「関わりしろ」を持つ建築を線路上に提案する。  
廃線跡地を用いたまちづくりの主体性を再考する提案である。



・各地方における廃線の総延長距離



番号	地方	総延長距離
1	北海道	1634km
2	東北地方	62km
3	関東地方	27km
4	中部地方	52km
5	近畿地方	56km
6	中国地方	191km
7	四国地方	12km
8	九州地方	502km

対象敷地

対象としたのは北海道置戸町。  
日本において廃線跡地の総延長距離は2536kmにも及ぶ。  
北海道は日本の廃線跡地の距離において約65%を占め、廃線跡地が町に残っている場所も多い。その中における置戸町という町を対象として提案を行う。

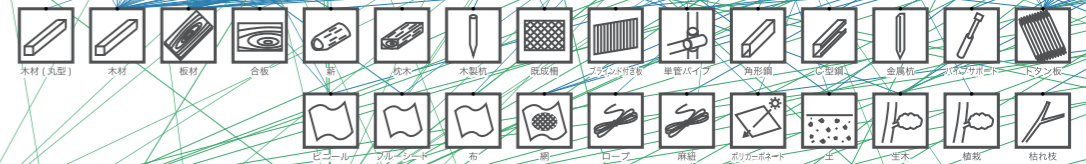
対象敷地を歩いて得られる「建築的振る舞い」

対象とした北海道置戸町を歩きながら、この町の人々が自ら形成したと思われる民芸的建築について材料や工法、造形などの「建築的振る舞い」を描き出す。これらは人々が可能な建築行為を示すものであり、それをもとに住民の主体性をもったまちづくりと建築を考えることができる。

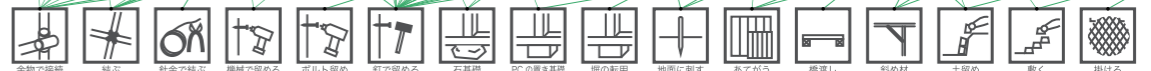


1. 単管の花畑  
2. 店を取り囲む植木鉢  
3. 薪のあるアプローチ  
4. 小さな土留め  
5. 窓に配慮する倉庫  
6. 金具による柵  
13. 木材置き場  
14. 駅前の休憩所  
15. 植栽を持つ壁面  
16. 張り紙のされた商店  
17. 大きな半屋外  
18. 物置を飲み込む車庫  
25. 雪害を防ぐ板  
26. 冬に備える薪  
27. 動物たちとの接点  
28. 積み上げられた土留め  
29. DIYされたプランター  
30. 彩られた壁面

素材類型

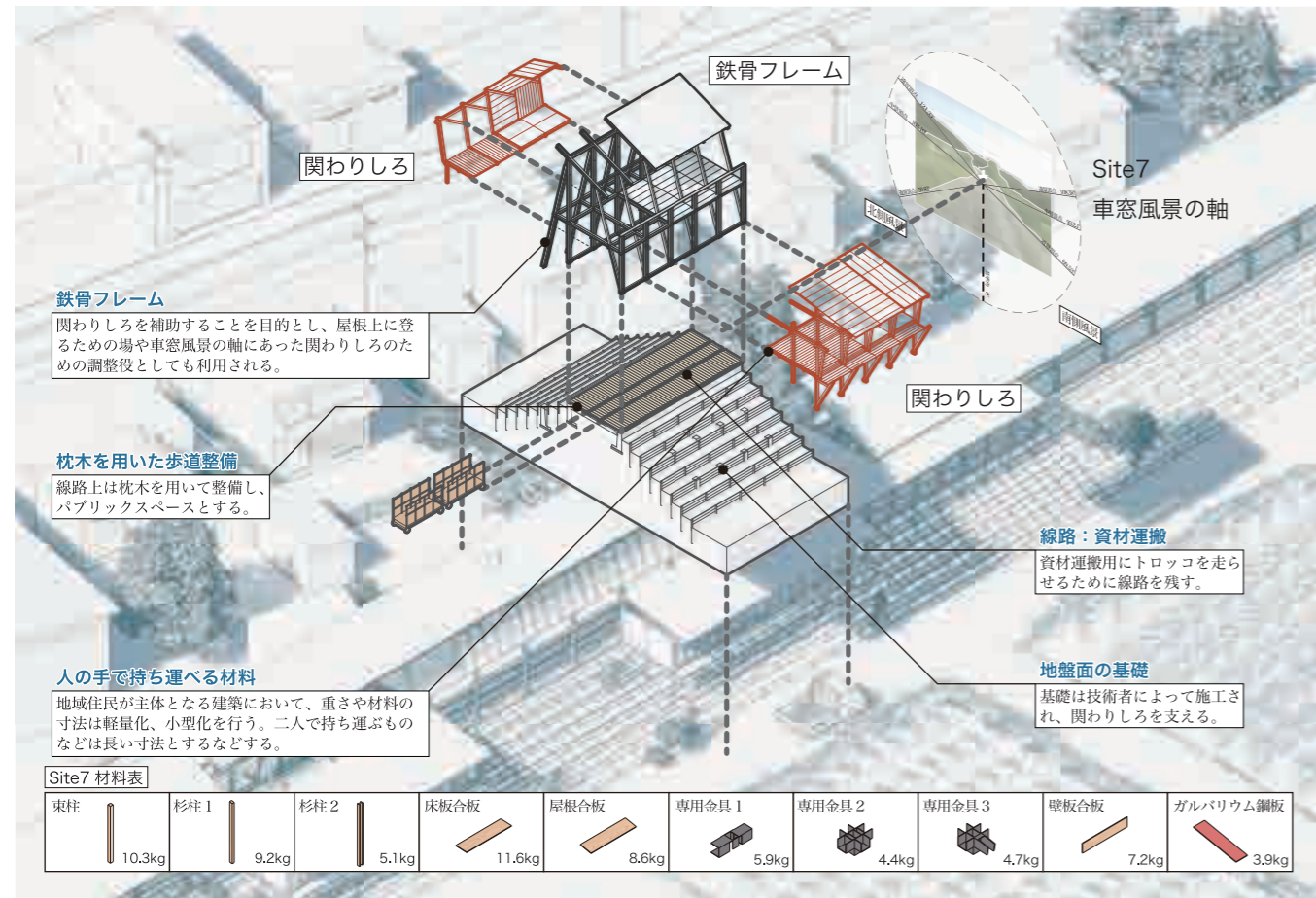
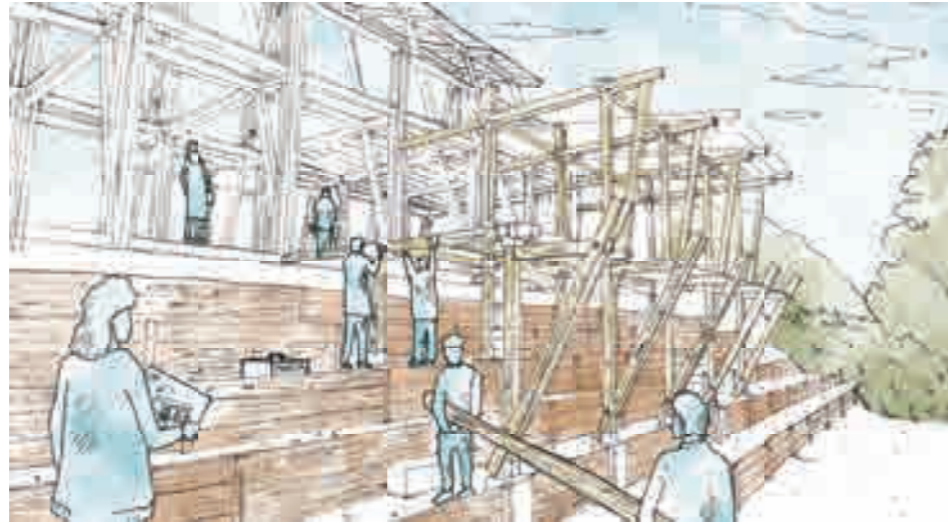


工法類型



「関わりしろ」により  
開拓される鉄道土木

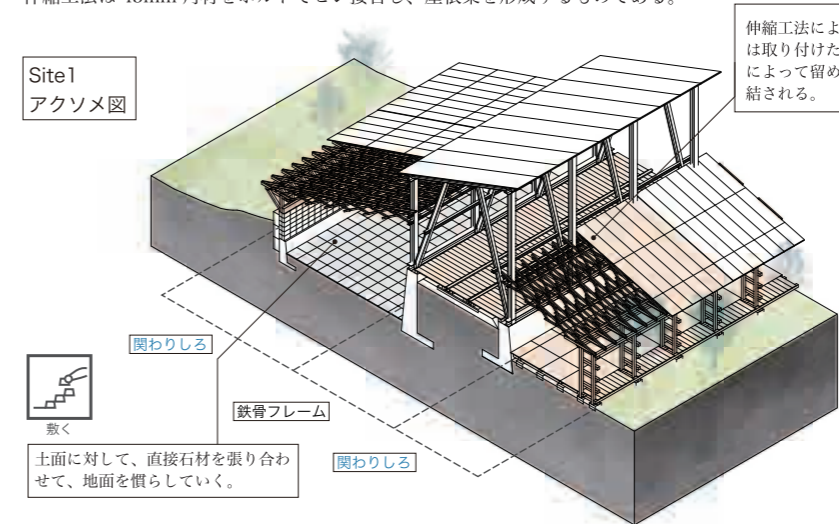
まちづくりの余白である廃線跡地に対して地域住民が自ら建築を施工、維持することができる「関わりしろ」を持つ建築を提案する。「関わりしろ」はこの地域の調査から明らかとなった「建築的振る舞い」と各敷地の車窓風景の軸から建築を考える。人々は建築の施工、維持を通してまちづくりに関心に向け、協働のなかでコミュニティを形成していくだろう。



Site1 大屋根を持つ製材所

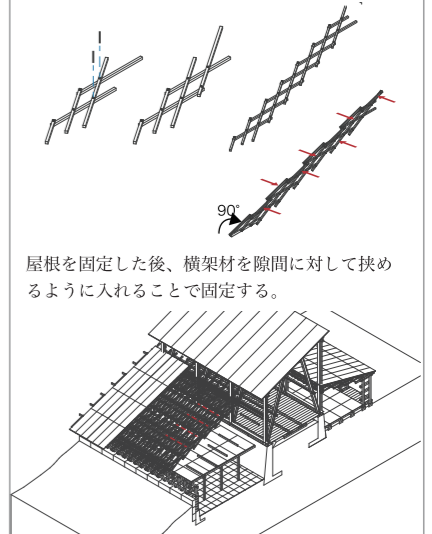
敷地は断面上で森林協同組合や植林場などがある。地元の木を用いた木工品などが基幹産業となっているため、地域住民によって小径材による大スパンの空間形成が可能となることで、製材所を形成できると考えた。伸縮工法は45mm角材をボルトでピン接合し、屋根梁を形成するものである。

Site1  
アクソメ図

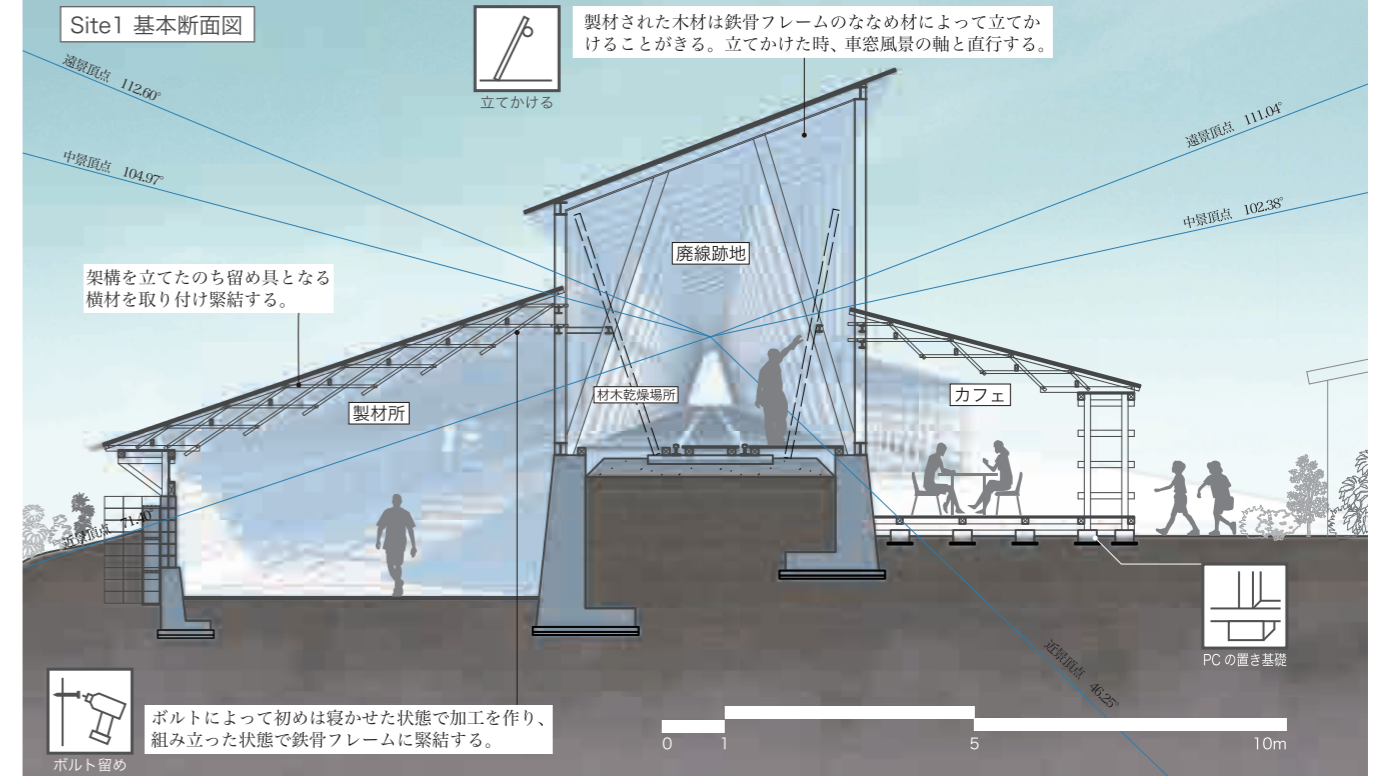


開拓工法 伸縮工法

45mmの角柱を組み合わせボルトではじめはゆるく留める。大スパンの屋根を可能とする。



Site1 基本断面図



● 優秀賞



鈴木 碧衣  
Aoi SUZUKI

六角研究室  
ROKKAKU lab.

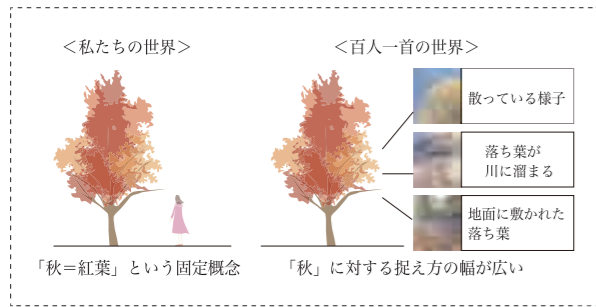
情景を詠む

Compose a scenery

-和歌の作家たちの感受性に基づいた建築の提案-  
-Proposal based on the sensibilities of Waka writers-

01. はじめに

現在、急速な技術発展により、私たちは容易に多くの情報を入手できるようになった。しかしその一方で、様々な物事に対する感覚が鈍くなってきていると感じる。百人一首に選出された作家たちの歌では、季節や物事を感じる要素を風景の中から抽出し、自らの心情を重ねている。情報機器が存在しない時代に作られた百人一首は、作家たちのセンシティブな感覚を知るための手がかりになると考える。昔から風景は我々に対して強い感情を与えてきた存在である。和歌の作家たちの風景に対する感覚を空間化し、現代の人々と共有することで、固定概念を壊して失われつつある人々の豊かな感覚を取り戻し、既存の環境に対する感覚の享受範囲を広げるきっかけとなるのであろう。



02. 風景の定義

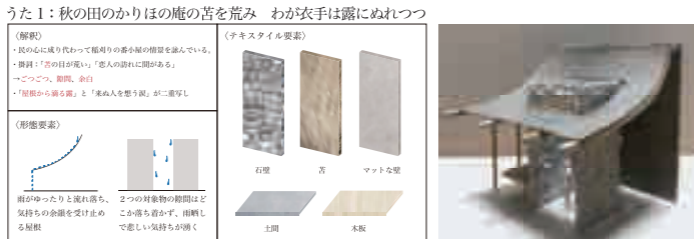
上記で述べている風景は、景観と同義ではない。その相違は知覚水準によって説明できる。どちらも私たちが生きる世界の捉え方を指す言葉ではあるが、景観が視覚に限定されるのに対して、風景に含まれている「風」は人間の五感によって体得される世界の捉え方であると定義する。

03. 百人一首から構築される風景

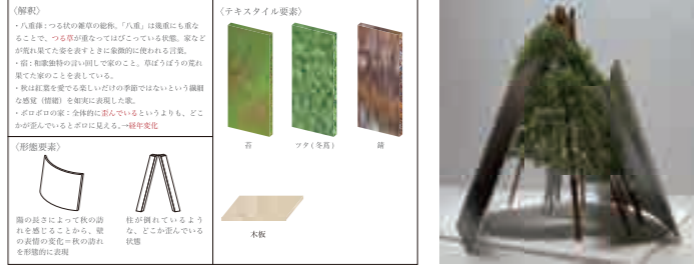
隣りに来る歌どうしが上下左右に何らかの共通語をふくみ合う形で結び合わされ、タテ10首、ヨコ10首の枠内に並べることが出来るものを、百人一首「歌織物説」(研究家林直道の説)という。並べられた100首の歌をつなぎ合わせる言葉を絵におきかえると、美しい景色が浮かびあがることから名付けられた。「歌織物説」のように、コンテキストから様々な要素を結び合わせて、新たな風景を構築したいと考えた。

04. 分析 1 うたの空間化

初めに、無作為に歌を選出し、歌から読み取った風景や心情をマテリアルや形態に置き換えて建築を構成するスタディを行った。分析1では、作者の心情を空間体験できるような形態を作ることを目的とし、2つのスタディを行った。



うた2: 八重葎茂れる宿の寂しさに 人こそ見えぬ秋は来にけり



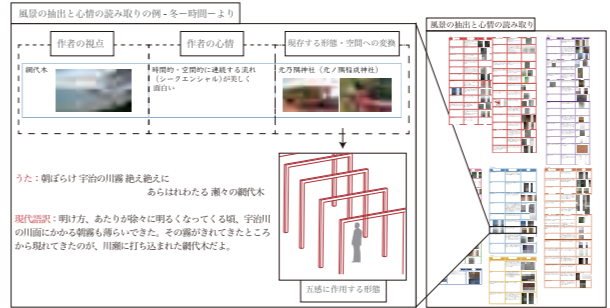
05. 分析 2 季節の空間化

それぞれ分類された歌をまとめた項目ごとに空間化した。例として、季節に分類された歌を総じて分析し、季節のモデルを作成した。分析2では、作者が詠んだ風景を取り込む装置を作り、作者と同じような心情を得られるような空間を作ることとした。この時、作者が詠んだ風景の抽出も同時に行うが、季節のモデル作成のプロセスでは、心情を重要視した。風景が五感によって体得されるならば、五感と繋がる心情を空間化することで、風景を構築できると考えた。よって心情を形態化し、空間構成を試みた。

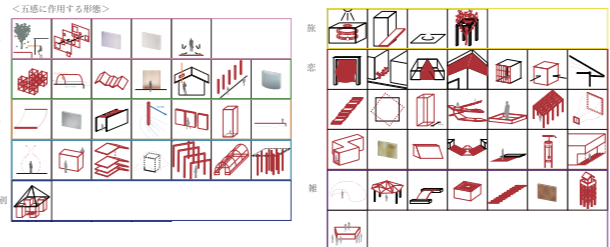


06. 風景の抽出と心情の読み取り

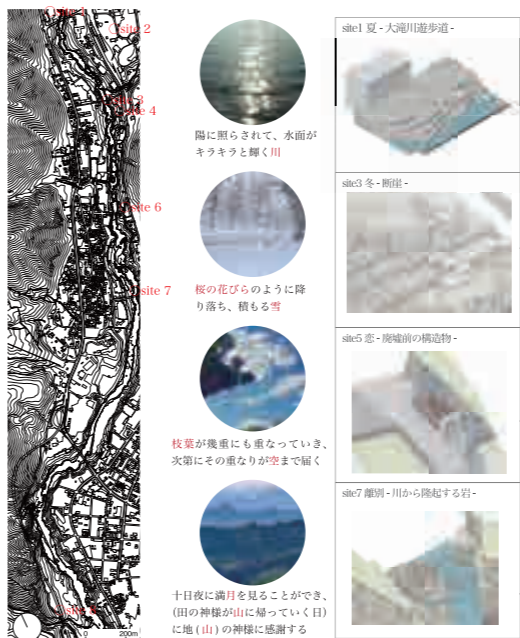
さらに分析していくと、作者たちは1つの風景に対して、風景を構成する「ある1つの要素」に焦点をあてている。例えば、「秋」のテーマに属す「み吉野の山の秋風小夜ふけてふるさと寒く衣うつなり (奈良の吉野の山に秋風が吹きわたる。夜がふけてかつての都は寒々と冷しく、衣を碇で叩く音が響いている。)」という歌から、「規則正しく碇で衣を叩く音」という風景が抽出でき、「寒々しさや寂しさが身にしみる」という作者の心情を読み取ることができる。



このような操作から、周辺環境を取り込みつつ、センシティブな空間体験をすることができる装置として、「五感に作用する形態」をいくつかの歌から作成した。



09. 連歌のように呼応するフォリー

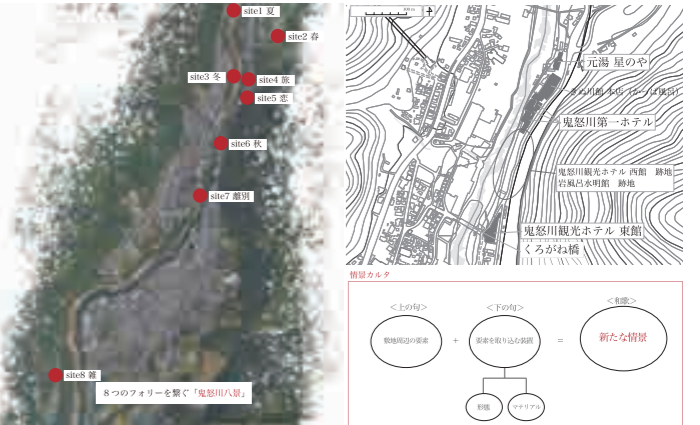


07. 対象敷地 栃木県日光市藤原

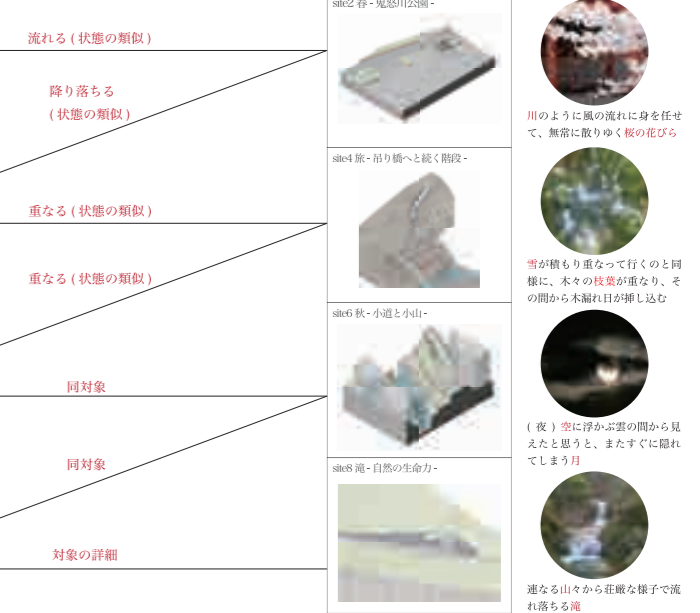
対象敷地は鬼怒川温泉ホテルが集う栃木県日光市藤原周辺とする。鬼怒川に沿って、既存環境を生かした8つの建築「鬼怒川八景」を計画する。川上から川下に向かって順に、site1 夏、site2 春、site3 冬、site4 旅、site5 恋、site6 秋、site7 離別、site8 雑とし、鬼怒川が8つのフォリーを結ぶような形で、順にフォリーを巡りながら、日光の新たな風景を体感できるような計画とする。

08. プログラム

設計手法は、自身が現地に訪れ、五感で捉えた「周辺を含む対象敷地の要素」を上への句とし、それらの「要素を取り込む装置」を形態やマテリアルから構成したものを下の句として、両者を組み合わせることで新たな情景を構築していく。これを以下「情景カルタ」と呼ぶ。この地に歌を詠むように環境を捉え、新たな風景を組み込むことで、現在の地域住民やこの地を訪れる外来者の風景に対する新たな感覚を創出することを目的とする。豊かな景観を有することで観光産業が栄えたこの街に、風景のポテンシャルを引き出す建築を点在させることで、渓谷から眺める四季折々の美しい風景を取り込みながら場を作り込み、人々が風景を巡ることができるような拠点を、新たな街のネットワークとして形成する。

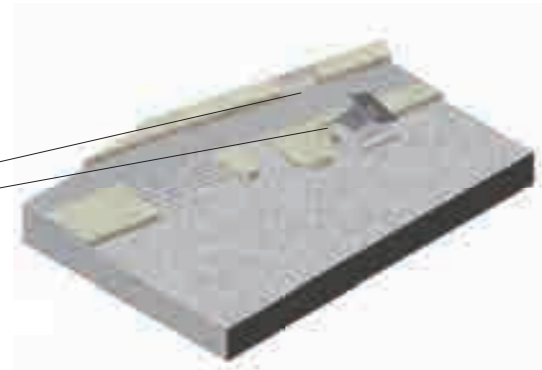
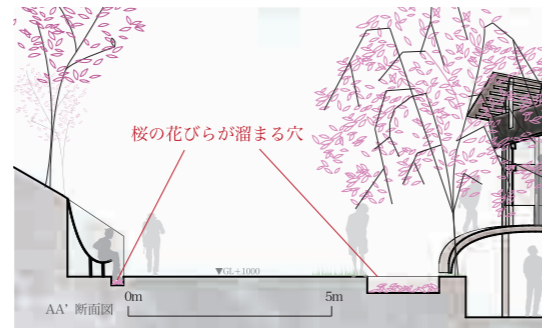
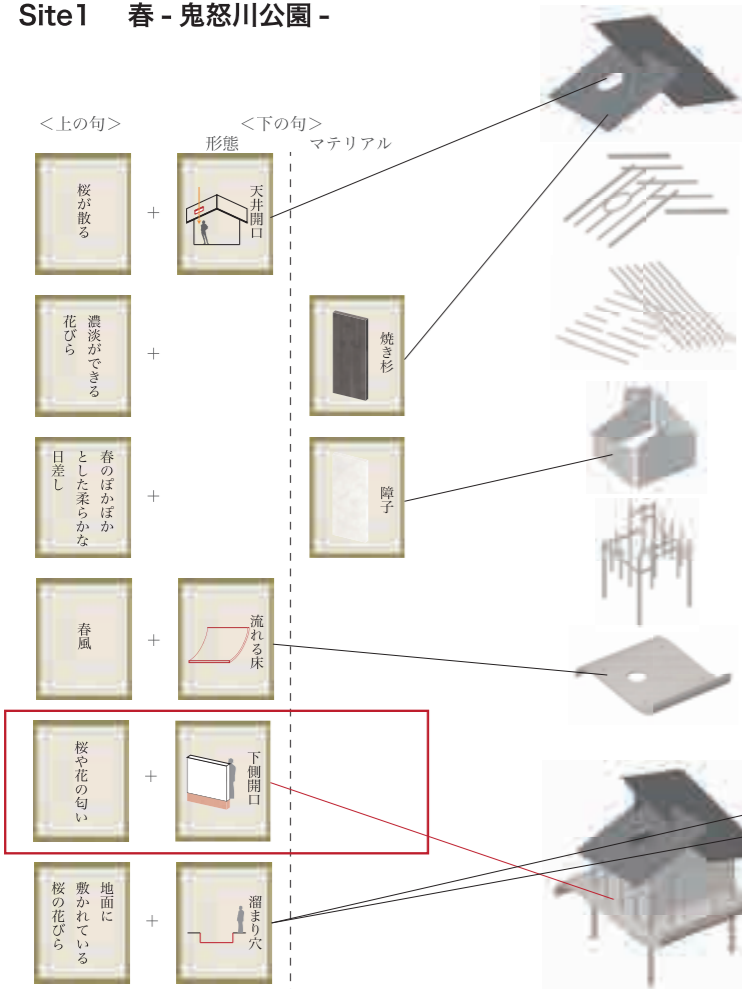


<繋がりキーワード>

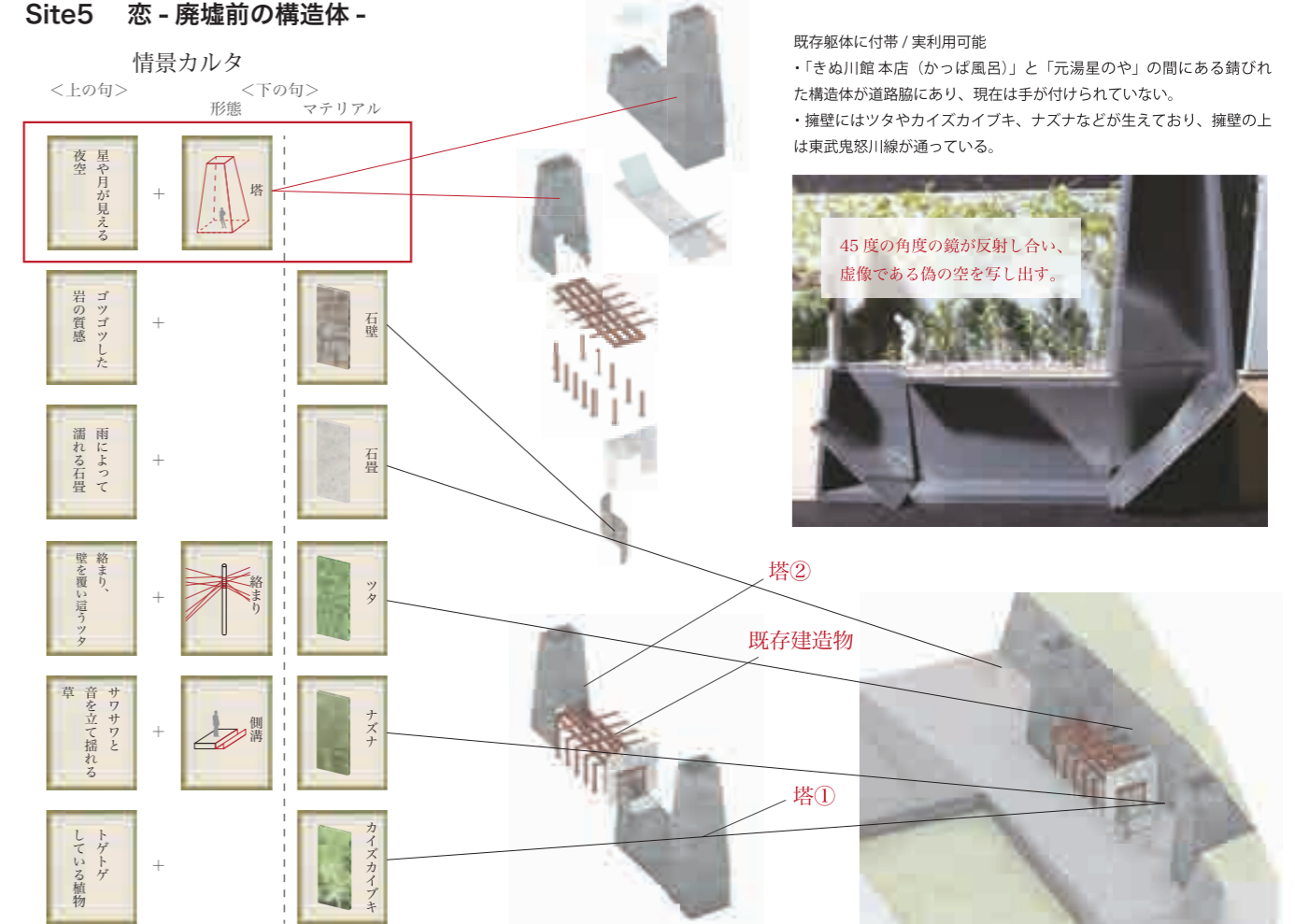




### Site1 春 - 鬼怒川公園 -

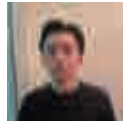


### Site5 恋 - 廃墟前の構造体 -





● 優秀賞



高田 晃  
Kou TAKADA  
内田・姜研究室  
UCHIDA・KANG lab.

## 歴史的建造物の内部空間における保存と活用に関する一考察

A Study on Preservation and Utilization of Internal Spaces of Historic Architectures.

—近代以降の国指定重要文化財におけるコンバージョンに着目して—  
- Focusing on the conversion of national important cultural properties after the modernera -

### 1. 研究背景・目的

筆者は歴史的建造物を残すことについて、その建物が歩んできた歴史を“体感”し、現在の建物の在り方を見直すきっかけとなる事にあることに意義があると考える。

歴史的建造物の活用が叫ばれる中、その方法として主流と言えるコンバージョンは、建物の外観は守られる一方で、内部空間は犠牲されやすいものとして普及を見せてきた。コンバージョンを想定したと言える登録有形文化財制度では、外観の改変に規制がある一方で内部空間の改変は自由であるため、これを裏づけるとも言える。

このような背景から、比較的内部空間は守られると考えられる近代の重要文化財建造物を対象として、それらの現在の活用状況、内部空間における保存と活用の関係性について時代ごとの傾向を明らかにし、内部空間と保存の関係について考察することを研究目的とした。

### 2. 研究対象・方法

近代以降の国指定重要文化財は 386 件あり、そのうち内部空間の活用が見られない宗教施設、土木構造等をは研究対象外とした上、288 件を本研究の対象とした。

また、建造物の活用について、「建築的側面」と「運営的側面」の 2 つの軸を意識して研究を進めた。図 1 の円の中心に示しているのが建物の残すという最終的な目標である。この最終目標に対するアプローチ方法は 2 つの側面があると考えており、1 つが上段に示した「建築的側面」と称した、復原工事や、用途など建築そのものに対するアプローチ、もう一つが下段の「運営的側面」と称する、イベントの開催等、建物を生かすための取り組みのことである。なお、「建築的側面」については保存修理報告書等による文献資料を、「運営的側面」については公開活用を行っている 204 施設に対するアンケート結果等をもとに検討した。

鈴木 どの年代から歴史的価値のある建物と言えるのでしょうか。

高田 建築物がいつ頃から価値を持つのか、どのような建築が価値を持っているかという部分は非常に不明瞭だと考えます。個人的には文化財登録制度の登録基準の一つである、築50年を経過したか否かという基準が、一つの指標としてわかりやすいと考えています。

中井 今回得られた結果の背景として、国等による財政的な支援なども影響があると思います。その点も踏まえて分析するとより説得力があると思います

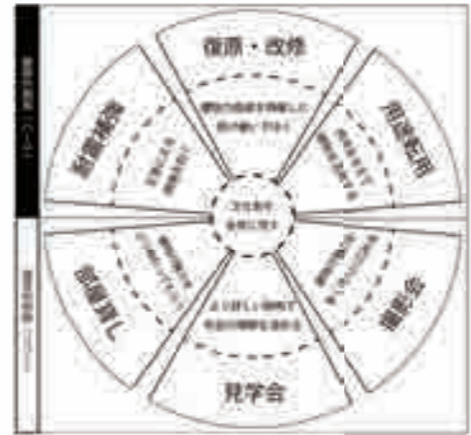


図1 文化財保存に対する2つのアプローチの概念図

### 3. 用途による分類

対象事例 288 件のうち、竣工当初の用途で用いられている事例「用途継続型」は 21% の 62 件、別の用途としてコンバージョンを行った「用途転用型」は 71% の 204 件、未活用は 22 件あった。ここで、近現代の重要文化財の多くが当初用途ではない使われ方がなされていることが読み取れる。

次に「用途転用型」204 件は、展示施設が 83 件 (41%)、一般公開が 79 件 (39%)、貸しスペースが 21 件 (10%) あり、そのほかに会議室、カフェ、ギャラリー等を備えた複合施設、レストラン・結婚式場等がみられた。とりわけ、「用途転用型」については、5段階の指標を設け内部空間の歴史性への尊重度合を分析した。内部空間にほとんど手を加えず、見学も予約制など公開を制限している「凍結保存型」は 18 件、常時公開と展示を行い、軽微な修理をしている「公開型」は 110 件、資料館等の要素があるものの、ほとんど当時のまま使われている「軽度活用型」は 36 件、展示ケース等が置かれ、用がありつ

つも雰囲気壊していない「活用型」は 36 件、高い展示ケース等が置かれ、建物の雰囲気が損なわれるようなものを「重度負担型」は 4 件であった。このことから現状の近代以降の重要文化財の大半が、内部空間の歴史的価値を尊重した活用方法であることが読み取れる。



図2 現状の用途による分類

### 4. 「用途転用型」における「建築的側面」の分析

次に、内部空間の歴史性尊重度合と復原工事の関係性、年代による変化をみてゆく。

保存修理報告書等もにこれまでの工事内容がわかる 25 件を対象に、各重要文化財指定建造物に施された工事のリスト化し、年表を作成した※。

例えば、香港上海銀行の場合、1975 年工事では天井が新たに貼るなど大胆な修理を行ったが、1992 年の改修後は復原という、歴史的価値を尊重した内部空間の使われ方をしている。

また、第五九銀行本店本館 (図 3) は、1964 年の移築工事時に床面がタイル張りとなされるなど復原と逆行する工事が行われ、内部は壁面を覆うようなパネルの設置やシャンデリア部分を隠すような展示がなされた。一方、1985 年の工事では、そのような使われ方がなくなり、比較的歴史性が尊重されることになる。

このように、40 件の工事内容の傾向として、1960～70 年代は歴史的建造物の活用について、比較的用途に頼りそれに合わせて内部を改変していた。ところで、1980 年代より、歴史的価値を生かした範囲で用途変化が読み取れた。



図3 第五十九銀行本館営業室の年代による活用の様子  
1964年工事(左)、1985年工事(右)

1980 年代が内部空間の活用方法の分岐点となる背景として、1960 年～70 年代にかけての保存への意識の高まりや法律の明文化が実際に現れ始めたことが考えられる。

### 5. 「用途転用型」における「運営的側面」の分析

近代以降の重要文化財 204 件を対象に「運営的側面」の実施内容、実施開始時期等のアンケート調査を行った (図 4)。回答が得られた 102 件のうち、職員による説明や、イベントの開催は各 67 件、59 件の施設が「実施している」と回答した。その他は 27 件あり、プライダグ関連のサービスを行っている事例もあった。

将来的な計画としては、イベントの実施をあげた回答が最も多かったが、飲食の提供を予定しているところが目立った。

また、活動開始年の回答があった、61 件の文化財における、136 事例の活動の開始時期について、年代による分布をみた。各事例の開始年を年代ごとの増加率を示したグラフ (図 4) をみると、1980 年代に最も増加率が高いことがわかる。

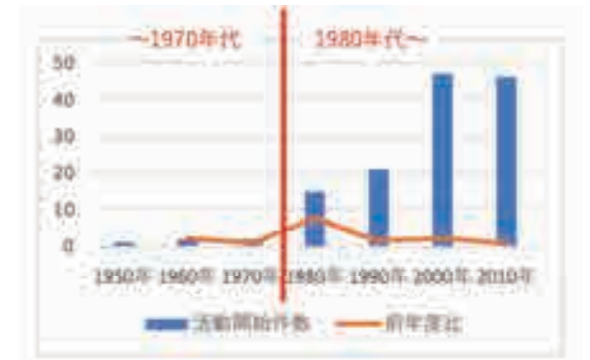


図4 アンケート調査の結果

運営的側面についても、1980年台を境に事例数の増加が見られる。

### 6. まとめ

重要文化財に見られる、1980 年代からの傾向は内部空間の歴史性を重視しつつも、「運営的側面」で補っており、一般的なコンバージョンとは逆の傾向が読み取れた。

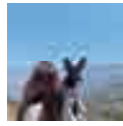
これに倣い、特定の用途を設けずに「運営的側面」を活性化することで、不要に内部の改変を行わずに新たな体験を生み出せるのではないか。このような活動の普及が望ましいと考える。

### 7. 謝辞

本論文を執筆するにあたり、ご指導いただいた内田青蔵先生、姜明采先生並びにご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

※) これらの工事は、通常の改修と判別するため、歴史的価値が認められた時期以降に行われたものに絞った。この判断基準として、保存運動があった、各行政の文化財に指定された、大学等の調査が入った等とした。

● 優秀賞



中澤 実那  
Mina NAKAZAWA  
中井研究室  
NAKAI lab.

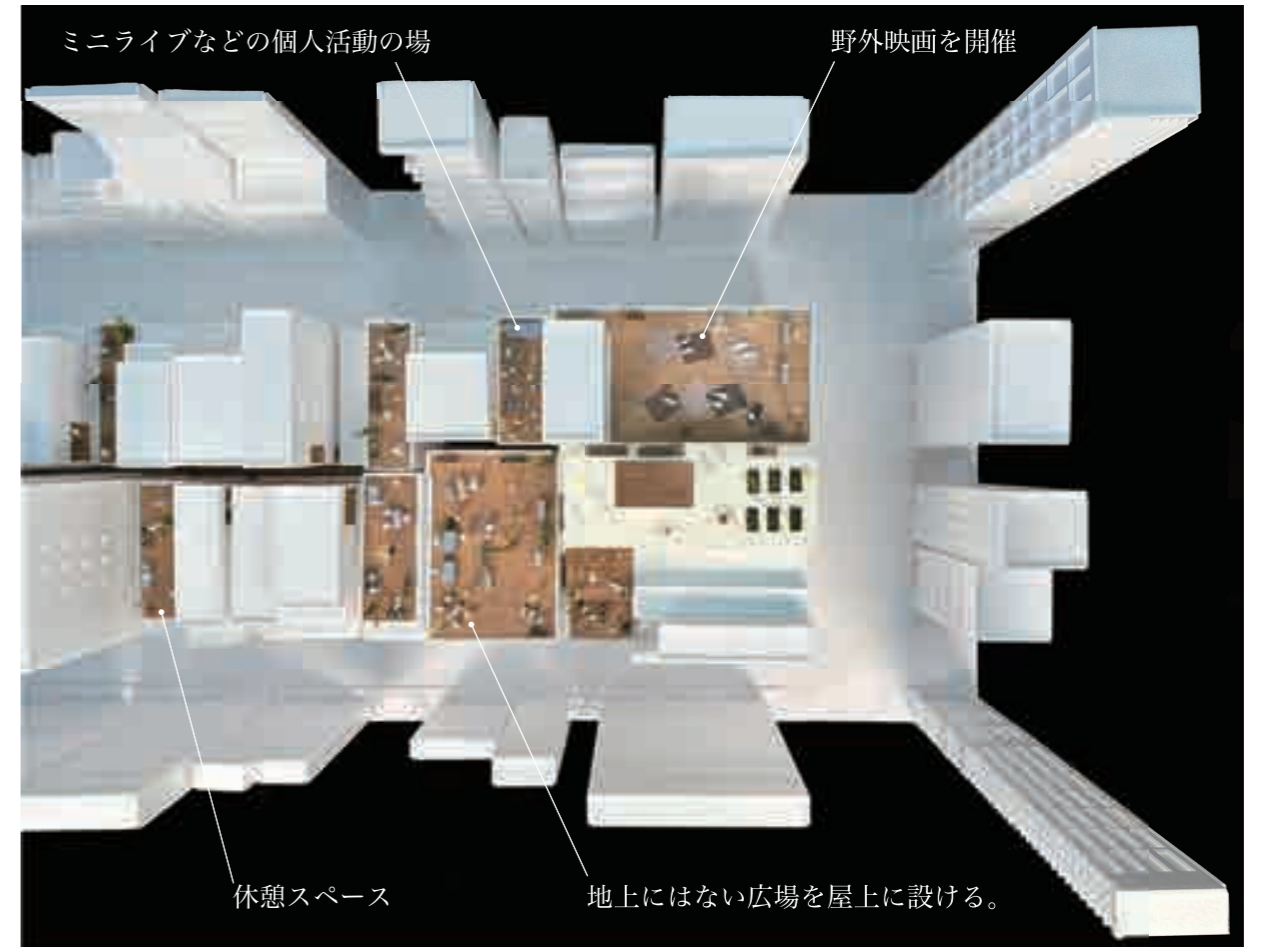
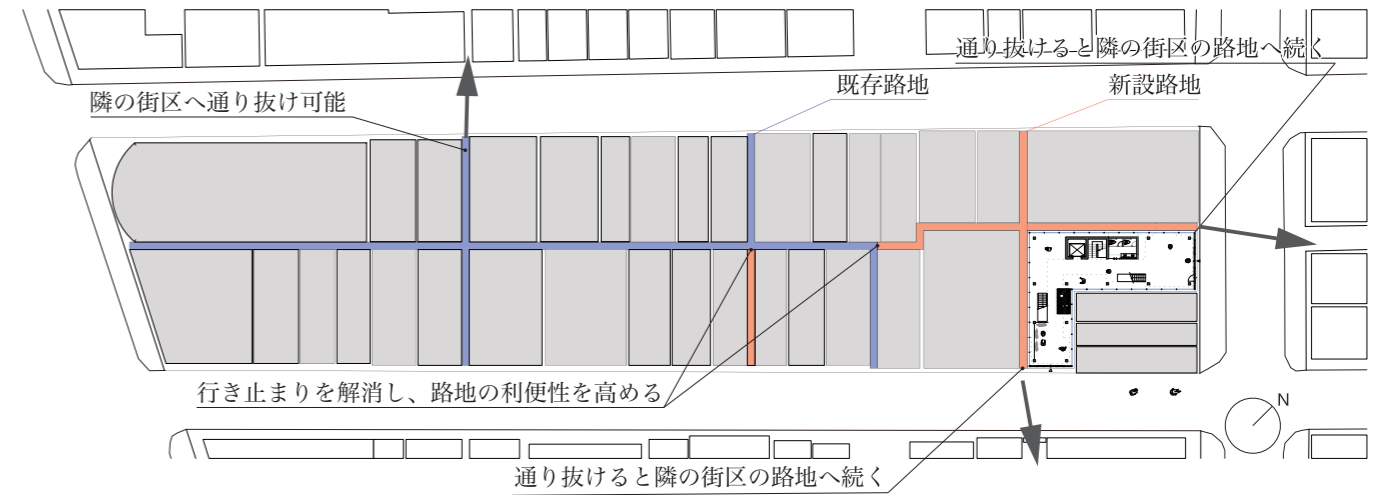
街区に入り込んだ路地空間の  
特性を活かした提案

The proposal for the utilization of unique characteristics  
of composing district blocks from alleyways.

-銀座の建物高さや道幅に着目した路地空間の研究-  
- The research of alleyways focused on building heights and road widths in Ginza, Tokyo -

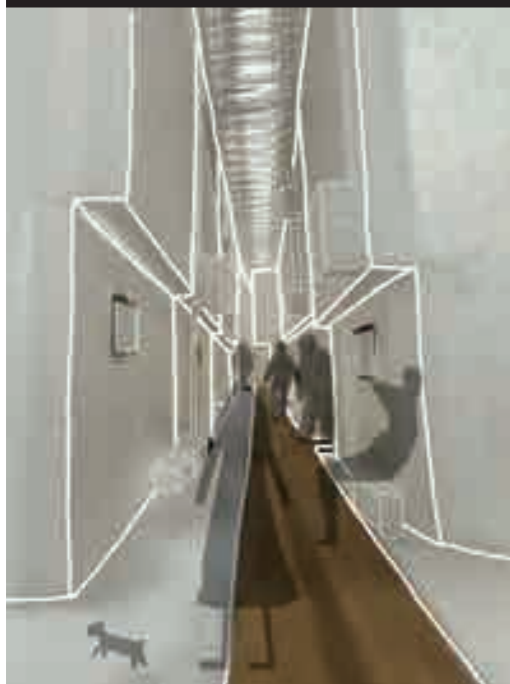
**野村** 繋がった部分の階高は合っていますか。  
**中澤** 階高は厳密には合わないかもしれませんが、同じような時代に建てられているので合う想定にしました。  
**山家** 3階、5階が入ってない建物があるのはなぜですか。

**中澤** 1階の路地空間のような、切り離された空間を作りたいからです。  
**山家** 新しい都市への提案や路地空間の可能性はどのように感じていますか。  
**中澤** 現在は有志で路地を残すような制度なので、路地が地上だけでなく建物内にも拡張していく街になったら新しい銀座になるのではないかと思います。





地上路地：半透明の床から自然光が差し込む



地上路地：半透明の床から自然光が差し込む



【屋上利用】  
設備を壁面に移動させ、スペースを設ける

【既存階段の利用】  
立体路地の動線となる



【半透明の床と天井】  
床を半透明にすることで3F部分の印象が  
時間帯によって変化する

【ギャラリー】  
キャンチレバーで作られた空間に絵画を飾り、  
路地を美術館のようにし賑わいをもたせる

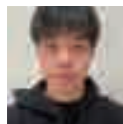
すでに屋上を利用している建物へ  
隣からアクセスできるようにした

【ポップアップショップ】  
気軽に出店できる

路地側に店を構える。既存店舗。

建物を連続して移動できる  
路地が通ることによって行動範囲が広がる

● 優秀賞



半井 雄汰  
Yuta NAKARAI

六角研究室  
ROKKAKU lab.

## 道くさいろは

*I-Ro-Ha of loiter on the road*

-こどもの道くさ観察から育む遊学路の提案-

*-Proposal for playing path nurtured from observation of children's loiter on the road-*



### 計画概要

通学路は子どもにとって唯一誰からも縛られない空間であり、様々な「道くさ」を行っている。こどもは道くさを行う過程で、まちを知り、まちを使い倒し、地域住人とのつながりを生む。しかし近年、こどもの通学路に対する安全意識の強化（例えばバス通学、防犯カメラ、スクールガード増員による監視等）によって、こどもの興味や好奇心が押し込まれているように感じる。そこで、安全を重要視しつつ、こどもが経験を通じてそれぞれが持ち合わせている人としての潜在能力を育む環境づくりを目指すために、こどもの道くさ調査、地域住人とこどもが活動する事例等をはじめとした調査を元に設計を行う。

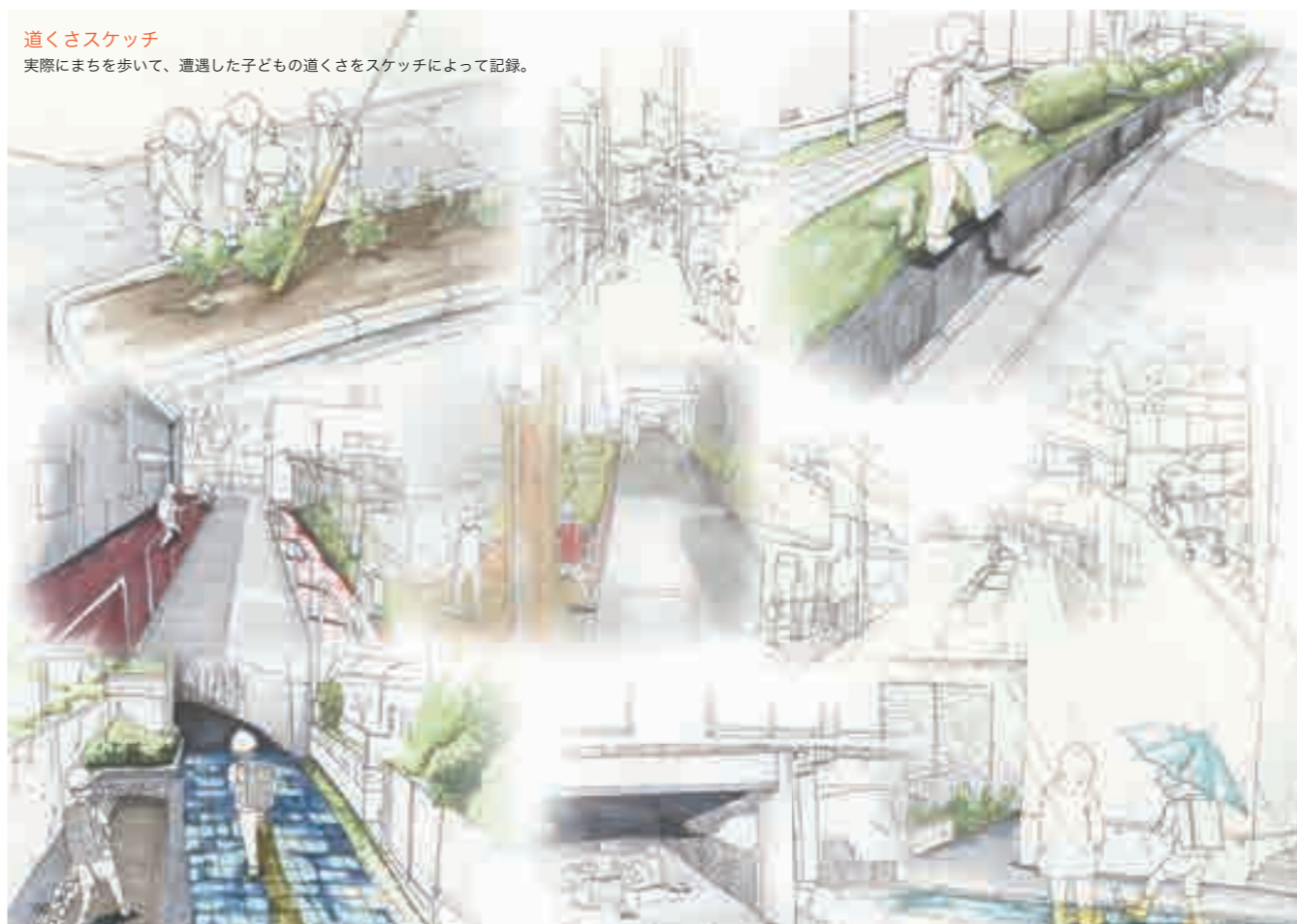


**上野** もっと子供が自然に遊びに出ていくような環境をソフトとハード両方で作ってあげる、人の手の入っていない場所が沢山あればいいと思います。

**半井** 自分の意思で行かないと体験ができないという環境が日常的に欲しいと思い、住宅街に提案しました。

**曾我部** 模型を見るとオープンに見えますが、東屋のように外の空気が中に入り込んでいるのですか。

**半井** 基本的には半屋外のような空間が続いています。遊学路自体には機能が入っている空間は無く、付随する食堂や工房と一体となって使う場所になっています。



### 道くさスケッチ

実際にまちを歩いて、遭遇した子どもの道くさをスケッチによって記録。

### フレームを彩る道くさ空間 -ケーススタディ-

道くさスケッチを基に、フレームに道くさ空間をデザインするスタディを行う。



**まちの遊学路**

建築の間を縫うように、一本の大きなこども公共空間を計画する。



場所を使いこなして遊ぶこどもたち



カルティバートリーダーと一緒に野菜を運ぶこどもたち



プレイリーダーと一緒に建築にペンキを塗るこどもたち

**遊学スポット**

まちの地域財産に付随するように、新たな遊学スポットを計画する。



**バッファーとなる植栽**

入り口には、フレームの空いた屋根からレモンの木へ光が送られる。決まった時期に、プレイリーダーを筆頭に地域住人やこどもと収穫祭を行う。

**大きな段差の舞台教室**

プレイリーダーと室内で遊ぶ。大きなデッキは遊学路側に開く。

**延長するフレーム**

遊学路から舞台教室に向けて伸びるフレームに椅子がつく。

**既存の飲食店の改修**

既存の飲食店の入り口を遊学路側にも設け、また開口をガラス戸とすることでこどもが中を気にするようにつくりとした。

**パufferとなる植栽**

フレームの周りには周辺とのパufferの役割を担うコンiferを植える。冬でもまちを彩る。定期的に、プレイリーダーを筆頭に剪定を行う。

**補償遊びの場**

夏場は梅雨の日陰で休み、涼む空間となる。つる性植物と絡まることでより凹凸のある静寂な空間を構築する。

**めくくれる大地のバス停**

遊学スポットとして「上り下り」「覗く」「遊ぶ」行為を誘発するような装置としてバス停を計画する。待つ人とこどもの交流点となる。

**ひきこむブロック席の地域食堂**

遊学路に対してひきこむブロックのある地域食堂。2階の部屋を1階とすらすらすることによって、部屋が飛び出したような空間を創出する。「誘導」と「注目」の手法を取り入れている。

**パufferとなる植栽**

食堂の周辺には力キを植える。収穫期では、こどもと一緒に収穫し、食堂で食べることができる。

**防壁設置**

住宅の一部を遊学路とし、プライバシーを守りつつこどもと適切な距離を保てる空間とする。

**延長するフレーム**

遊学路から煙に向けてフレームが伸びる。煙仕事中の休憩所となる。

**半の遊び場**

筒の中には梯子があり、「登る」ことができる。雨天時は筒が雨を誘導する役割を果たす装置となる。

**シンボルとなる植栽**

遊学路の中心には春から夏にかけて桜と梅が空間を彩る。

**延長するフレーム**

遊学路から階段に対してフレームが延長する。工屋に対して方向性を示す。つる性植物が絡まる空間を生み出す。

**大地を流す森工房**

遊学路に対して大きなピロティを持つ工房。流れる大地は「座る」「登る」「滑る」行為を誘発する。

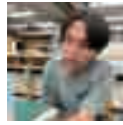
**パufferとなる植栽**

フレームの周りには周辺とのパufferの役割を担うマサキを植える。定期的に、プレイリーダーを筆頭に剪定を行う。

遊学路 A

遊学路 B

● 優秀賞



林 眞太朗  
Shintaro HAYASHI

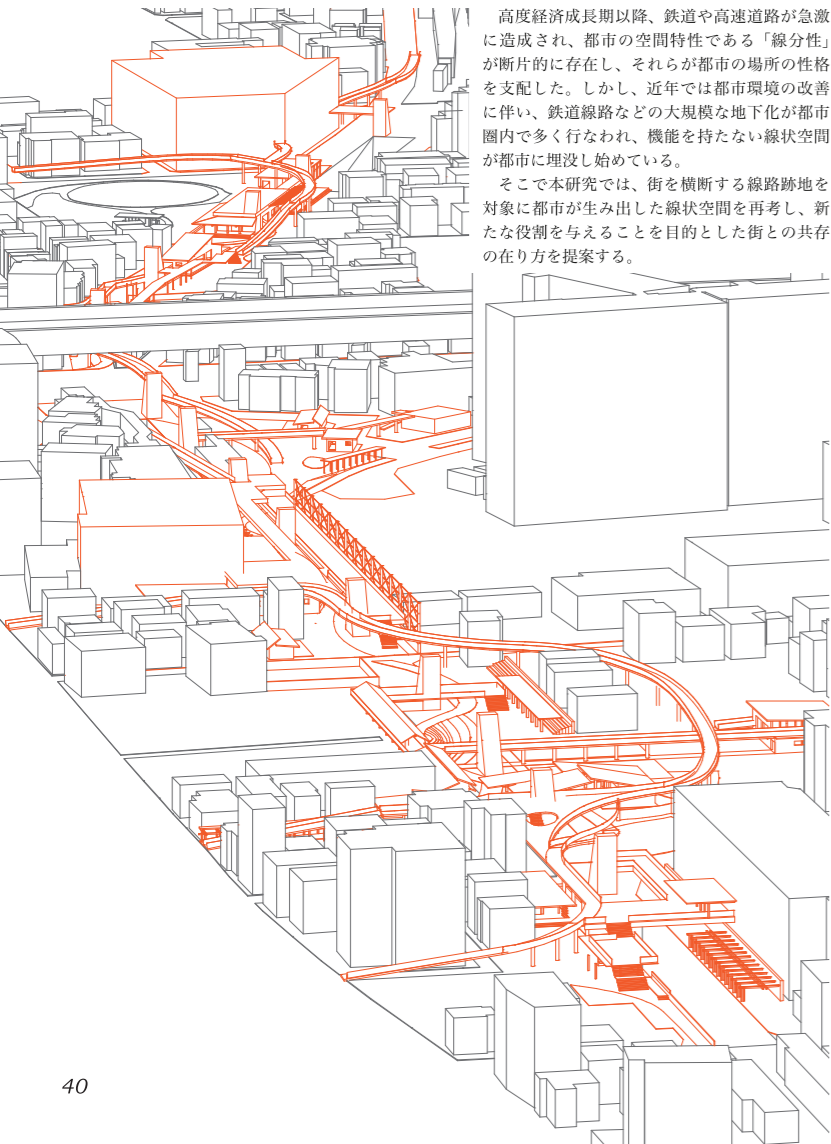
山家研究室  
YAMAGA lab.

### 1.3kmの線状空間の再考

Rethinking linear space of 1.3km

-連鎖型生活景を生み出す線状建築の提案-

-Proposal of a linear architecture that creates a chain of life-



高度経済成長期以降、鉄道や高速道路が急激に造成され、都市の空間特性である「線分性」が断片的に存在し、それらが都市の場所の性格を支配した。しかし、近年では都市環境の改善に伴い、鉄道線路などの大規模な地下化が都市圏内で多く行なわれ、機能を持たない線状空間が都市に埋没し始めている。

そこで本研究では、街を横断する線路跡地を対象に都市が生み出した線状空間を再考し、新たな役割を与えることを目的とした街との共存の在り方を提案する。



**中井** 線路が無くなって開放的な線上空間ができたのに、線路よりヘビーなものが入ってきて建物で分断しているように見えます。空間を使って周りの建物などを繋げないのですか。

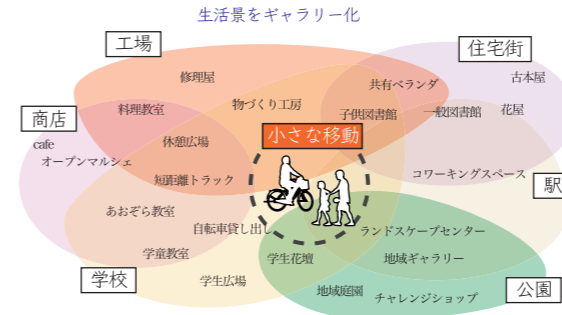
**林** 繋いでいるところは各所にあり、周りの空き家などが増えていったときにまた接続していくことを考えています。

**中井** 都市部の空き地は貴重なので素直に受け入れていい気がします。高架下の陰気臭いスペースをまた作っちゃっている気がします。

**林** 随所に余白を設けようと思っています。コア表を用いながら検討しました。

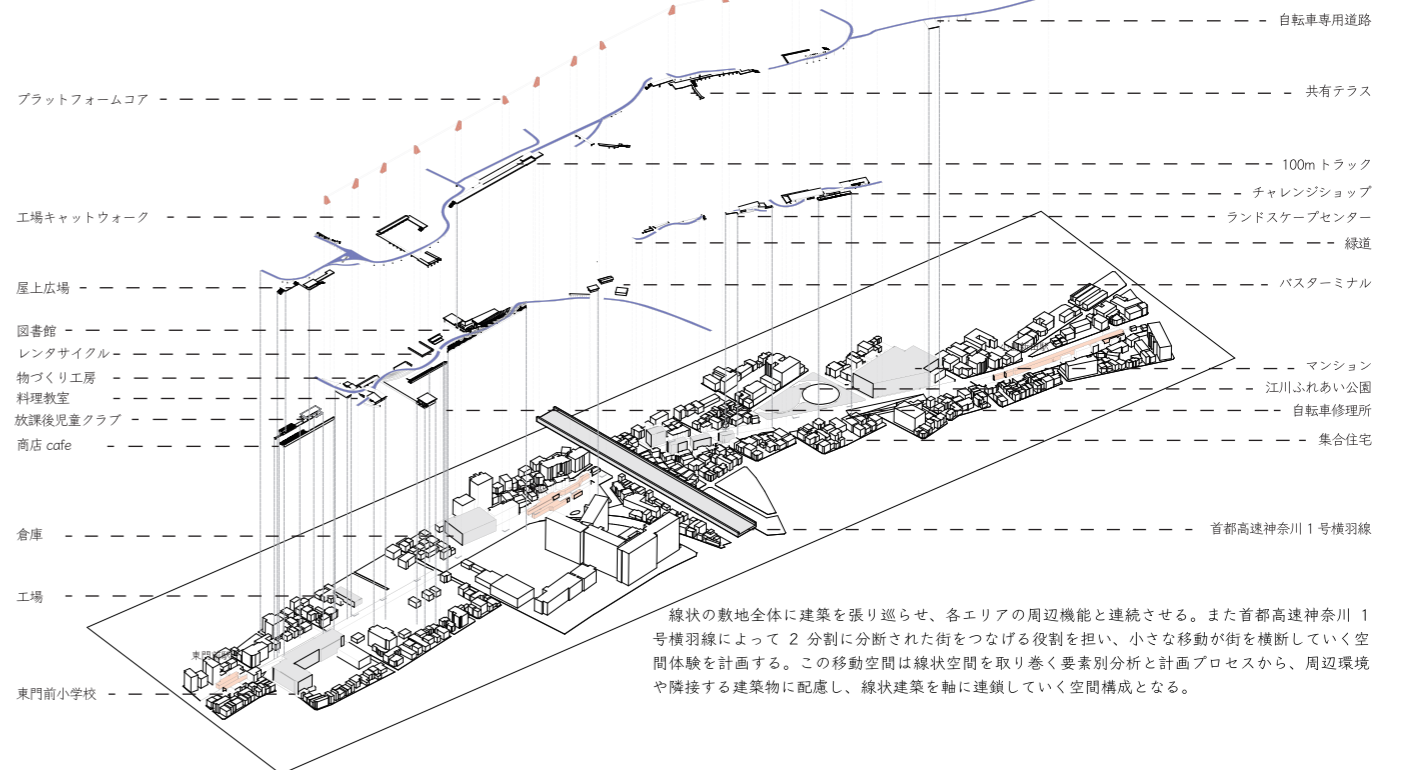
### プログラム計画

街を横断する線状空間に、小さな移動を支える街道とサイクリングロードを計画する。各エリアに存在する周辺機能を回転できるプログラムを挿入し、生活景をギャラリー化した移動空間を提案する。



周辺機能を支えるプログラムを横断するように小さな移動が流動的に介入していく計画。街の風景や地域独自の生活景を取り残しながら、内科治療的に再構築していく。

### 全体構成

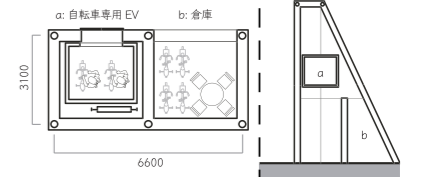


線状の敷地全体に建築を張り巡らせ、各エリアの周辺機能と連続させる。また首都高速神奈川1号横羽線によって2分割に分断された街をつなげる役割を担い、小さな移動が街を横断していく空間体験を計画する。この移動空間は線状空間を取り巻く要素別分析と計画プロセスから、周辺環境や隣接する建築物に配慮し、線状建築を軸に連鎖していく空間構成となる。

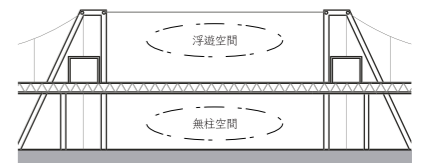
### 設計手法

「線状空間を取り巻く要素別分析」から街に存在する節を創出し、小さな移動のプラットフォームであるコアを挿入する。各エリアの用途や空間構成に合わせて主要構造体であるコアから、伸びるトラス梁や吊り構造を用いて各コアが連動する建築構成を提案する。

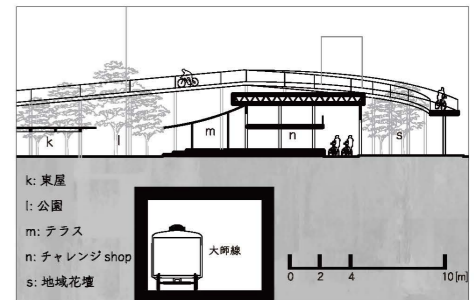
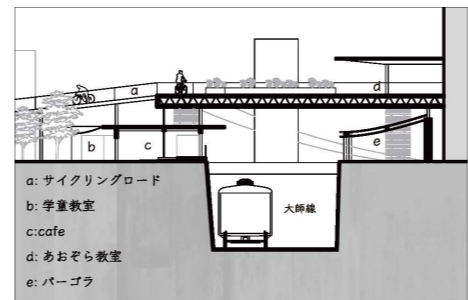
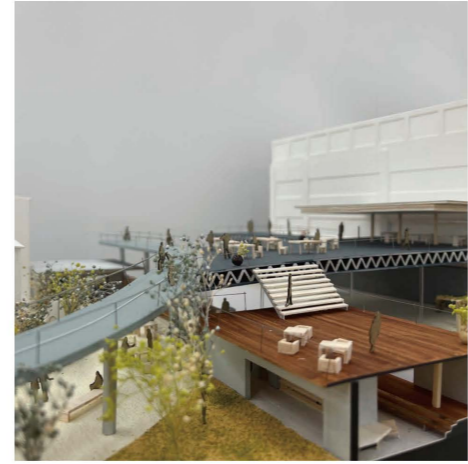
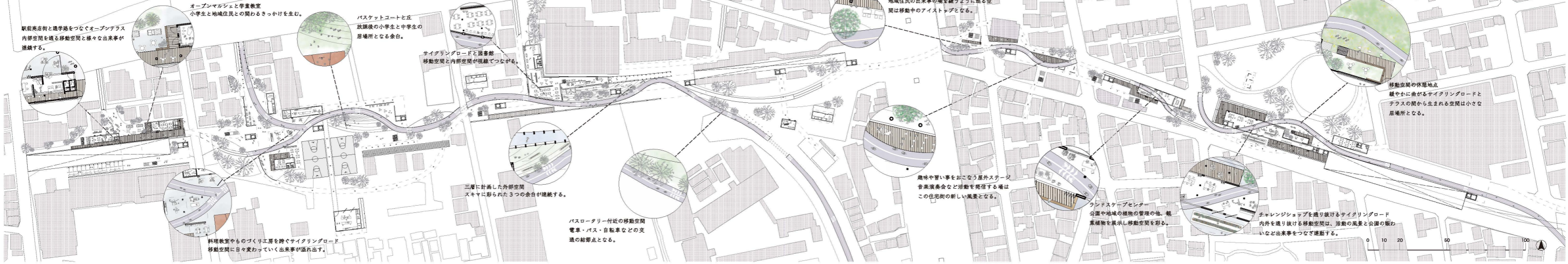
#### 移動・活動を支えるコア



#### 各コアの接続から生まれる大スパン空間



1F 平面図



● 優秀賞



林 淳平  
Junpei HAYASHI  
曾我部研究室  
SOGABE lab.

## 空間から人間へのトポス

From Topos for space to Topos for human

-暮らしの豊かさを求める、人為的連想空間の探求-

-The exploration of artificial associative space for an enrichment of life-

**鈴木** これは島や山に実際に行って感じたことですか。また、この計画は山を崩して作るのですか。

**林** 実際に行って感じました。元々ある地形ですが掘ったりはしています。

**鈴木** テーマに暮らしの豊かさとあります。それで均質的な空間ではない方が良いということだろうけど、最終的にあなたにとって暮らしの豊かさとはどういうものですか。

**林** 些細なことでも気付くことだと思っています。均質的な空間も嫌いではないのですが、ある面に対しては一つの矢印でしか見えないと感じます。今回はその矢印の本数や伝わり方を沢山作ってみたかったのでこのような設計になりました。

私は歪んだような空間に魅力を感じています

歪んだ隙間のようなところから歪んだ空間が隠していた手が見えるのです

それらが私に「空間の想い」を連れてきます

異なる空間の性格が異なる手のひらに想いをのせて わたしの内側をなせるのです

からり ひたり がばり くぬり そぞり ほとり ぐどり ぐわり

と

「空間の想い」を受け取るとき

わたしの精神は

もっとも豊かである



**ぐどり**  
隙間を縫うように入り込んだ  
この場所は私のためには無いようだ  
けれどもここに至るまで  
想いを留める場所があった気がする  
その居場所を見つけに行こうか



**そぞり**  
彼らは細かく蠢いている  
私は恐れを抱いている  
彼らのことを知らないからだろうか  
彼らに意識を向けていると  
私は彼らの部分となり始めている



**ひたり**  
ゆるやかな起伏が私を招く  
穏やかに包まれる空間は  
私が落ち着くまで待つようだ  
私の体は心を抱え込み  
ゆっくりと委ねゆく



**がばり**  
空間が私に語りかける  
水の流れか人の手か  
すでに消え去った出来事は  
穿った空間に名残を刻んだ  
名残が確かに存在を示す



**ぐわり**  
私は何を頼りに歩んでいたのか  
不自然にうねる空間は私の心身を揺らさせる  
何を指して歩むのか  
うねる斜面に重心が揺らぐ  
居場所が私を見つけられぬだろうか



**ほとり**  
大事そうに陽光を溜めている  
私はそれを分けて欲しかった  
私が触れることのできない大事なものを  
せめて少しでも近くへと  
私の心と身体は惹かれゆく



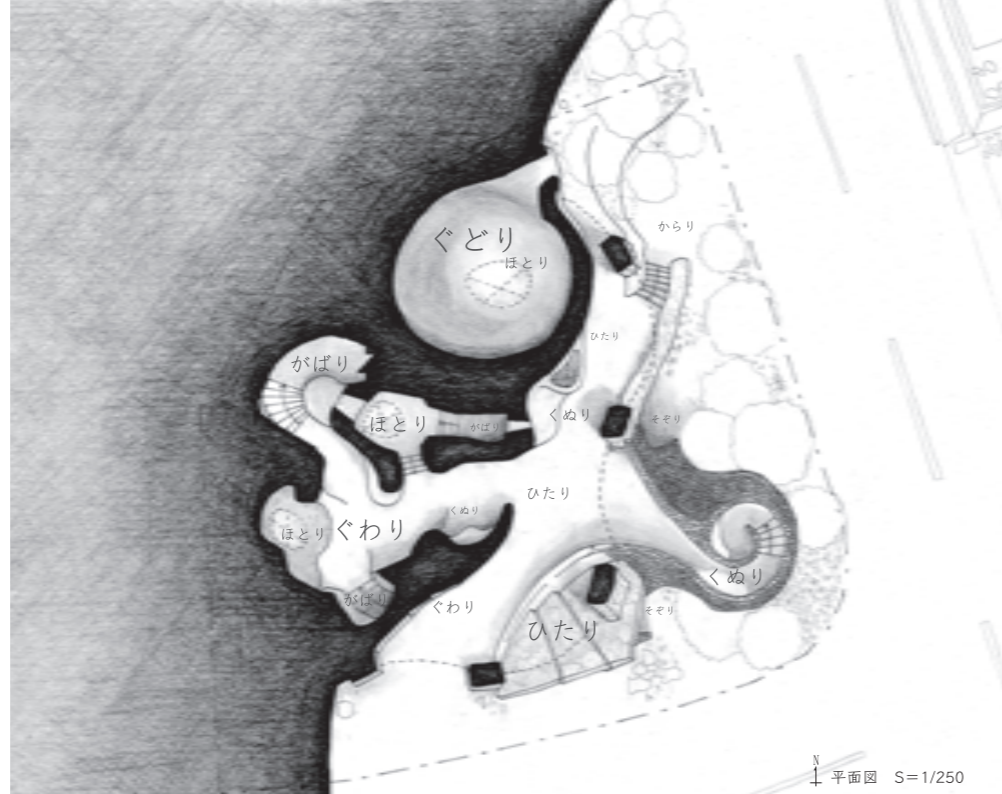
**くぬり**  
誰かがこの場にいたのだと  
空間に帯びる温もりが私に伝えてくる  
人の動きが目に浮かぶ  
やはり少し温かい  
私は彼らの隣に座る



**からり**  
大地と陽光の狭間にたどり着く  
私はようやく気づくのだ  
からやかな起伏が流れを創り出す  
水が流れ留まるかのように  
私の居場所はそこにある

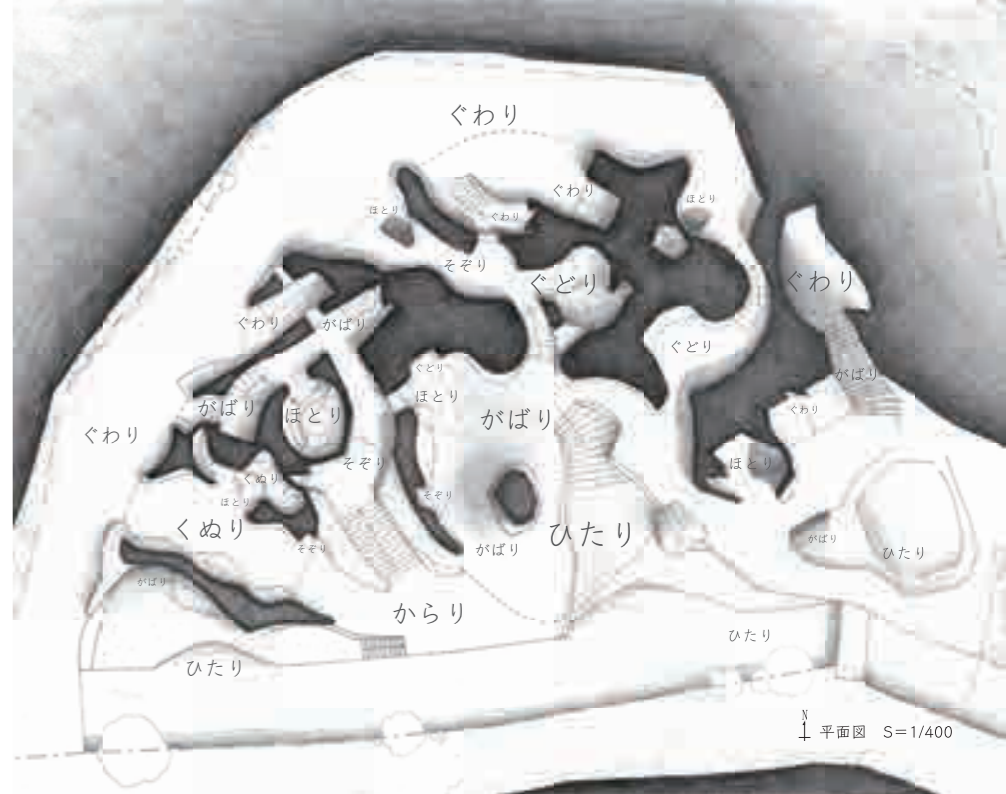
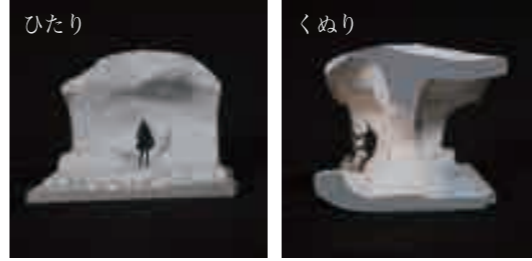
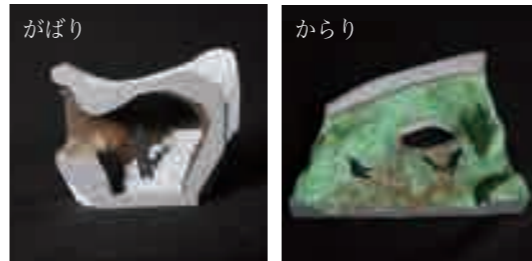
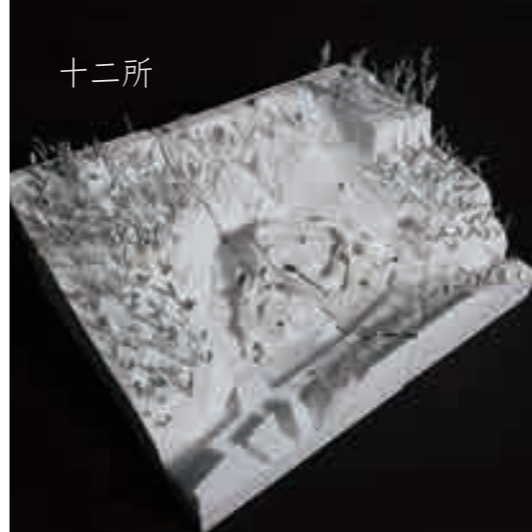


目神山町

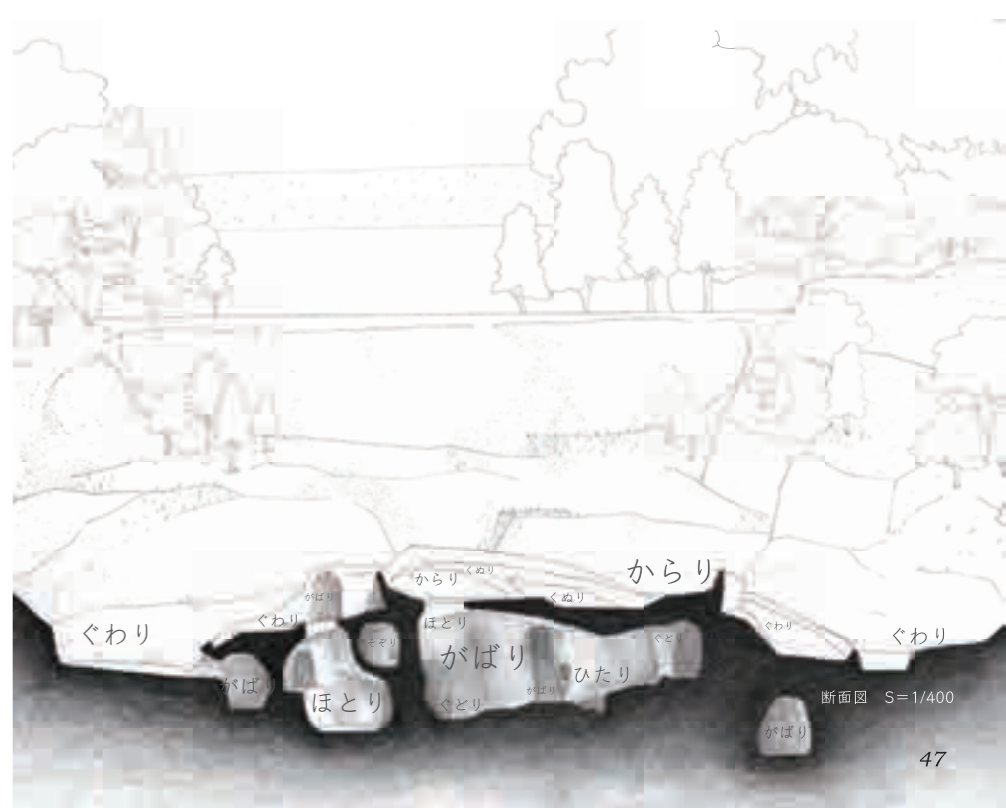


平面図 S=1/250

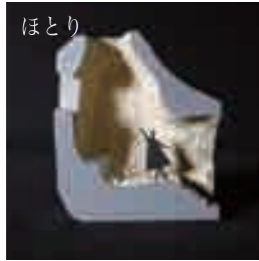
十二所



平面図 S=1/400



断面図 S=1/400



断面図 S=1/250

修士論文

池の静謐を混える ため池の多面的機能に対する再解釈と水との暮らし再考	井口 翔太
木の駅 まちなか木材を通じたコミュニティ形成の拠点	石谷 慶
郊外住宅地における戸建て住宅の増改築による再編と活用 増改築された住宅作品における室の接続からみた構成の再編手法を踏まえて	伊藤 伸一郎
ポータブルアタッチメントアーキテクチャ 都市の余白空間に隣接・付属する可動建築の可能性	永高 裕太
地域支援を行う既存教会の地域交流空間の提案 内外の繋がりにから見た現代日本のキリスト教会の開放性を踏まえて	小澤 美月
「働く」から考える集落の再興 ちいがき集落におけるサテライトオフィス	木嵐 峻貴
秦野市の中心市街地の再生計画 商店街における交流の場の提案	城所 真緒
現代の若者を束縛から解放する 中国の北京における多機能シェアハウスの提案	金 美善
まちと一体化した共同キャンパスの提案 静岡県三島市を対象として	日下 紗菜
石を掘ることと建築 大谷地域における新たな採石空間の提案	酒井 優人
◎ 開拓される鉄道土木 民芸的工法に基づく「関わりしろ」を持つ廃線跡地の建築提案	嶋谷 勇希
地域に開く港湾の再編 横須賀市田浦町臨海部を対象として	菅野 麻衣子
◎ 情景を詠む 和歌の作家たちの感受性に基づいた建築の提案	鈴木 碧衣

◎ 歴史的建造物の内部空間の保存と活用に関する一考察 近代以降の国指定重要文化財建造物におけるコンバージョンに着目して	高田 晃
Variable Interior 可変する空間設え	立田 大喜
★ 人間のためでもある建築	谷本 優斗
◎ 街区に入り込んだ路地空間の特性を活かした提案 銀座の建物高さ・道幅に着目した路地空間の研究	中澤 実那
◎ 道くさいろは こどもの道くさい観察から育む遊学路の提案	半井 雄汰
共同体感覚の形成 現代における生きづらさからの脱却	楢原 杏奈
離島文化を継承する建築 瀬戸内海塩飽諸島本島を対象として	丹羽 航平
◎ 1.3kmの線状空間の再考 連鎖型生活景を生み出す線状建築の提案	林 真太郎
◎ 空間から人間へのトポス 暮らしの豊かさを求める、人為的連想空間の探求	林 淳平
概念的な自然建築 都市における自然建築のあり方の提案	二見 陸
緑を保全し未来へ繋ぐ建築 座間市の骨格となる斜面林を対象として	松村 美里
ニュータウンの新たな住まい方の提案 横浜市栄区栄湘南桂台地区周辺を対象として	三谷 隆介
自然、村と人の関係 平定県娘子関鎮下董寨村における複合施設	連 金航

★ディプロマ賞 ◎優秀賞

卒業研究

三井田 昂太  
梅澤 達紀  
伊東 歩武  
福原 理子  
日田 聖人



卒業設計 ゲスト審査員



平 真智子  
Machiko TAIRA

平真智子一級建築士事務所



兼弘 彰  
Akira KANEHIRO

株式会社ユー・エス・シー

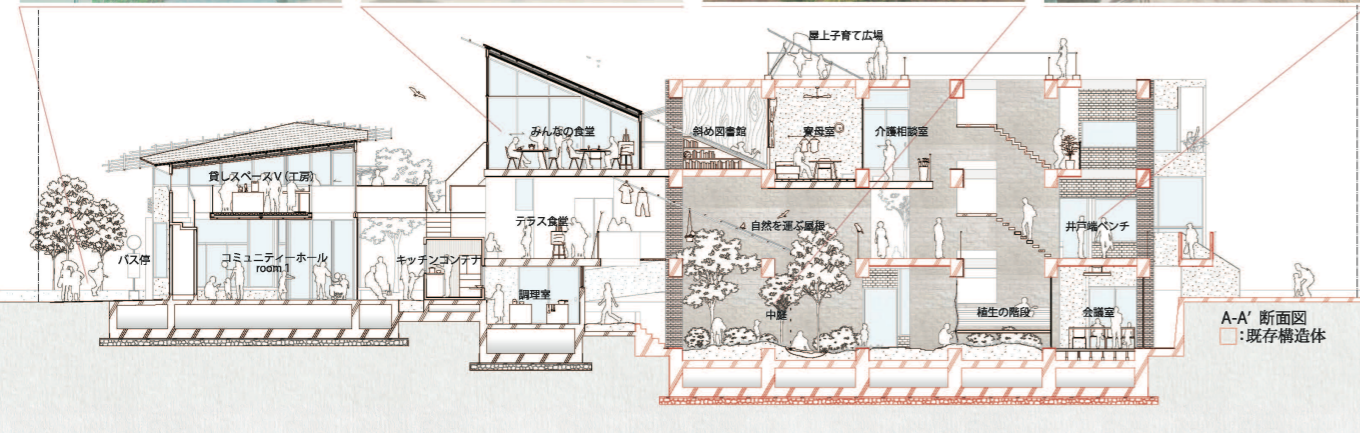
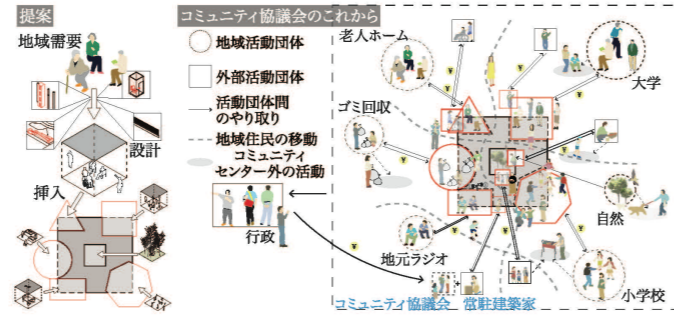
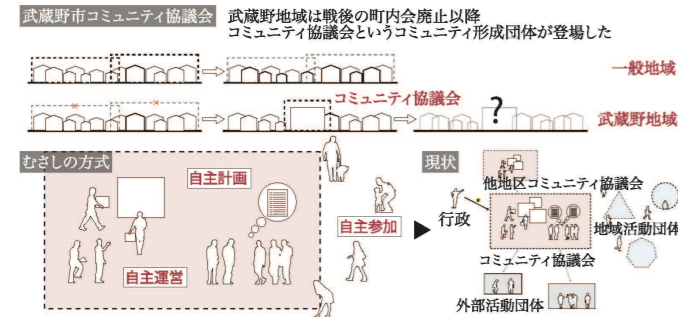
ディプロマ賞



自他の葺き替え

Reconstruct boundary between self and others

「むさしの方式」を背景としたこの先のコミュニティ形成建築  
Community formation architecture for the future with the "Musashino System" as a background



平 透け感にはどういう意図がありますか。

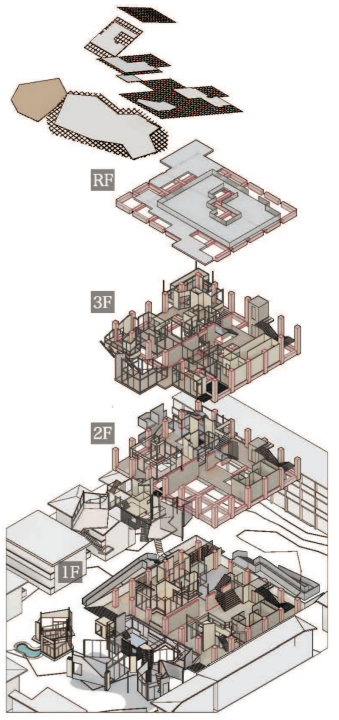
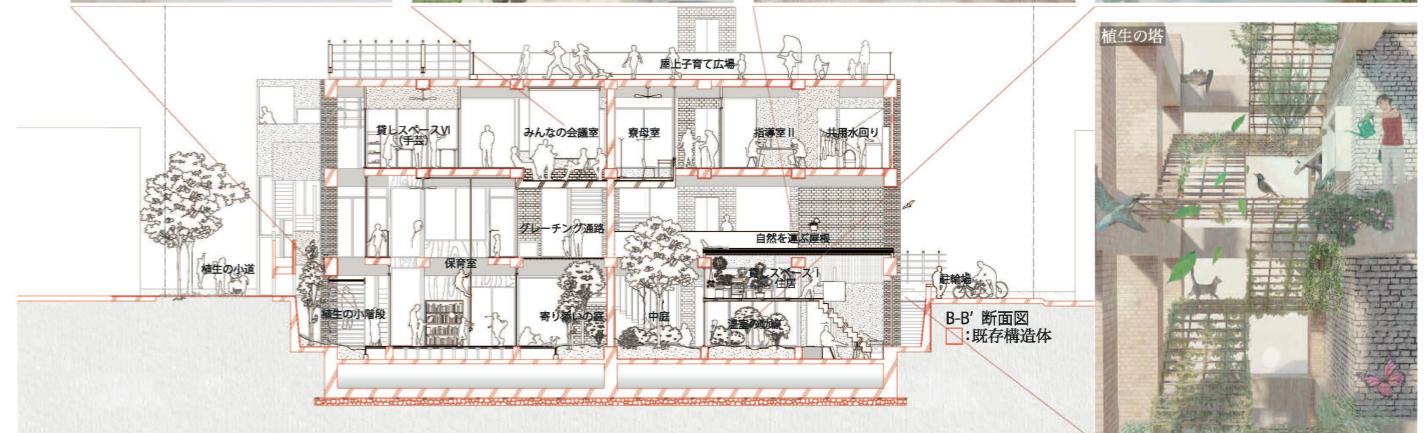
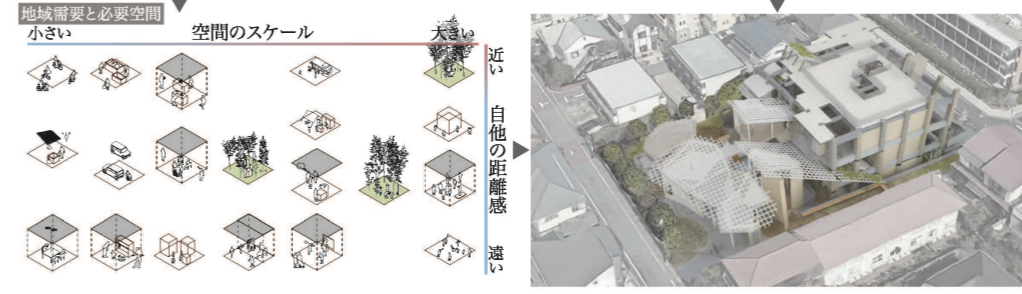
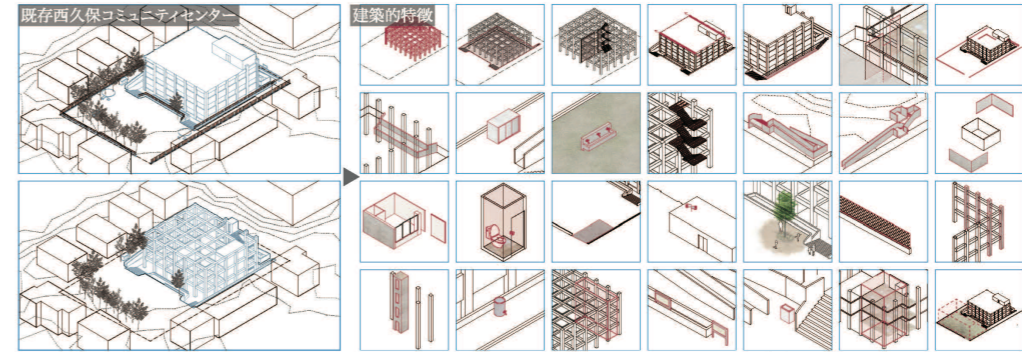
三井田 施設内での住民の思いや活動の意識を見たい  
と思い、透け感やグレーチングを用いました。

中井 立体的な空間のデザインとして吹き抜けや床  
の位置はどういう意図で決めたのですか。

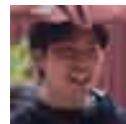
三井田 人の活動が見えることも重要なのですが、光を  
入れることや風を通すことを最優先しました。

中井 もう少し敷地を使い、スケルトン空間は吹き抜  
けなどでゆったりさせても良いのではないかと  
思いました。

三井田 外周部になるべくゆとりを持たせようとして  
壁面をセットバックさせました。



● 優秀賞



梅澤 達紀  
Tatsuki UMEZAWA  
六角研究室  
ROKKAKU lab.

## 一休集伝器

IKKYU SYUDENKI

祖母からの伝承と焼き鳥を介した集いの創出  
Traditions passed down from grandmothers  
and the creation of gatherings through yakitori

2022年7月私の祖母が経営する「やきとり一休」が47年の暖簾を下ろした。

47年間祖母が守り続けた一休の「秘伝のたれ」を継承するため、店舗の解体材を再利用した設計制作を行う。孫として一休を新たなかたちで再生し、建築学生としてコミュニティに参入するための相棒となる建築の設計を意図した。「一休」の焼き鳥が持つ、人と人を繋ぐ力を活用して地域活動を展開する計画である。



中井 カウンターなども廃材ですか。

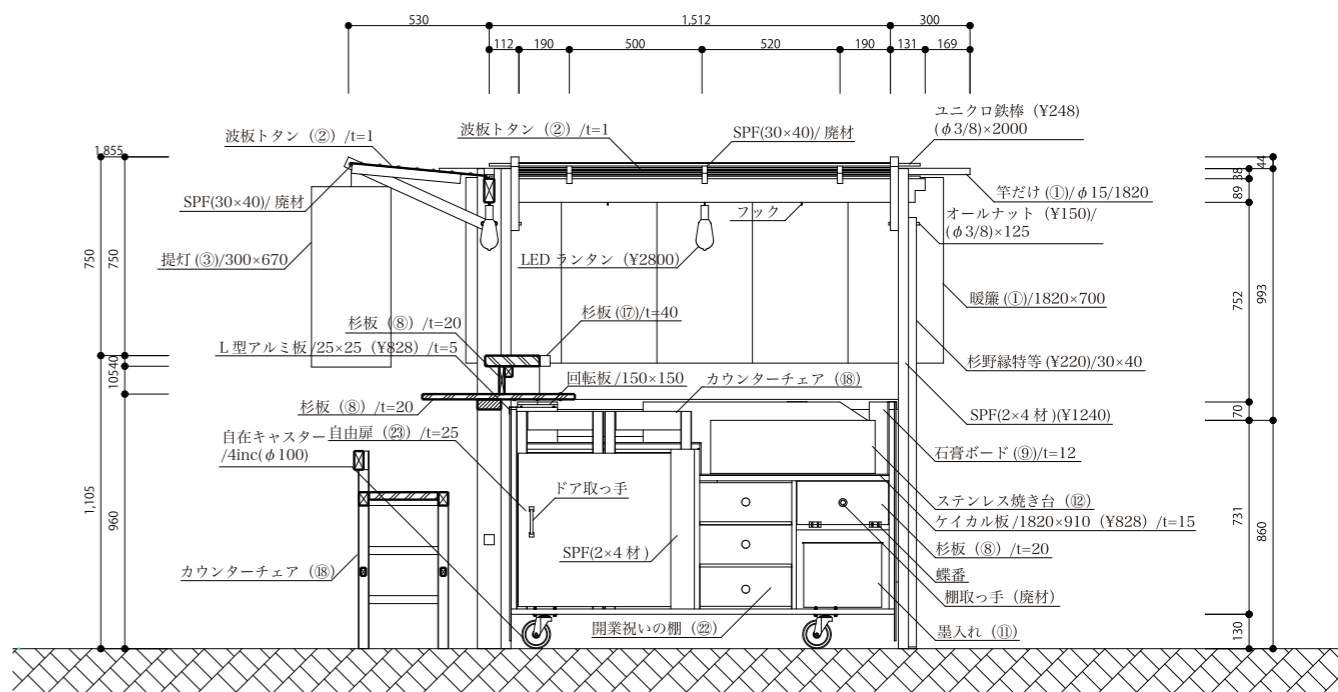
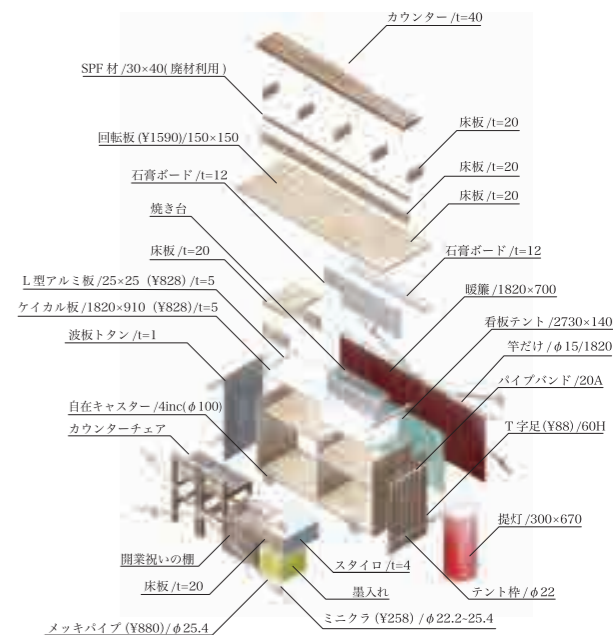
梅澤 そうです、そのまま使っています。トタンも外壁に貼られていたものを剥いで折り曲げています。

兼弘 お店で長く使われていたものを屋台にして動き回るといのはどういう発想からなのですか。

梅澤 祖母はお客さんと話すことにやりがいを感じていて、そこに魅力を感じ大事にしていきたいと思ったからです。

兼弘 お店が持っていた機能を別の形で街の中に展開していくツールを作ったということですか。

梅澤 そうです。



● 優秀賞



# 伊東 歩武

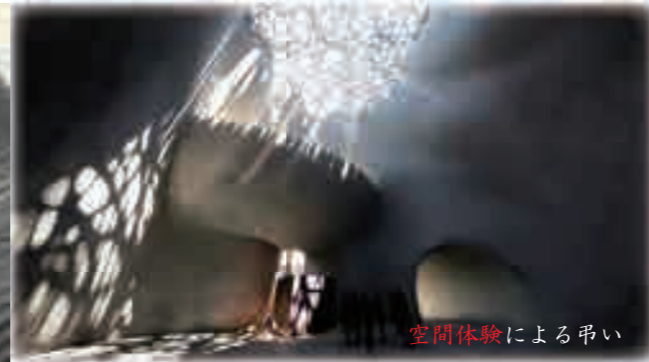
Ayumu ITO  
六角研究室  
ROKKAKU lab.

## 巡葬

Pilgrimage funeral

空間体験による偲びの場の提案

Spatial experience and mourning crematorium



空間体験による吊い

連続する光空間の中で葬儀を行う地下世界  
地下世界を垣間見る自然公園が広がる地上世界の二層構成

待合ノ間



告別ノ間



休息ノ間



通夜ノ間



最後ノ告別



拾骨ノ間



**上野** ご遺体とご家族の動線は別々ですか。動線と空間のシーンが一体になっているので、一緒に動くところがあってもいいと思いました。

**伊東** エントランスでの動線は別ですが、葬式場で合流し火葬から告別までは一緒に動いていきます。

**平** 設計でこだわったものは何ですか？

**伊東** 地表は日常的な自然公園の世界として、地下は非日常的な儀式空間の世界として設計し、二つの世界を層で切り替えることで空間体験のギャップを生むことにこだわりました。



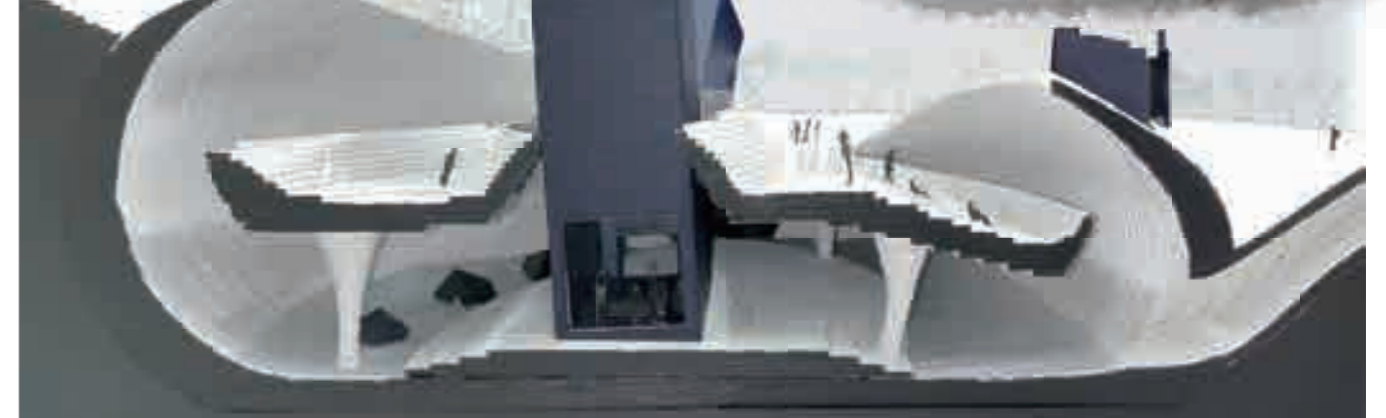
清メノ間



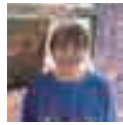
休息ノ間



火葬ノ間



● 優秀賞



**福原 理子**  
Riko FUKUHARA  
山家・柏原研究室  
YAMAGA・KASHIHARA lab.

**マナビノバから商いと暮らしが混在したまちを知る**

*Recognize where business and living coexist through the others livinghood*

藤棚商店街における集合住宅の提案  
*Proposal of housing complex in Fujidana shopping street*

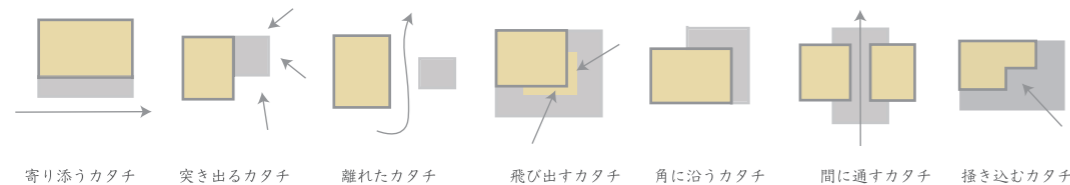
模型写真



Method 提案手法

ープライベート(住戸部分)とパブリック空間の関係性

■ 住戸 ■ 共用部



各住戸が共用部との間に 10㎡~50㎡のマナビノバを持つ。  
ー趣味の拡張、習い事の場所として住人たちは過ごし、共有していく。

**平** すごく楽しい内容で描けていいなと思いました。

**福原** 最初はガチガチで楽しそうな雰囲気は出てなかったのですが、一個一個住戸を解体して積み重ねる方法で作りました。

**兼弘** 屋根を沢山重ねたことにはどういう意図がありますか。

**福原** 隙間から街を覗くことを意識しました。

**須崎** 集落感がありGLから見ると薄暗いですが、これは迷宮都市みたいなものを意図したのですか。

**福原** ハノイの36通り地区が商店街の道沿いに住戸が増えていくような街なのですが、それを参考にしました。

Building 建築



## ●ディプロマ賞



日田 聖人  
Masato HIDA  
内田・姜研究室  
UCHIDA・KANG lab.

## 横浜に存在した遊廓建築の変遷過程

Changing process of the brothel architecture existed in Yokohama

—開港から関東大震災以前の外部意匠について—

- External design from the opening the ports to the Great Kanto earthquake -



図1 五雲亭貞秀「神奈川横浜新湊崎町遊廓花盛之図真景」万延元年3月<sup>1)</sup>

### 1. 研究背景・目的

1858(安政5)年、日米修好通商条約に基づき横浜が開港してから、現在の関内地区にあたる吉田新田の埋立地に外国人居留地と日本人街が形成された。同じ埋立地内にはアメリカ領事官タウンゼント・ハリスによる申請によって遊廓が建設された。

現在の横浜公園にあたる土地に建てられた遊廓は、「港崎遊廓」と呼ばれ、日本の三代遊廓に並ぶことはないが、開国直後の日本において外国人相手の接客が行われた珍しい事例であり、外資獲得によって東京の吉原遊廓に引けを取らない賑わいを見せていた<sup>2)</sup>。開港以前から外国人相手の接待をしていた長崎の丸山では、日本人と外国人の接触を極力避ける為、出島に遊女が出張して外国人の接客をしており、遊廓内の店舗で接客をしていたことは横浜の遊廓の特徴と言える。

横浜の遊廓は、火事の被害や政府からの要請で移転を繰り返し、「港崎遊廓」(1859~1866年)、「吉原町遊廓」(1867~1872年)、「高島町遊廓」(1872~1880年)、「永楽・真金町遊廓」(1888~1958年)の4つの遊廓が時代ごとに存在し繁盛していた。

遊廓はその性質上、決められた敷地に大小多くの店が立ち並び、そこで働く遊女達もその敷地内で生活する、1つの街であった。

**上野** 永楽・真金町の場合は震災と戦災である程度無くなったりしますよね。再建していくときに西洋化が進むなど、意匠的に何か変化はありましたか。

**日田** 残った建物は旅館やカフェなどに転用され、洋風意匠の建物は数多く残っていたと思います。しかし、2000年前後から老朽化などで建て壊しされたので、現在はほとんど残っていないです。

**中井** 最後に横浜の規制が洋風化に影響を与えた可能性を指摘しましたが、街全体の建築と同じような流れからなのか、遊廓独特の特徴があるのかどうですか。

**日田** 永楽・真金町は建設する際に県から風紀上の規制があり、条件をクリアするために洋風要素が取り入れられました。これは他の遊廓では見られない特徴かと思います。この規制が横浜全体に影響を与えたのかについては、今後の課題だと思います。

また、横浜の遊廓では唯一外国人への接客を認可されており、非日常的で独特な空間として存在していたと考えられるが、その既往研究は少なく、とりわけ建築についてはほとんど注目されてこなかった。

そこで本研究では、文献、古写真、絵地図、浮世絵等の資料を使い、戦前期の横浜に存在した遊廓の建築的特徴を明らかにすることを目的とする。

### 2. 画像資料からみる各時代の遊廓建築の外観について

遊廓に関する資料は、浮世絵や古写真などが残されている。その中でも『横浜浮世絵集大成』では「港崎遊廓」の様子が、『花くらべ』では「永楽・真金町遊廓」の様子が多く残されており、本研究では、これらの資料をもとに建築的特徴をみていく。

表1 横浜の遊廓の各資料

資料名	調査対象	調査時期	調査場所
『横浜浮世絵集大成』	『花くらべ』	1979	神奈川県立博物館
『花くらべ』	『花くらべ』	1979	神奈川県立博物館
『横浜手彩色写真絵葉書目録 1900-1920』	『横浜手彩色写真絵葉書目録 1900-1920』	2022	横浜市役所
『横浜手彩色写真絵葉書目録 1900-1920』	『横浜手彩色写真絵葉書目録 1900-1920』	2022	横浜市役所

#### 2-1. 港崎遊廓について



図2 二代広重「横浜岩亀見込之図」<sup>11)</sup>

「港崎遊廓」については『横浜浮世絵集大成』に掲載されている港崎遊廓関係の浮世絵39点と、『横浜市史稿風俗編』等の文献から分析する。

開港に伴って建設された「港崎遊廓」は伝統的な和風意匠の木造建築で遊女屋が建ち並ぶ遊廓であったと考えられる。しかし、「港崎遊廓」で最大規模の遊女屋「岩亀楼」は、唐破風を用いた小屋を持ち、松文様の花頭窓が他の遊女屋との大きな違いであったと考えられる。

また「岩亀楼」は、内部が豪華絢爛な様子であった事が8点の浮世絵に描かれており、日本庭園や格天井、椅子座式の部屋から、遊女屋とは思えぬ豪勢な空間で外国人の接客をしたと考えられる。

#### 2-2. 吉原町遊廓について

吉原町遊廓については、文献資料で当時の様子が語られている。

「吉原町遊廓」では、1866(慶応2年)年の豚屋火事による損失の影響が遊廓全体が粗造な建物で構成され、「港崎遊廓」の頃のような豪華絢爛な様子は見られなくなり、各遊女屋の規模も縮小されるが、遊女屋の総数は「港崎遊廓」に比べて増加しており、火事によって再度移転した先の「高島町遊廓」では、「岩亀楼」や「神風楼」が三階建ての大楼を建てられるほど、外資獲得によって経済的に持ち直していることから、「吉原町遊廓」でも引き続き外国人で賑わっていたと考えられる。

#### 2-3. 高島町遊廓について

「高島町遊廓」について『横浜市史稿風俗編』と『文明開化期の横浜・東京〈古写真でみる風景〉』から写真6点が発見できた。

「高島町遊廓」では、2度の火事による焼失から防火の機能に注力したためか、耐火性の優れたなまこ壁を使用した建物が登場し、大通りの道幅も広くとられている。

「岩亀楼」では、日本人館と外国人館の2棟を建て、外国人館の屋上には時計塔を設けている。なまこ壁や時計塔は擬洋風建築に見られる特徴でもあり、内部にのみ洋風要素が持ち込まれていた「港崎遊廓」と比較して、「高島町遊廓」では外観にも洋風要素が散見している。

#### 2-4. 永楽・真金町遊廓について

「永楽・真金町遊廓」については、横浜開港資料館に貯蔵されている冊子『花くらべ』に掲載されている写真と横浜絵葉書倶楽部の『横浜手彩色写真絵葉書目録 1900-1920』に掲載されている絵葉書を中心に、64の店舗について分析した。

この時代の遊廓の特徴としては、ガラス製の引き戸を取り付けた遊廓が64店舗中37軒確認でき、丸いガス灯が取り付けられるなど、今まで見られなかったインフラ整備への動きも表れている。

また、「永楽・真金町遊廓」では、擬洋風建築にとどまらず、煉瓦造で建てられた遊女屋や洋風板張りで建てられた遊女屋の登場によって、建物の外観に洋風要素がさらに表れるようになったと考えられる。なお、手摺子や柱頭装飾、ピロティなど一部分のみ洋風要素を取り入れた遊廓も現れ、遊廓全体で洋風意匠の要素が増加していく傾向がみられた。



左:図3 高島町時代の「岩亀楼」『横浜市史稿：風俗編』<sup>12)</sup>

右:図4 永楽町1丁目8番地『横浜 手彩色写真絵葉書 目録 1900~1920』<sup>13)</sup>

### 4. 結論

本研究で明らかとなった内容は以下の通りである。

①「港崎遊廓」では、「岩亀楼」のみ洋風要素が取り入れられており、外国人だけでなく日本人が豪華絢爛な建物を見物する為だけに訪れるほど、当時は珍しい洋風意匠の要素を取り入れた遊廓であったと考えられる。

②「吉原町遊廓」では、板張りの建物が増え、外国人相手の店舗が増加したと考えられる。

③「高島町遊廓」では、なまこ壁や時計塔といった擬洋風建築の要素が表れ、洋風意匠の要素を持つ遊廓が増えていったと考えられる。

④「永楽・真金町遊廓」では、煉瓦造や洋風板張りの遊女屋の登場やガラス戸の設置など、遊廓全体で建物の外観に洋風意匠の要素がさらに増えていくようになったと考えられる。

一方、張見世や外廊下といった遊廓特有の要素は廃れることなく残り続け、横浜における遊廓の全ての遊女屋がには和風と洋風の意匠が混在し、当時の横浜居留地でみられた建築と同様な特徴が確認できた。この背景には居留地といった横浜の地理的状況と、外国人集客といった建物の性格が大きな影響を与えたと考えられる。

### 5. 注釈

1) 神奈川県立博物館『横浜浮世絵集大成』有隣堂1979 p.19 2) 神笠秀雄『花くらべ』五味文庫1916 p.65 3) 神奈川県立博物館『横浜浮世絵集大成』有隣堂1979 4) 横浜都市発展記念館『文明開化期の横浜・東京〈古写真でみる風景〉』有隣堂2007 5) 神笠秀雄『花くらべ』五味文庫1916 6) 横浜絵葉書倶楽部『横浜 手彩色写真絵葉書 目録 1900~1920』2022 7) 横浜市役所『横浜市史稿風俗編』三秀舎1932 8) 横浜貿易新報社『横浜開港側面史』1967 9) 川口正英『港都横浜：そのうつりかわり』ブックス二宮1984 10) 下川耿史、林宏樹『遊廓をみる』筑摩書房2010 11) 神奈川県立博物館『横浜浮世絵集大成』有隣堂1979 pp.201-202 12) 横浜市役所『横浜市史稿風俗編』三秀舎1932 口絵35 13) 横浜絵葉書倶楽部『横浜 手彩色写真絵葉書 目録 1900~1920』2022 pp.424-425

<span>平 真知子</span>
<span><i>Machiko TAIRA</i></span>
<span></span>
<div>神奈川県生まれ</div> <div>1989年 東京工業大学卒業</div> <div>1991年 東京工業大学大学院修士課程修了</div> <div>1991年～1994年 日本設計</div> <div>1995年 独立後、矢野真知子一級建築士事務所設立、平真知子一級建築士事務所へ改称</div> <div>2005年～木の建築賞実行委員</div> <div>2010年～2017年 芝浦工業大学デザイン工学科非常勤講師</div>
<span></span>
<div>個人住宅の設計に携わっている。</div> <div>共著に「住宅インテリア究極ガイド」（エクスナレッジ社）ほか。</div>
<span></span>

平真知子（左）と佐藤大輔（右）の共著「住宅インテリア究極ガイド」の表紙。平真知子（左）は表紙のイラストに描かれている。

平真知子（左）と佐藤大輔（右）の共著「住宅インテリア究極ガイド」の表紙。平真知子（左）は表紙のイラストに描かれている。

## 兼弘 彰

<span>兼弘 彰</span>
<span><i>Akira KANEHIRO</i></span>
<span></span>
<div>神奈川県生まれ</div> <div>1992年 東京芸術大学大学院美術研究科建築専攻修了（前野研究室）</div> <div>ハーバード大学建築学部（G.S.D）に留学</div> <div>1997年～株式会社 山手総合計画研究所</div> <div>2002年～株式会社 ユー・エス・シー 代表取締役</div> <div>関東学院大学建築・環境学部非常勤講師</div> <div>関東学院大学人間共生学部非常勤講師</div> <div>一級建築士 第288636号</div> <div>文化財建築物修理主任技術者</div> <div>横浜市まちづくりコーディネーター</div> <div>ほどがや人・まち 文化振興会事務局長</div> <div>よこはま洋館付き住宅を考える会代表</div>
<span></span>

大学院時代から歴史的建造物の保存に関わりを持ち、現在まで横浜を本拠地として全国の文化財保存修理設計に携わってきた。市民活動団体を主催し歴史的建造物の保存支援を続けている。現在非常勤講師として関東学院大学で保存再生設計を教える。2024年度より建築学部非常勤講師就任予定。

兼弘彰（左）と佐藤大輔（右）の共著「住宅インテリア究極ガイド」の表紙。兼弘彰（左）は表紙のイラストに描かれている。

現代社会の中で何が必要とされているかを考え着実に発想を広げている作品や、着眼点の面白い作品が、多く見られました。それぞれの作品のなかに、設計者が大切にしている光るものがありました。迫力のある模型や、図面などの提出物の量にも、エネルギーを感じました。卒業制作を通して考えたことも、プレゼンテーションのスキルも、これからの貴重な糧になると思います。

建築を学んだ方の活躍の場は、多岐にわたります。卒業制作は企画から建築化まで一貫して一人で行いますが、建築にまつわることはチームで進めることが多いので、自分が得意な部分、興味のある分野に特化して、探求してゆくのも良いと思います。

「一休集伝器」コミュニティ形成の種となり、訪れた人、関わった人へと広がりをみせていることに、感動しました。梅澤さんの役割を他の人が担うとどのようなスタイルになるのかも、見てみたいです。

「巡葬」機能が少なく自由に発想できる分、匙加減が難しかったと思いますが、巡礼道から読み解くという段階を

兼弘彰（左）と佐藤大輔（右）の共著「住宅インテリア究極ガイド」の表紙。兼弘彰（左）は表紙のイラストに描かれている。

今回初めてゲストとして卒業制作優秀作品の講評会に参加させていただきました。いずれも力のある作品で、表現の自由度は我々の学生時代を大きく超え、少なからず圧倒されました。図面も完成度が高く、プレゼンテーションもエネルギーッシュで取組意欲に好感が持てる作品が多くありました。

ここにいる皆さんは、今回卒業制作で4年間学んだこと、向き合ってきたことの集大成として節目を迎えたことでしょう。この節目というのが設計者の人生にとってとはとても大切なもので、良いことも悪いこともあるのですが、自分なりにしっかりと作り上げたものについて一旦総括される経験となります。これからも皆さんが歩んでゆく道には、おそらくこのように節目となる大切なプロジェクトを経験する機会がまたあると思います。そこでは設計に関わる技術のみでなく、出会った人の視線や得られた助言、作り上げようと必死で考えた思考過程など多くの得難い経験値が待っています。そして出来たものについては自分なりにエポックメイキングと呼んで良い。つまりそれは自分の方向性を決める体験で、そんな経験を通して自分の中の設計者としての社会に対する取り組み姿勢が固まってゆくと思います。ですので、真剣に取り組めた人ほど得られたものは多いはずで、得難い経験ができた人はプロジェクトに

踏むことにより、それぞれの場の魅力が研ぎ澄まされ、現実味を帯びていました。模型の迫力からも、説得力を感じられました。

「マナビノバから商いと暮らしが混在したまちを知る」コンセプトから予期したイメージと提案された建築とのギャップが面白い。心惹かれる場が何により成立しているのか、掘り下げて考え体得する習慣を通して、感性を磨いていって下さい。

「自他の葺き替え」問題提起から建築の提案まで一貫して真摯に取り込んでいることに感服しました。人と人の距離感が繊細に検討されていて、見るほどに良さを感じました。非の打ちどころがない中で、メッシュのスケール感は検討の余地があるようにも思いました。

「金木犀の香りに乗せて」区画割りと配置の提案に力点を置いて説明されていましたが、多数の住戸をきちんと設計していることや、住戸間の間、群れとしての景観が印象的です。

兼弘彰（左）と佐藤大輔（右）の共著「住宅インテリア究極ガイド」の表紙。兼弘彰（左）は表紙のイラストに描かれている。

恵まれ、つまり人に恵まれ、その機会を逃さず活かすことが出来た人です。私は設計者としてのキャリアの大部分で歴史的建造物の保存再生に関わってきましたが、歴史的建造物の保存の仕事は常に良いものを永く未来に残すことが目的であると思い取り組んできました。これは私が学生時代に教えられたことです。今回の卒業制作の中でも、在来の環境の持つ価値と問題をまっすくとらえて、課題解決に取り組んだ姿勢が強い作品が見られました。建築の課題解決に与えられた時間はいつも足りなく、短い時間の中で素早く答えを求められることが往々にしてあるのですが、そのような時でもこの設計は何のためにやっているのか？常に自分自身に問いかけて答えを持ちながら進んでほしいと思います。仕事の目的は様々ではあるものの、目的をしっかり理解すること、向き合って作り上げること、皆さんには卒業制作で得られた体験を大切にしつつ、今後は次のエポックメイキングに向かって活躍して行ってほしいと思います。

兼弘彰（左）と佐藤大輔（右）の共著「住宅インテリア究極ガイド」の表紙。兼弘彰（左）は表紙のイラストに描かれている。

## 内田 青蔵

Seizo UCHIDA

内田青蔵（左）と佐藤大輔（右）の共著「住宅インテリア究極ガイド」の表紙。内田青蔵（左）は表紙のイラストに描かれている。

今年度の卒業論文・卒業設計、修士論文・修士設計もコロナ禍の中で実施され、学生諸君は大学に寝泊まりしながら集中して作業を行うことができなかった。そんなこともあってか、卒業設計では、時間を掛けたことが手に取るように伝わってくるような作品や驚くほど大きな模型といったものが見られず、総じて平均的で、やや個性さに欠けるような印象を受けた。

卒業論文でも同様な印象を受けた。それでも、今年度は、卒業論文を書いた研究室が増え、内容的には問題があるように感じられたが、分野が増えたことは喜ばしい限りである。

修士設計は、毎年、卒業設計と比べると、大人になったように個性を抑え、論理的に表現しようとする作品が多い。この傾向は、変わらず、もっと破天荒さがあってもいいのではと物足りなさを感じた。修士論文は一人で、内容的にはもう少し時間を掛けたら、もっといいものになったのではと惜しまれた。

いずれにせよ、私は2023年3月で定年を迎え、こうした感想を書く機会はこれで終わりとなる。そこで、あえて、先生方の負担を増やすことになりそうだが、卒業論文・卒業設計、修士論文・修士設計の見直しを提案したい。まず、4年の卒業論文・卒業設計は、やはり、全員が論文と設計を行うべきと思う。少し長い論文と完結した複数枚の図面は、やはり建築学部の修了として全員が巣立つ際に体験すべきものではないか。また、修設・修論は、もう少し、研究室の色がでるようなものを求めたい。負担は、学生にとどまらず、先生方も増えると思うが、神奈川大学建築学部ならではの色を出していただけたら幸いである。

## 山家 京子

Kyoko YAMAGA

山家京子（左）と佐藤大輔（右）の共著「住宅インテリア究極ガイド」の表紙。山家京子（左）は表紙のイラストに描かれている。

2020年度から続いたwithコロナの大学教育も3年目となり、環境への慣れと共に落ち着きを取り戻したようである。私が担当する授業はすべて対面となり、ゼミにおいても、個人対応でZoomの併用もあったが、ほとんどが対面であった。

2022年度の大きなトピックは、なんといっても建築学部の創設である。4月に200名超の新入生を迎えた。今年度から担当した設計製図Ⅰでは、製図室でもともと楽しそうに作業している学生たちの姿が印象的だった。文系入試で入学した学生もいる。悩むこともあるだろうが、建築の面白さを感じてくれればと思う。

さて、卒業研究、修士論文は工学部建築学科、工学研究科建築学専攻の学生たちによるものである。これまでと学生たちの数や属性は変わっていない。大きく変わったのは教員の数である。建築学部とともに着任した先生が加わり、これまでの5研究室9名体制から11研究室（うち3研究室は合同指導）17名体制となった。この影響が大きく現れたのは、卒業論文だろう。生活デザイン史研究室指導の卒業論文は、共同炊事場や避病院を扱ったこれまでにないテーマで、建築学部の枠が広がったことを感じさせるものだった。また、既存の研究室の卒業論文も、遊郭建築、別荘地、不法占拠、郊外住宅地など、パリエーションに富んでおり、楽しく拝聴した。卒業設計は学生のオリジナリティによる部分が大きく、指導教員の専門性は論文ほど表れにくいが、建築保存活用など、今後の展開が楽しみである。

また、修士設計にも秀作が多かった。谷本さん、嶋谷さんがトウキョウコレクションのファイナリストに残ったのも頷ける。研究室プロジェクトをはじめ密度の濃い作業と思考に裏付けられた作品が多かったように思う。一方、まちづくりを意図した設計では、小規模建築を分散配置した提案が多く見られるのだが、プログラム提案に加えて空間的発見がないと、発信力のある卒業設計・修士設計にならない。そこが難しいところである。

## 曾我部 昌史

Masashi SOGABE

曾我部昌史（左）と佐藤大輔（右）の共著「住宅インテリア究極ガイド」の表紙。曾我部昌史（左）は表紙のイラストに描かれている。

今年度は、卒業設計も修士論文に代わる設計も、その作品から受ける印象がとても多様であった。ここ数年と同様、異常なほどの思いが溢れる作品が無かったことは残念ではあるものの、それぞれの関心の多様さが提案全体としての多様さを生み出していたことは、好ましい傾向であると感じた。優秀作品として評価されたもののみならず、興味深い作品がみられた。最終的な評価の場面では、学部も修士もそれぞれ一つの作品が特に高く評価されたが、それ以外の作品では票が割れたのではないだろうか。それも、この多様さに起因したものだろう。

最終的な作品は多様だったのだけれど、学生たちの思考には共通した方向性がある。建築をとりまく世界全体へ向けられた、優しく丁寧な眼差しである。もともとそこに存在している建物や人びとの営為、自然の地勢や物質感が引き寄せる身体感覚、その建物での活動に関わる人々のすごし方、動植物のさまざまな変化の様子、四季の変化や光や風と建築の関わりなどに、とりわけ丁寧に目を向けているのである。その背景には、人間が求める用途や機能に建築空間との単純化した関係を、手放しに信じるわけにはいかなかった、という感覚があるのだろう。建築をとりまく習慣的な評価軸からなるべく離れ、個々人の関心にもとづく特有の評価軸で、新たな建築やまちの様子を立ち上げようとしているように感じられた。

こうしたスタンスそのものには共感するし、この先の建築やまちを考える上では重要なことだろう。その一方で、卒業設計全体を通して気にかかるのは、少々逃げ腰にも感じられる設計が散見されたことである。このことも、上述のスタンスから生じているように感じる。人間の暮らしが人工的な状況を生むことは避けられない。優秀な作品として取り上げられたものの多くは、そうした宿命を引き受けた上で、何らかの提案に発展させているのだけれど、そこまで発展させていない学生たちの作品は、逃げ腰な最低限の提案に留まっているように思えた。少々心配である。



## 中井 邦夫

Kunio NAKAI

中井邦夫の建築設計事務所「中井邦夫建築設計事務所」の事務所内。

卒業設計や修士制作は、よくも悪くもその時代の建築思潮を反映すると言われる。それは若い感性の率直な社会観や建築観が純粋に現れるからだとか、流行に影響を受けやすいからなどと言われるが、いずれにせよ教員側は、それから現在や将来の建築についての視線やテーマを感じ取ることになる。

神大に限らず近年の卒業設計、修士制作には明らかな傾向がある。キーワード的にいえば「地域」「コミュニティや家族」「活動」「リノベーション」「小建築」といったようなことである。今回優秀賞に選ばれた作品の中でも、例えば梅澤さんの作品は、ある意味その極みともいえそうなもので、祖母(家族)の焼き鳥屋の再構成(リノベ)である屋台(小建築)を引いて各地(地域)を巡り、そこで人々のつながり(コミュニティ)を創出しようという彼の「活動」自体が作品になっている。何よりもそのエネルギーと行動力、そしてストーリーや表現などは十分評価に値するものだったが、同時に個人的にはいまひとつ首肯し切れない違和感も若干感じた。建築学部のキャッチ「ぜんぶ、建築だ。」にある通り、もちろん「活動」も建築といえるのだが、気になるのはその持続性や日常性をどう考えるかである。彼の個人的な表現でよしとするのか、それとも彼の個性を超えた持続力のある日常性を獲得することができるのか…。

時代も規模も全く違うが、ふと石山修武氏が80年代末に気仙沼で数年間続けた「唐桑臨海劇場」の活動を思い出した。気楽会という地元の若者グループの最近のブログ\*には、当時のことを振り返ってこう記されている。「…数年はつづき、反響も大きいものだったという。しかし、よくもわるくも時代は若く、まちも同様に「若かった」。あまりにも大きなイベントは達成感と同時に、関係者を疲れさせ、一つの壁を乗り越えることができなかったと。」こうしたジレンマは、現在でもイベント系のまちづくり活動が抱えている課題でもあるだろう\*。(参照：気楽会の気仙沼日記：http://kirakukai.blog.shinobi.jp/)

## 六角 美瑠

Miru ROKKAKU

六角美瑠の建築設計事務所「六角美瑠建築設計事務所」の事務所内。

総評というよりは、今年私なりに試みたことを書きたいと思う。夏休みくらいまで、どのようなことをテーマに卒業制作に向かうか、個々の関心を引き出すのに苦勞する。2年目の今年、私の研究室では「パーソナリティートーク」と題し、学生それぞれの生い立ちやバックグラウンドを聞き理解を深めることから卒業制作エスキスをスタートした。背景を知ることで、学生が感じている物事、思考の置き所などを多少なりとも受け止めることができ、設計エスキスをする上で、学生の個々の資質を捉えてアドバイスしやすくなった気がしている。

このようなプロセスから、今年の卒業制作を振り返ると、優秀賞の梅澤さんの卒業設計は祖母が営んでいた焼き鳥店の閉店、解体から、その焼き鳥店の持つ機能を継承し解体材を利用してながら屋台を原寸で設計した。実際に屋台と共に町に出て焼き鳥を振る舞いながら住人と対話し、場づくりやコミュニティ形成の実験を行ったプロセスも学生時代にしかできない良い経験になったのではないかと思う。卒制となると大半の学生はスケールの大きなプロジェクトに向かうことが多いが、意外と本人には気がつかないような身近な物事に、プロジェクトを展開するきっかけや面白いテーマが潜んでいるもので、視野を広げるためにも学生と対話をしながら共に考えていくことが良い研究テーマを構築することにつながっていくのではないかと感じている。

また、修士設計については、例年よりも研究に密度があり、個々の思想も表現に表れている設計も見られ、とても良かったと思う。模型等もプロジェクトとして町や環境への展開が力ある表現としてアウトプットされているように思えた。

今年は、卒業制作にも修士設計にも原寸表現のものがいくつか提示され、今後工房を利用して、原寸スケールでの検証も増えていこうだろう。建築学部になったこともあり、オーソドックスな型に収まった設計表現ではなく様々なスタイルの成果物が出てくることを期待している。

## 鈴木 信弘

Nobuhiro SUZUKI

鈴木信弘の建築設計事務所「鈴木信弘建築設計事務所」の事務所内。

現在、地球規模での関心事は「環境」ですが卒業制作の提案ではほぼ皆無である。すでにメタ思考の環境問題は建築の問題ではないとのメッセージなのか、問題を突き返された気分だった。

なんでも建築で解決するというスタンスに限界を感じる人が多いのは、問題解決の順序が逆転している今日の状況を観察すれば無理もないかもしれないのですが、せっかく建築学科において卒業制作に取り組むのならば、愚直に「建築」自体に取り組み、「建築」で可能な取り組みを丁寧で慎重にチャレンジしてもらいたいと思った。審査する側から卒業制作をどう見ているかについては、純粋に作品のレベルはどうか、そして社会に何を問うているか、つまり「作品性」と「社会性」といった2つの評価軸だ。バランスよく提案があれば良いが、そうでなくても明るい希望を見せてくれるのかを期待している。

今年、特に多かったのはいわゆるアジール(カオス)といった密集集落、雑居群、群居といったような距離感と密度でしか成立しない居住形態。コミュニティに対する圧倒的な信頼感から組み立てている造形だ。近代が一度捨ててきたものに対する強い反省の意志に魅力を感じたし、存在感を放っていた。

もうひとつ目立った傾向は点在とネットワークという手法。町に点在する小規模の建築のネットワークによって、居場所の空気を変えていこうとする提案だ。新しい形態を生み出すというより、新しい枠組み、仕組みを挿入するという解決方法は建築行為自体への問い掛けというよりプロデュースや運営手法の提案であり、時間を掛けてようやく結果が見えてくる長期的な提案だ。したがって小綺麗なデザインの良し悪しよりも経済・金融・権利・資産・運用といった生々しい事情の具体性を省いた、あっけらかんとした建築物デザイン提案になっているものは興味を持ってなかった。建築や住宅の可能性を単に個別の解答にしてしまっか、それとも大きな提起となることを信じて進むか、この点が先々大きく違ってくるのかなと感じている。

## 野村 和宣

Kazunori NOMURA

野村和宣の建築設計事務所「野村和宣建築設計事務所」の事務所内。

みなさんの作り上げた成果品は、いずれも「熱く魂のこもった作品」ばかりだった。これからみなさんは社会に出て、いろんな立場で建築の実務に関わることになると思うが、この修士設計・卒業設計で悩み考えたことは間違いなく「これからの自身の思考の出発点」になるはずだ。是非、ここで考えたことを大切に持ち続け、これからも深掘したり広げたりしながら温めていってもらいたい。必ず実務の中で生かせるチャンスが訪れるはずだ。さて、ここからは、私の専門分野である建築保存活用上の立場から、建築の価値継承をテーマとした作品について感想を述べる。

<一休集伝器>閉店する焼き鳥店を移動建築という形で継承する提案。店主や客へのヒアリング、営業時から解体時にかけて建物を見つめ、店主が長い時間をかけて作り上げてきた空間を丹念に分析し、カウンターの傷一つに至るまで価値として抽出し、それを見事に屋台建築へ凝縮させていた。是非、これからも屋台による地域活動への参加を続けてほしい。この屋台も時間をかけて変化していくことで、前店主による47年間と連続した時間建築として完成した姿を見てみたい。

<自他の葺き替え>既存を活用した循環型建築の提案。現建物の構造上の特徴やドライエリア・階段など各部の特徴を継承すべき価値として分析し、新たな時代への要求に応じて大胆に変化させて再生する手法によって、リアリティのある見事な作品にまとめ上げていた。欲を言えば、構造躯体スケルトンの活かし方のみならず、仕上げなど現建物の質感の継承に関しても、作者の積極的な提案が聞いてみたかった。この案をさらに洗練させていけば、十分実現可能なレベルであると思った。

「継承設計」とは、建築のもつ唯一無二の価値を見つけ出し後世に伝えながら、新たな時代の要求に応じて生まれ変わらせることだと考えている。皆さんの中から、「継承設計」の取り組むデザイナーやエンジニアが誕生することを期待する。

## 高橋 寿太郎

Jutaro TAKAHASHI

高橋寿太郎の建築設計事務所「高橋寿太郎建築設計事務所」の事務所内。

卒業設計・修士論文は、自己表現の集大成であるか、あるいは社会から要請される課題への真摯な姿勢の結果か。このように「AまたはBの何れか」と問われた場合には、常に「両方である」と応える思考パターンを持っていて欲しい。欲張りなようだが、私の専門のひとつである組織経営論では定石と言っている。

しかし両方を満たすのは簡単という訳ではない。幅広い興味が必要になるのはもちろん、それぞれ問いつの葛藤が起こるからだ。2つまたはそれ以上の異なる像が重なり合うとき、どちらかを優先させようとする心理が働く。人間はそう器用にできていないということだろう。学部と修士をあえて区別せずに、以下所見を述べるので、参考にされたい。

伊東さんの葬儀空間『巡厩』や、鈴木さんの和歌から『情景を詠む』、林(淳)さんの洞窟的な『空間から人間へのトボス』。これらは内面から湧き起こる像を、躊躇せず前面に押し出した秀作である。なぜこの形なのか、という問いに向き合い続けた表現力は何よりも説得力があることを確認させてくれる。

一方で福原さんの『藤棚商店街の集合住宅』、三田井さんの『自他の吹き替え』、高田さんの『重要文化財コンバージョン(論文)』。これらは作品の向こうに、より長いスパンで取り組むべき社会課題を見出すことができる。どう立ち向かうべきかという使命感すら帯び、耳を傾けてしまう。

その他にも優れた作品はあったが、まずはいま挙げた明確な特性(個性)を発揮することを、私は高く評価する。そのうえで、今後は複数の問いにまたがるような深化を遂げて欲しいと、個人的には思う。問いと問いの「あいだ」には、中長期的に各々が活躍できる可能性が発見されることが多いからである。

いま私たちが取り組むべき問いは無限にある。例えば持続可能な自然環境との現代的な調和、伝統的なビルディングタイプの刷新、デジタルテクノロジーへの応答、ウェルビーイング向上の探求、もちろんたゆめめ美やアートの追求。それらに対して「建築」で応えて欲しい。

## 須崎 文代

Fumiyo SUZAKI

須崎文代の建築設計事務所「須崎文代建築設計事務所」の事務所内。

2022年度は昨年度まで比べ、学生が各研究室や製図室等で自由に活動している姿が見られ、生き生きとした学生たちの表情にコロナ禍の自粛から解放される兆しが感じられた。

卒業研究、修士論文の総評としても、そうした背景が作品に反映されているように思えた。卒業研究、修士論文ともに、「場所性」を丁寧に読み解くようなアプローチが多かった。具体的には、福原さん、嶋谷さん、高田さん、谷本さん、中澤さん、半井さん、林(眞)さんらの作品があげられるが、移動を制限されていた昨年度までとは異なる解像度のリサーチと提案だったように思われる。それらのなかでも、「既存建物」を生かしつつ、「コミュニティ」や「移動」と「関わり」といった人間同士の関係性を生み出そうとする姿勢が多く見受けられた。前者は新築という建築行為とは別のアプローチが必要とされる現代社会の必要性を感じ取ったものであると考えられるし、後者はコロナ禍において抑制された人と人との距離や交わり方に少なからぬ影響を受けているものであるように思われる。また、良くも悪くも抽象的、思想的なアプローチは稀で、かなり具体的な空間や都市構造、施設利用の分析に踏み込んだものが多かったのも特徴的であった。

個人的には、谷本さんの「人間のためでもある建築」という作品が提示する問題の示唆が印象に残った。すなわち、建築という創造的行為を「人間以外の他社にとっても豊かさも生み出す」計画として地勢まで含めて捉え直すことは、これからの社会に必要とされる意識であるように思われるためである。レヴィ＝ストロースが自身の民族学研究で注目する視点のひとつに「地質」を挙げているが、そうしたアプローチや循環型社会の構築に向けたひとつの提案として受け取るとき、今後のさらなる展開に期待されるのである。

縁側で憩う <p>―地域交流を図る集合住宅の提案―</p>	<p>廣瀬 遥</p>
○ 野毛山ブルー跡地における都市型RVパークの提案	古川 寧々
イヌとヒトのコミュニティを形成する複合施設の提案	古屋 遼斗
自然体験の家 <p>―観音崎公園における自然教育型ワーケーション施設の提案―</p>	松村 桃子
○ バスと人の停留所	森永 友馬
○ 暮らしの中で創られていく境界建築 <p>―場と場を縫ってできる新たななみち空間―</p>	相澤 萌
◎ 巡葬 <p>―空間体験による偃びの場の提案―</p>	伊東 歩武
本と人が出会う場所 <p>―人々の居場所となる図書館の提案―</p>	上田 優里
○ ハコモノ建築の解体	小野 美咲
移り変わる記憶と人の居場所 <p>―大都市近郊住宅地域における廃校跡地活用の提案―</p>	岸本 晶
まちの日常を包み込む <p>―桐生新町におけるコミュニティの場の提案―</p>	小岩 蓮
○ 日常をつなぐ学び <p>―地域の場から考える新たなまなびやの提案―</p>	小菅 大雅
仮初め逃避行 <p>―日々を焦がれる仕掛け―</p>	齊川 優香
○ よりどころ <p>―通学路から派生する高校生のサードプレイスの提案―</p>	笹本 瑚都
町の多世代交流の場 <p>―多世代大家族の多様性を含む集合住宅の提案―</p>	蘇 彦伯
e-spot港北 <p>―地域密着型eスポーツ施設の提案―</p>	田口 陽涼
高齢者の住宅	富田 響真
水も滴るいい所 <p>―3つの異なる川のスケールの違いを感じる親水空間の提案―</p>	長谷 莉奈
生きる時間 <p>―光と影の操作で時間を感じられる最期の時を過ごすための施設―</p>	野口 亜美
カタチを変える商店街	原 朋也
◎ マナビノバから商いと暮らしが混在したまちを知る <p>―藤棚商店街における集合住宅の提案―</p>	福原 理子
いつかの情景 <p>―鎌倉特有の要素が織り成す商業施設の提案―</p>	松本 夏樹
★ 自他の置き替え <p>―「むさしの方式」を背景としたこの先のコミュニティ形成建築―</p>	三井田 昂太
飲みニケーションで繋がる街 <p>―新たな闇市を造るエリアリノベーション―</p>	矢高 隆人
伝統を継承するもの <p>―先斗町歌舞練場の保存と新たな時代からの要求やまちづくりに対応した活用―</p>	山下 由聖

## 卒業論文

古都鎌倉の近代化に関する研究 <p>―別荘地としての開発から住宅地への展開を中心として―</p>	久和 真信
「北麓地域(富士五湖周辺)」の観光地化に関する研究	原 佑麻
不法占拠によって形成されたまち・川崎市池上町の変遷と現状 <p>―建物の用途や分布の移り変わりを中心として―</p>	丸山 創也
横須賀市中心地域の谷戸地形における造成地の構成	工藤 竜久
戦前期における横浜市内の社会事業に関する研究 <p>―横浜市社会課が設立した4つの隣保館を中心に―</p>	齋藤 直斗
昭和初期における共同炊事場の実態と課題について <p>―都市および農村の実例に着目して―</p>	佐々木 はな
郊外住宅地における住民意識に関する調査研究 <p>―横浜市栄区湘南桂台地区の居住および緑環境を中心として―</p>	山本 廉
昭和～大正期の横浜における「避病院」の成立と変遷	工藤 大輝
★横浜に存在した遊廓建築の変遷過程 <p>―開港から関東大震災までの外部意匠について―</p>	日田 聖人
藤沢市旧東海道通りの町屋と蔵を含む街区の構成	福永 隼人
1950～1960年代における台所設備提案に関する研究 <p>―『暮しの手帖』と『モダンリビング』における台所関連記事に着目して―</p>	町田 蘭
明治初期官営模範工場にみられる洋風化の様相 <p>―工部省官繕事業による工場建築を対象に―</p>	横田 寛介

## 卒業設計〔設計A〕

N Side Park <p>―静岡県沼津市における公園型商業施設の提案―</p>	鈴木 統也
◎ 一休集伝器 <p>―祖母からの伝承と焼き鳥を介した集いの創出―</p>	梅澤 達紀
繋がり逢うまち	影山 紗希
次世代型水族館 <p>―しながわ水族館リニューアル計画―</p>	加藤 雄大
○ 「桃源郷」を描く <p>―里山風景を育む農業施設と高齢者住居の設計―</p>	久世 文
多世代が集う広場	小西 希歩
石蔵のまち <p>―福島県国見町小坂地区における石蔵を活用した地域ネットワークの提案―</p>	紺野 瑠偉
食材の産地と滞在者をつなぐ <p>―産地の人とかかわる体験型民泊施設の提案―</p>	鈴木 千尋
千変万化メロディー <p>―自然環境の音を聞く体感型美術館―</p>	西村 璃咲
結	濱 大智
これからの日本のまちにふさわしい商店街の在り方	平井 栞

## 立花 美緒

Mio TACHIBANA

立花美緒さんによる「暮らしの風景」展。2017年10月、東京都立大・三軒茶屋キャンパスにて開催。

本年度着任し、卒業研究、修士論文の発表会に初めて参加した。卒業論文については、意義や発見が明確に示された研究や、充実したリサーチの成果がまとめられた研究は、やはり読んでいて面白い。完成度を高めることまでは至らず戸惑いや苦しみが伝わってくるような研究もあったが、1つのテーマについて模索、深掘りし、序と結論やその間の流れを論理的に通して読み手に伝えようと試行錯誤したことは、今後自分で仕事や生活を構築していく上で、得難い経験となるのではないかと。

卒業設計は、本誌に掲載されている作品以外にも興味深い設計や計画があったが、受賞作品は各々異なる種類の設計の力が突出していたように思う。三井田さんの全国各地で老朽化し貸室化している公民館が、建築空間としても地域交流施設のプログラムとしても現代性を獲得することができる可能性を魅力的に提示したデザインの統合力、梅澤さんの屋台を媒体に地域に飛び込み人を結びつける行動力、伊東さんの造形と空間像を結ぶ力等である。卒業設計をやりきったからこそ、次の課題がそれぞれに得られたことだろう。

修士論文、修士設計には、充実したリサーチと分析によって既成概念から距離をとり空間の自由を獲得するに至ったのだと感じられる知的なアプローチの作品があった。一方で魅力的な模型や図面はあるものの建築の基本的な知識量や読書量が不足しており、結果、設計表現が不自由になっているように感じられる作品も見受けられた。成果が見込める短期的な作業を頑張ることは大事であるし、評価の最初のベースとなる面は否定できないが、遠回りに思っても長期的な蓄積、つまり実際の建築体験や読書等の質と量、リサーチと分析等の深掘り力等は、実務や建築設計者としてのあり方に大きく影響する。学生の間だけではなく社会人になっても建築を見に行き、本を読み、興味を深め続けることも重要であるし、大学院進学予定者は、修士設計の準備として卒業設計Bの選択を検討することも一つの手であるように思う。

## 上野 正也

Masaya UENO

上野正也さんによる「暮らしの風景」展。2017年10月、東京都立大・三軒茶屋キャンパスにて開催。

風景とコミュニティという観点から作品を俯瞰してみたい。

まず、梅澤さんは閉店した祖母の焼き鳥店の古材とタレを継承し、場を生み出す装置としての屋台と出張・交換という行為によってその場所ごとで生まれる瞬間的なコミュニティを風景として成立させた。また、福原さんは、住宅から連続する共用部がマナビノバとして住まい手と地域住民とを結びつける空間となっており、新たなコミュニティ創出に期待を込めた作品といえる。風景という観点からは、混在をテーマとし東南アジアの様々な都市に見られるバラックを想起させるような建築表現を用いている。三井田さんは、これまでの住民自治に対するある側面からの批判的態度から建築表現を模索し、減築という行為から生み出された可変的建築が新しい風景を生み出しており、かつ、そこで生まれるこれからのコミュニティを望んでいるかのような暗示的な作品であったといえる。

修士設計の嶋谷さんは、廃線地である線状空間にたつ建築の一部を住民達が施工・維持することを前提とし、自治を育む機会として建築行為を捉え、コミュニティの継続を願う姿勢が風景として立ち上がる様を表現している。鈴木さんは百人一首を用いて、そこに詠まれる風景を分類・分析し、形態に落とし込むことで建築をつくりあげている。ここにコミュニティは介在していないが、情景を詠む空間体験は個人の中に蓄積し、それが目には見えないつながりを創出しているかもしれない、と感じた。谷本さんは、都市環境の読み取りがとて高い解像度で展開され、それが、建築エレメントに重ね合わせることで、コミュニティの意味も脱臼するかの如く「人間のためでもあるコミュニティ」を生み出すような建築になっている点に興味深い。最後に、林(眞)さんは、元線路空間をテーマとして、1.3kmにも及ぶ距離ながらも詳細な周辺調査・分析を経て、これら線状帯を利用する人々の生活に思いを馳せ、それを風景として成り立たせようとした作品といえ、生活・建築・都市といった異なる空間スケールをまとめ上げている。なお、ここに挙げた作品以外にも、風景とコミュニティという軸で語れる作品が多かった点が特徴的であった。

川と日常をつなぐ  
—風景の再構築と、高架下の活用の提案— 横地 夏季

○ 自然に習うナリワイ  
—関係人口とセルフビルドで解く新たな居場所の提案— 吉濱 智哉

卒業設計 [設計B]

重要文化財「旧志免鋳業所暨坑槽(1943年竣工)」の保存・活用計画の提案  
—「記憶の掘り起こし」をイメージした地下空間中心の文化交流拠点— 五十嵐 蓮

○ 幹枝と葉がつくる樹木空間の構成 中里 友香

○ 金木犀の香にのせて  
—市街地における小規模住宅地の豊かさを考える— 森田 泰正

★ディプロマ賞 ◎優秀賞 ○卒業設計優秀作品発表会発表者



学部設計課題 優秀作品

建築デザインⅢ

建築デザインⅡ

建築デザインⅠ

設計製図Ⅱ

設計製図Ⅰ

非常勤講師



岡村 晶義  
Akiyoshi OKAMURA

一級建築士事務所アトリエ鯨



佐々木 龍郎  
Tatsuro SASAKI

佐々木設計事務所



渡瀬 正記  
Masanori WATASE

一級建築士事務所設計室



木島 千嘉  
Chika KIJIMA

木島千嘉建築設計事務所



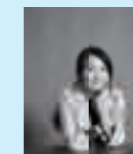
鈴木 丈晴  
Takeharu SUZUKI

鈴木丈晴アトリエ  
一級建築士事務所



川辺 直哉  
Naoya KAWABE

川辺直哉建築設計事務所



森山 ちはる  
Chiharu MORIYAMA

サイドバイサイド一級建築士事務所



井原 佳代  
Kayo IHARA

ihrmk一級建築士事務所



岡田 雅人  
Masato OKADA

岡田雅人建築設計事務所



古谷 洋平  
Yohei FURUYA

アトリエドゥウェル合同会社

## 担当

曾我部 昌史(教授)、吉岡 寛之(助教)、岡村 晶義(非常勤講師、アトリエ鯨)、  
佐々木 龍郎(非常勤講師、佐々木設計事務所)、渡瀬 正記(非常勤講師、設計室)

Masashi SOGABE (Professor), Hiroyuki YOSHIOKA (Assistant Professor), Akiyoshi OKAMURA (Guest Lecturer, Atelier KUJIRA),  
Tatsuro SASAKI (Guest Lecturer, SASAKI ARCHITECTS & ASSOCIATES), Masanori WATASE (Guest Lecturer, an office)

猪狩 勇斗 (M1, SA)、石井 瞭亮 (M1, SA)、小野 美咲 (B4, SA)、三井田 昂太 (B4, SA)、山下 由聖 (B4, SA)  
Hayato IKARI (M1, Teaching Assistant), Ryosuke ISHII (M1, Teaching Assistant),  
Misaki ONO (B4, Student Assistant), Kouta MIIDA (B4, Student Assistant), Yusei YAMASHITA (B4, Student Assistant)

## 第一課題 30人が暮らし30人が泊まれる、この先の暮らしの場

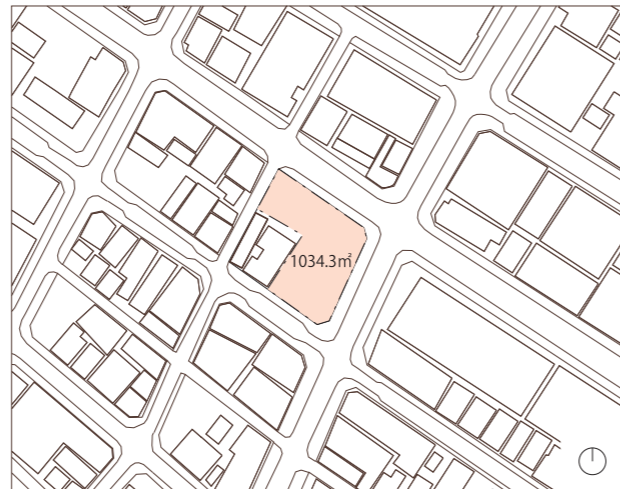
共に暮らすことで自分の好みにあった豊かな時間が生み出される、  
そういう住空間を提案すること。

この建物は、住まいの場所とこの場所での暮らしを特徴付けるサービスの場所とで構成され、住まいの場所は、賃貸住宅部分と宿泊施設部分にわけられる。共通のライフスタイルや必要とするサービスにより特徴付けられる30人の住まいがあり、その暮らしに関連した共用スペースやサービス系施設が特有の雰囲気を生み出し、その雰囲気が地域の人たちや30人の宿泊客にアピールする。単に、賃貸住宅、宿泊施設、サービス関連施設とが固まってあるものではなく、それぞれが有機的に関係を持つことで、何らかの特徴的な雰囲気を備えた居場所が生み出されるような計画を構想しなければならない。

敷地は関内地区の中央にある。歴史的背景や現状の周辺状況についての調査をもとに、計画に反映させること。

### 【設計条件】

※ 参考敷地(敷地は関内エリアから自由に選定する)  
敷地: 神奈川県横浜市中区太田町5丁目  
用途地域: 商業地域 敷地面積: 約1034.3㎡  
延床面積は4,500㎡~5,500㎡。地下を設ける場合は1層まで。  
道路斜線制限、高さ制限は厳守。



## 非常勤講師 経歴

岡村 晶義  
Akiyoshi OKAMURA

1954年生まれ、早稲田大学産業技術専修学校(現早稲田大学芸術学校)卒業、teamzooアトリエモビル及び象設計集団を経て独立、アトリエ鯨を設立、東京理科大学非常勤講師及び法政大学兼任講師を経て現在に至る。日本建築学会作品選奨、土木学会デザイン賞など受賞

佐々木 龍郎  
Tatsuro SASAKI

1964年生まれ、1987年東京都立大学工学部建築学科卒業、1989年同大学院修士課程修了、工学修士、1992年同博士課程単位取得満期退学、1992年(株)デザインスタジオ建築設計室、1994年株式会社佐々木設計事務所入社、現在同代表取締役

渡瀬 正記  
Masanori WATASE

1968年生まれ、1992年東京工業大学工学部建築学科卒業、1992年妹島和世建築設計事務所勤務、1993年~1997年青木淳建築計画事務所勤務、1998年一級建築士事務所設計室設立

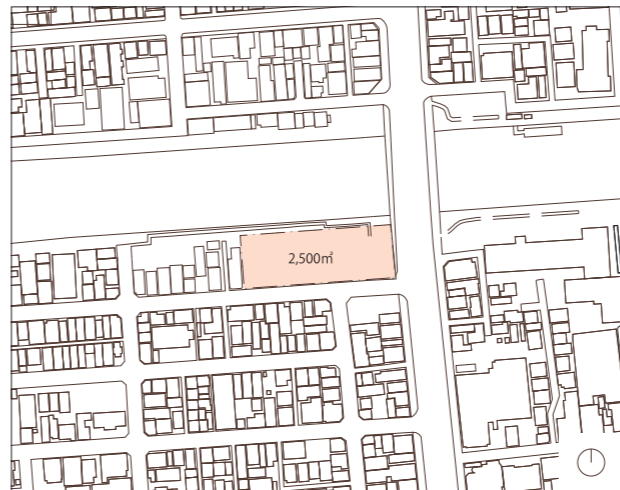
## 第二課題 街のインフォメーションセンター

地域に暮らす人たちの居場所(地域の居場所)と、観光などで訪れる人たちの拠点的な場(来訪者の拠点)の複合である。「地域の居場所」では、地域調査をもとに課題や需要を抽出した上で、どのような場をつくるかを各人が構想すること。この先の公民館のあるべき姿を考えることにもなるだろう。「来訪者の拠点」はいわば観光案内所だが、事例調査などをもとに今日的な役割を踏まえながら用途をまとめる必要がある。「地域の居場所」と「来訪者の拠点」が単に併設されているのではなく、相互補完的に計画することで、より多様で豊かな活動の受け皿となるよう検討し提案にまとめること。

敷地は、地下鉄駅、船着場、幹線道路に面する交通の結節点にある。それらとの関係を動線として解きながら、建物内のいろいろな場とのつながりかたを検討する。利用者、時間帯などにも意識をしながらまとめる必要がある。

### 【設計条件】

敷地: 東京都江東区清澄3丁目  
用途地域: 準工業地域、商業地域 敷地面積: 2,500㎡  
地下階を設け地下鉄駅とつなぐこと。  
延床面積は4,000㎡~6,000㎡。地上部分は3層以上とする。

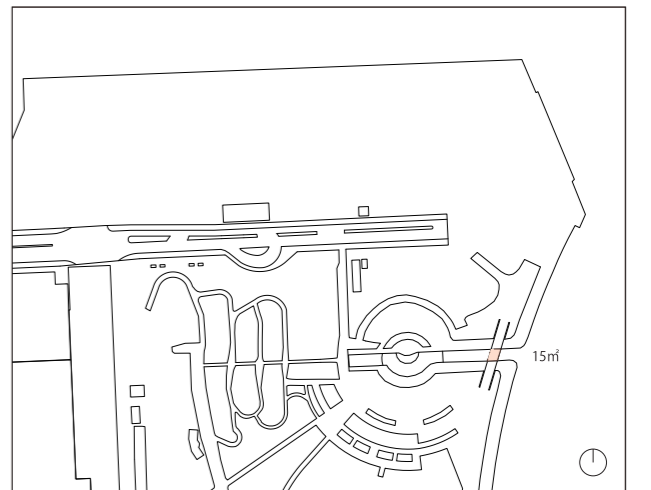


## 第三課題 街を変える最小限の装置

横浜みなとみらい21地区は、造船所などが集積していた工業エリアを再開発して生みだされた新しい街である。1980年代に入り開発が始められ、全域に建物などが広がりつつある。この街をデザインするにあたっては、歩行者がすごしやすい街にしようと、いろいろな工夫がされている。クイーン軸、キング軸、グランモール軸の3本の歩行者専用軸を設定したことはその一つである。ようやく全体が整いつつあるが、まち全体が歩いて楽しい街になったのかというと、必ずしもそうとは言えない。数年前から国交省は「ウォーカブルなまちづくり」の推進を目指し、いろいろな取り組みを進めている。ウォーカブルな街として紹介されている国内外の事例をみていると、みなとみらいをもっと豊かなすごし方ができる場所に変えられないだろうか、とも感じる。本課題で求めるのは、もっと豊かで楽しい、ウォーカブルな街にするための装置(=みなとみらいを構成する一要素として、ウォーカブルな街を生み出す道具としての建築)の提案である。

### 【設計条件】

※ 参考敷地(敷地はみなとみらい中央地区から自由に選定する)  
敷地: 神奈川県横浜西区みなとみらい1丁目1 臨港パーク  
用途地域: 商業地域 敷地面積: 約15㎡  
面積15㎡以下の歩道や民有地、公園の一角などの敷地を各自で選定。



高梨 颯斗  
Hayato TAKANASHI

交わる遊歩者 ~多様な人々が共存する高齢者福祉施設~  
Walkers crossing

寿町を対象として高齢者が活躍できる福祉施設を計画する。若者から高齢者を支える一方的な関係だけでなく、高齢者が若者を支える関係をつくる。そして、**支え合う関係**の中に意識的に支える関係と無意識的に支える関係をもつ**豊かな暮らしの場**を提案する。



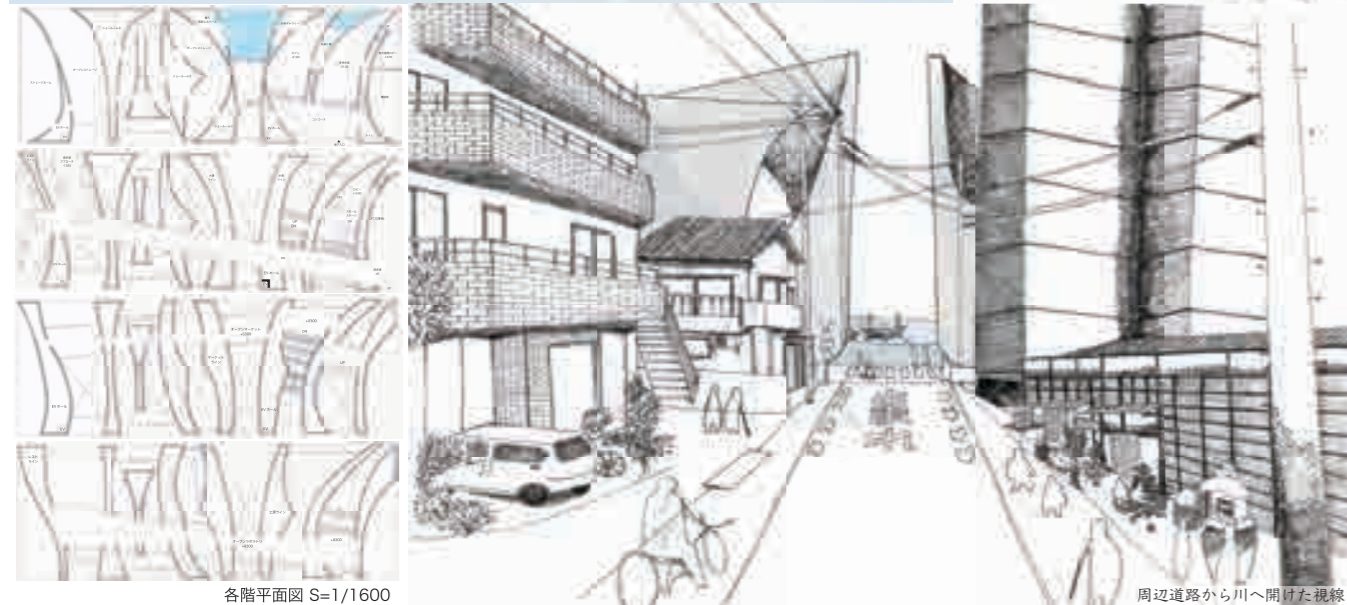
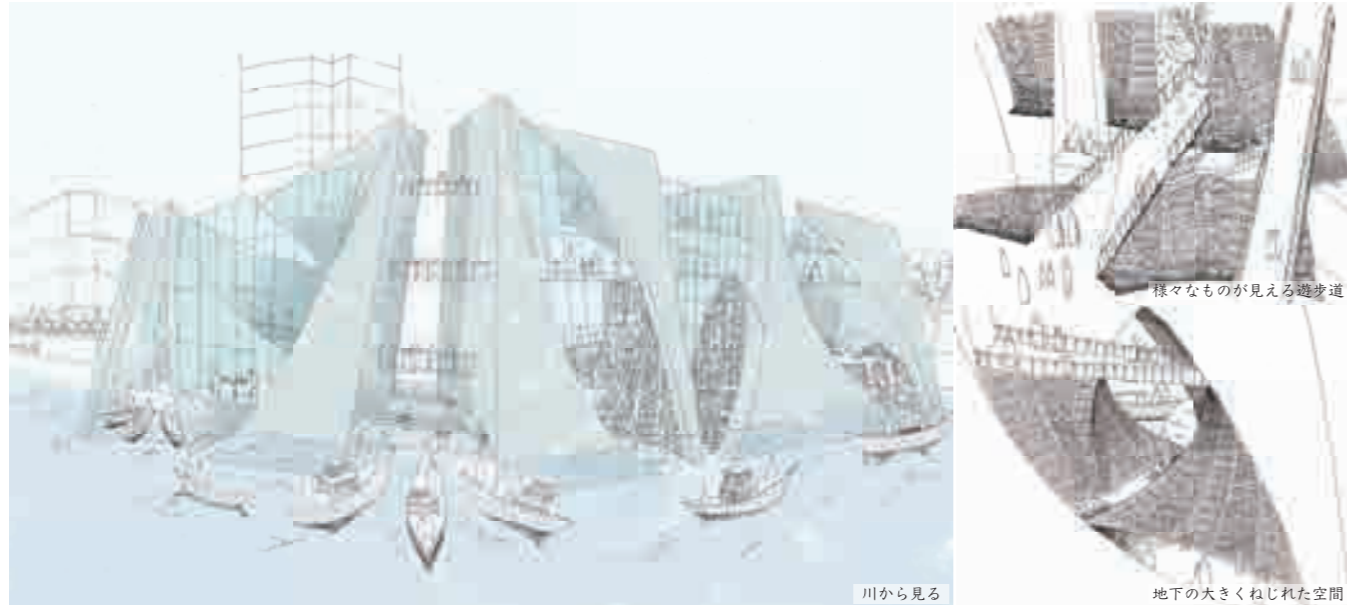
高橋 昇太郎  
Shotaro TAKAHASHI

YOKOHAMA HUB ~横浜beybikeに着目した観光拠点の創出~  
Yokohama Hub



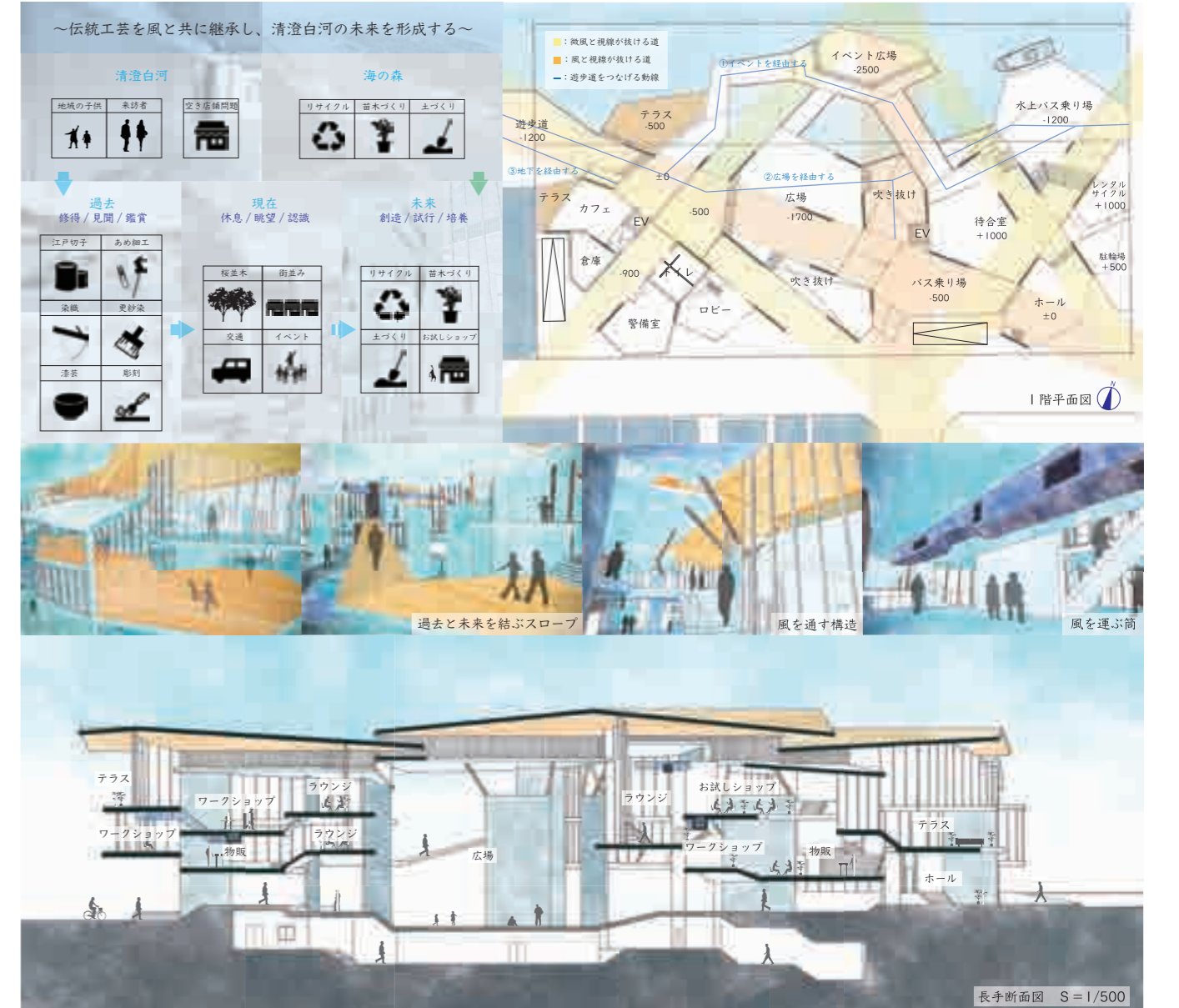
熊谷 匠/中里 美海/横山 凱一  
Sho KUMAGAI/Miumi NAKASATO/Tokihito YOKOYAMA

Flow  
Flow



村松 希瑞奈/小川 麗司/高梨 颯斗  
Kizuna MURAMATSU/Reiji OGAWA/Hayato TAKANASHI

風の赴き~伝統の継承と颯々たる風~  
Where the wind goes



熊谷 匠  
Sho KUMAGAI



都市を見る窓  
Window to the city



棚橋 美槻  
Mituki TANAHASHI



波の塔  
Wave Tower



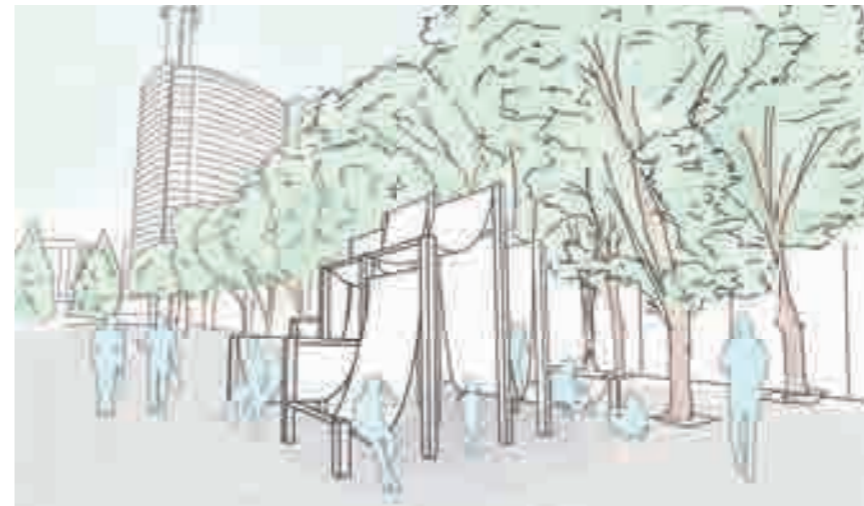
仁昌寺 天心  
Tenshin NISHOJI



Walk in Locker  
Walk in locker



高橋 昇太郎  
Shotaro TAKAHASHI



風の追想  
Recollection of the wind



## 担当

六角美瑠（教授）、曾我部昌史（教授）、鈴木成也（助手）、  
木島千嘉(非常勤講師、木島千嘉建築設計事務所)、鈴木丈晴(非常勤講師、鈴木丈晴アトリエ一級建築士事務所)  
*Miru ROKKAKU (Professor), Masashi SOGABE (Professor), Naruya SUZUKI (Assistant),*  
*Chika KIJIMA (Guest Lecturer, Kijima architect and associates),*  
*Takeharu SUZUKI (Guest Lecturer, Takeharu Suzuki atlier of registered architects)*  
石谷慶 (M2, TA)、稲川大悟 (M1, TA)、宮島里帆 (M1, TA)、梅澤達紀 (B4, SA)、小菅大雅 (B4, SA)、山元幸花 (B4, SA)  
*Kei ISHITANI (M2, Teaching Assistant), Daigo INAGAWA (M1, Teaching Assistant), Riho MIYAJIMA (M1, Teaching Assistant),*  
*Tatsuki UMEZAWA (B4, Student Assistant), Taiga KOSUGE (B4, Student Assistant), Sachika YAMAMOTO (B4, Student Assistant)*

### 第一課題 六角橋ミニシアターコンプレックスと広場

白楽駅前に駅前広場と一体となった積層型のシネマコンプレックスを計画せよ。敷地はかつて白鳥座という映画館があり、近隣地区市民の文化娯楽の一翼を担っていた場所である。近年、映画を取り巻く環境はシネマコンプレックスの隆盛により映画離れに歯止めがかかったように見えるが、一方で渋谷のシネマライズ閉館に代表されるようにミニシアターは徐々にその姿を消しつつあり、映画を鑑賞する環境や映画鑑賞前後の空間体験は均質化しつつある。本課題では気持ちの高まりや余韻を受け止める空間を計画すること。

また、この施設は六角橋商店街の有志による NPO 法人が管理運営を行うものとする。地域の映画コミュニティの交流イベントや、映画制作ワークショップを行う等、映画を上映するだけではない地域の核となる建築をデザインして欲しい。駅前の場所性や商店街との補完関係を考慮し、計画する建築が地域にとってどのような役割を果たすことができるのかを広場を含めて積極的に提案すること。また周辺環境（計画地北側には集合住宅がある）にも十分に配慮すること。

#### 【設計条件】

敷地：神奈川県横浜市神奈川区白楽124  
面積：約855㎡



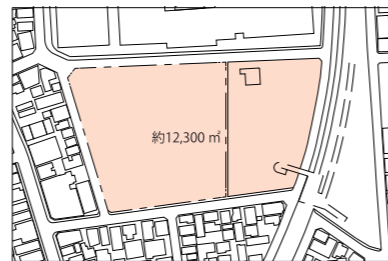
### 第二課題 地域に開かれた小学校 -学校×公園+α-

現在の二谷小学校と公園を合わせ計画地とし、+αの施設を持ち地域に開く小学校を設計する。

この学校は、地域にとって重要なイベントの場になり、災害時には防災拠点として機能し、地域にとって重要な核となる。地域施設を複合することにより、単独の学校として計画するよりも施設機能が多機能化し、学習環境や地域活動にとって効果的な活用が期待される。地域コミュニティや活動を生むプログラムを計画し、学校の地域社会への役割を考えながら、新しい学校のあり方、デザインを積極的に提案すること。

#### 【設計条件】

敷地：神奈川県横浜市神奈川区平川町11-1  
面積：約12,300㎡



## 非常勤講師 経歴

木島 千嘉  
Chika KIJIMA

1966年生まれ、1989年早稲田大学理工学部建築学科卒業、1991年東京工業大学大学院修士課程修了、1991年(株)日建建設入社、1999年O.F.D.A associates所属、2001年木島千嘉建築設計事務所設立

鈴木 丈晴  
Takeharu SUZUKI

1976年生まれ、1998年東京大学工学部建築科卒業、2000年同大学大学院修了、2000年安藤忠雄建築研究所、2010年京都造形芸術大学非常勤講師、2011年芝浦工業大学非常勤講師、2012年鈴木丈晴アトリエ一級建築士事務所設立

## 六角橋ミニシアターコンプレックスと広場

阿部 凌大  
Ryota ABE

六角橋プラザ  
Plaza Rokkakubashi



金子 遥  
Haruka KANEKO

ダイケイシアター  
Trapezium



佐々木 雅史  
Masashi SASAKI

螺旋  
Spiral



堀田 和延  
Kazutaka HORITA

adventure  
adventure





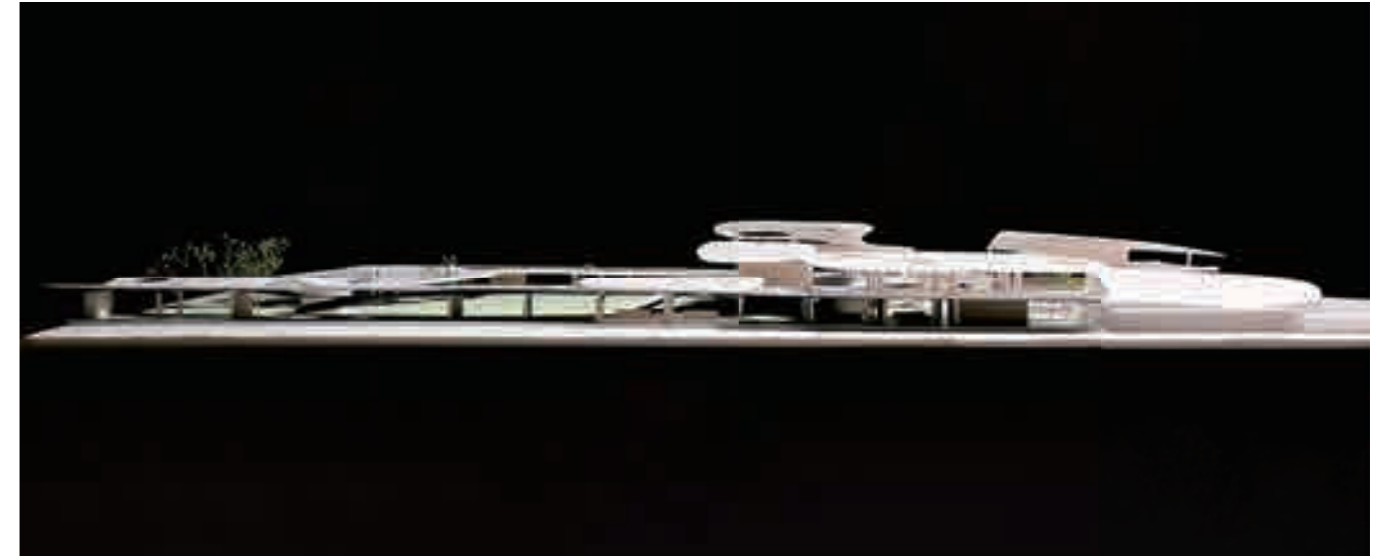
春川 桃子  
Momoko HARUKAWA

結 -ヒトマチつなぐ学び舎-  
YUI —a learning place that connects people-



東野 葉月  
Hazuki TONO

庭と光  
garden and light



高梨 颯斗  
Hayato TAKANASHI

表裏～展延する屋根と生物の居場所～  
The front and back



仁昌寺 天心  
Tenshin NISHOJI

Fractal  
Fractal



## 担当

中井 邦夫（教授）、吉岡 寛之（助教）、鈴木 成也（助手）

森山 ちはる（非常勤講師、サイドバイサイド一級建築士事務所）、川辺 直哉（非常勤講師、川辺直哉建築設計事務所）  
Kunio NAKAI (Professor), Hiroyuki YOSHIOKA (Assistant Professor), Naruya SUZUKI (Assistant),  
Chiharu MORIYAMA (Guest Lecturer, ara), Naoya KAWABE (Guest Lecturer, NAOYA KAWABE ARCHITECTS)

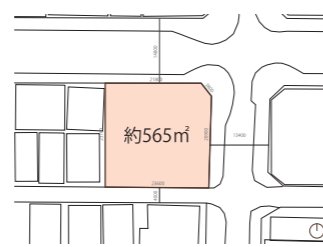
小澤美月 (M2, TA)、オイン シャンゲン (M1, TA)、黄 翼 (M1, TA)、富田 響真 (B4, SA)、丸山 創也 (B4, SA)  
Mizuki OZAWA (M2, Teaching Assistant), Xian Gen OOI (M1, Teaching Assistant), HUANG JI (M1, Teaching Assistant),  
Kyoma TOMITA (B4, Student Assistant), Souya MARUYAMA (B4, Student Assistant)

## 第一課題 関内に建つオフィス

横浜市関内地区にオフィスを計画せよ。

近年、まちに開く建築が話題となっている。住宅の一部を交流の場やまちかど図書室とする「住み開き」、集合住宅の共用施設を居住者だけでなく地域にも開放する、小学校に地域施設を併設する、など。これらはこれまでコミュニティ施設が担ってきた機能を、それ以外の施設が地域と部分的にシェアすることで、自らの機能をより充実させるものである。コミュニティ活性化を図るとともに、それぞれの生活の豊かさにもつながる方向性と言える。

オフィスはセキュリティの観点から、入り口にゲートを設けるなど、どちらかというところ閉じていく傾向にある。しかし、オフィスもまた開くことによって、イノベーションを起こすことが期待されている。ここでは、空間的にもプログラムのにも、社会、地域に対して開かれたオフィスの提案を求める。



### 【設計条件】

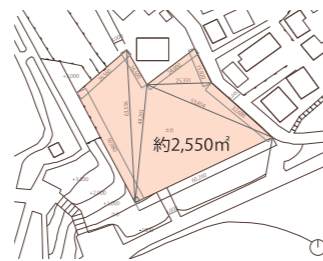
- 敷地：神奈川県横浜市中区 住吉町3丁目
- 敷地面積：約565㎡
- 建ぺい率：80%
- 容積率：700%

## 第二課題 公園の一角に建つ地域の図書館

岸根公園に面する敷地に地域図書館を計画せよ。

図書館は「知識資源の管理と新しい知識創造の場」である。インターネットの普及を背景に本との関わりが変わりつつある現代において、書籍の保管・管理と閲覧という図書館の基本的機能を満たしながら、図書館の今後の在り方について考えること。

地域図書館は中央図書館等大規模図書館を縮小した施設ではなく、コミュニティ施設としての機能が求められる。コミュニティ施設は、住民が自発的な意思により行う地域独自の活動を支援するとともに、住民同士の交流を促進する場である。周辺の都市空間構成を読みとり、岸根公園との空間的つながりを意識し、地域の人たちが本に親しみながら、地域交流を図る「地域の図書館」を計画すること。



### 【設計条件】

- 敷地：神奈川県横浜市港北区岸根町725
- 敷地面積：約2,550㎡
- 建ぺい率：60%
- 容積率：100%

## 非常勤講師 経歴

森山 ちひろ  
Chiharu MORIYAMA

東京都生まれ、2003年日本女子大学政学部住居学科卒業、2005年東京工業大学大学院理工学研究科建築工学科修了（坂本研究室）、2005年-2011年伊藤豊雄建築設計事務所、2012年-日本大学生産工学部建築学科デザインコース非常勤講師、2014年アトリエHIMC設立、2018年-森山ちはる建築設計事務所設立

川辺 直哉  
Naoya KAWABE

1970年神奈川県生まれ、1994年東京理科大学工学部建築学科卒業、1996年東京芸術大学大学院修士課程修了、1997～2001年石田敏明建築設計事務所、2002年川辺直哉建築設計事務所設立、現在東京理科大学、東京電機大学、昭和女子大学にて非常勤講師

棚橋 愛夏  
Aika TANAHASHI

重なり合う箱  
Overlapping boxes



平田 大地  
Daich HIRATA

Gaze and nature go around  
Gaze and nature go around



古川 朋花  
Tomoka HURUKAWA

循環  
circulation



近藤 舞幸  
Mayuki KONDO

光  
light

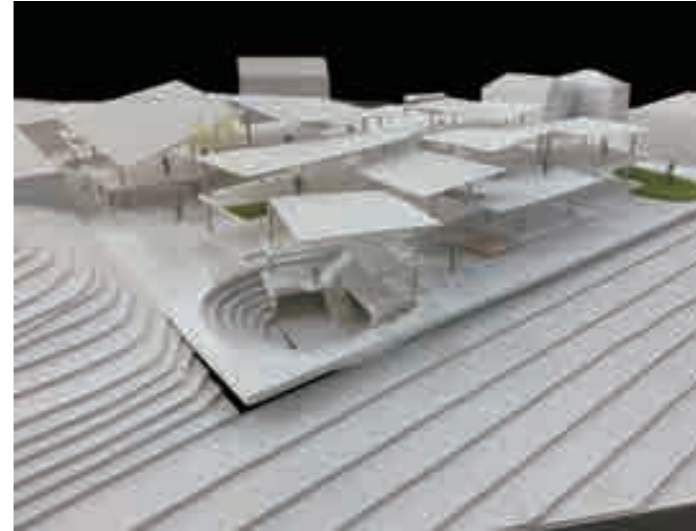


後藤 治  
Haru GOTO



トカイナカ  
Local City

山本 紗也子  
Sayako YAMAMOTO



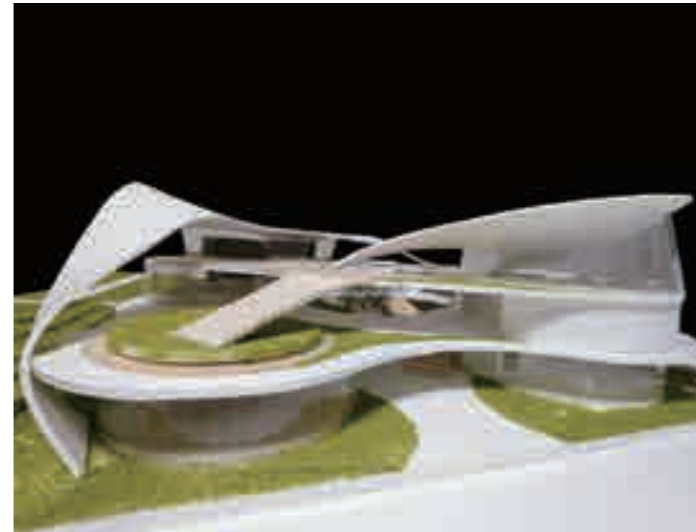
自然を感じる  
feel the nature

太田 有哉  
Yuya OTA



回廊が生む「発見」と「交流」  
Discovery and exchange created by moving

平田 大地  
Daich HIRATA



曲線との回遊  
Excursion with curves

担当

中井 邦夫 (教授)、曾我部 昌史 (教授)、野村 和宣 (教授)、  
立花 美緒 (准教授)、姜 明采 (助教)、高橋 玄 (助手)、  
井原 佳代 (非常勤講師、ihrmk一級建築士事務所)

Kunio NAKAI (Professor), Masashi SOGABE (Professor), Kazunari NOMURA (Professor), Mio TACHIBANA (Associate professor), Myunghae KANG (Assistant professor), Gen TAKAHASHI (Assistant), Kayo IHARA (Guest Lecturer, ihrmk Architects)

籾内俊希 (M2, TA)、伊藤伸一郎 (M2, TA)、小澤美月 (M2, TA)、中澤実那 (M2, TA)、  
オイン シャンゲン (M1, SA)、中里優香 (B4, SA)、加藤雄大 (B4, SA)  
Toshiki SUNOUCHI (M2, Teaching Assistant), Shinichiro ITO (M2, Teaching Assistant),  
Mizuki OZAWA (M2, Teaching Assistant), Mina NAKAZAWA (M2, Teaching Assistant),  
Xian Gen OOI (M1, Student Assistant), Yuka NAKAZATO (B4, Student Assistant)

授業内容

- |   |   |
|---|---|
| 1) トレース課題 1 (1/100)<br>「住吉の長屋」(設計: 安藤 忠雄) | 4) トレース課題 2 (1/100)<br>「代官山ヒルサイドテラス A・B 棟」(設計: 横 文彦)          |
| 2) 模型課題 1 (1/100)<br>「住吉の長屋」              | 5) 設計課題 1 (下記参照)  |
| 3) ゲスト・レクチャー<br>池田偉佐雄 (横総合計画事務所)          | 6) 模型課題 2 (1/100)<br>「代官山ヒルサイドテラス A 棟」                        |
|   | 7) 設計課題 2 (下記参照)<br>※その他、見字レポート (3回)、読書批評文 (ル・コルビュゼ「建築をめざして」) |

設計課題 1 地域とつながる集合住宅

住宅地内の敷地に、様々な世代の居住者が、ともに住む集合住宅を設計する。敷地は、四周が道路に面する三角形の区画であり、公園のそばに立地し、商店街にも近い。地域との関連性を意識して、敷地周辺の条件を最大限に活かしながら、この場所に住む様々なタイプの世帯の生活像を具体的にイメージすると同時に、個性の異なる複数の居住者が住む集合住宅ならではの楽しい提案・空間を求める。

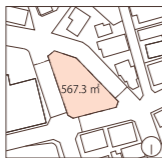
【設計条件】

敷地: 神奈川県西神奈川3-9-16

地域: 市街化区域、第一種住居地域、防火地域: 準防火地域、

構造形式: 鉄筋コンクリート・壁式構造

敷地面積: 567.3㎡、建ぺい率: 70%、容積率: 200%



設計課題 2 神大ミュージアム

神奈川県 18 号館および 21 号館の敷地に、神奈川県が所蔵する収蔵品 (文献史料、記録史料など) を企画、常設展示する展示室やインフォメーション・センターを含むミュージアムを設計する。敷地は、大学と住宅地との境界部に位置する緩やかな傾斜をもった角地であり、大学キャンパス・マスタープランにおいて、16 号館と共に大学の「ゲートゾーン」と位置づけられており、大学の対外的な顔となる空間となることが期待されている。多様な活動を含み込む可能性を最大限引き出す提案を求める。

【設計条件】

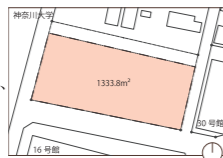
敷地: 神奈川県六角橋3丁目

地域: 第二種中高層住居専用地域、防火地域: 準防火地域、

構造形式: 鉄筋コンクリート・ラーメン構造

敷地面積: 1333.8㎡、建ぺい率: 70% (法定は 60%)、

容積率: 150%

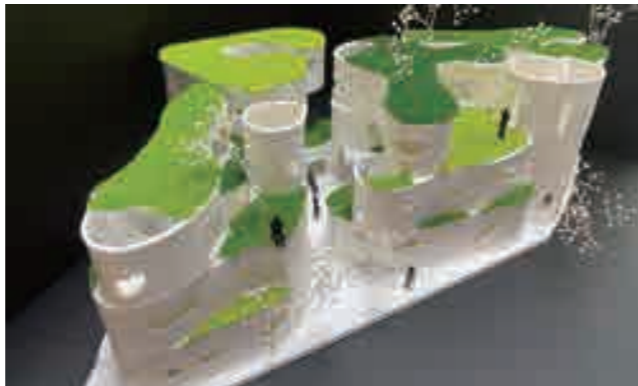


地域とつながる集合住宅

平賀 奈月

Natuki HIRAGA

CORE  
CORE



三村 優菜

Yuna MIMURA

ただいま、おかえりが響く家

House with Greetings echo



棚橋 愛夏

Aika TANAHASHI

箱庭

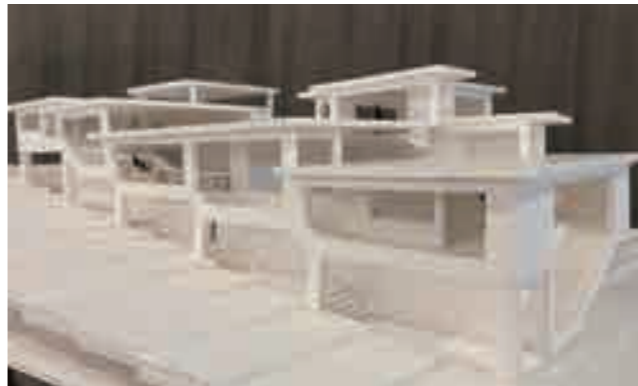
miniature garden



棚橋 愛夏

Aika TANAHASHI

Connect  
Connect



後藤 治

Haru GOTO

波

Wave

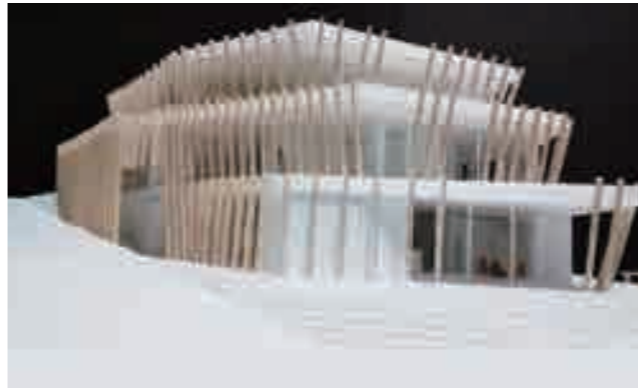


太田 有哉

Yuya OTA

「船」のミュージアム

Ship-like Museum



松野 百花

Momoka MATUNO

眺望  
The View

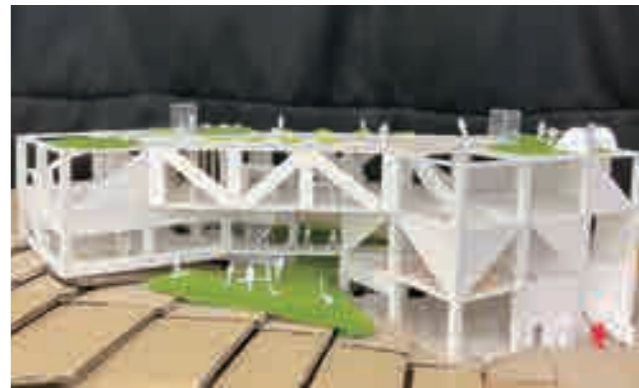


三村 優菜

Yuna MIMURA

触れる触れ合う

touch and feel each other

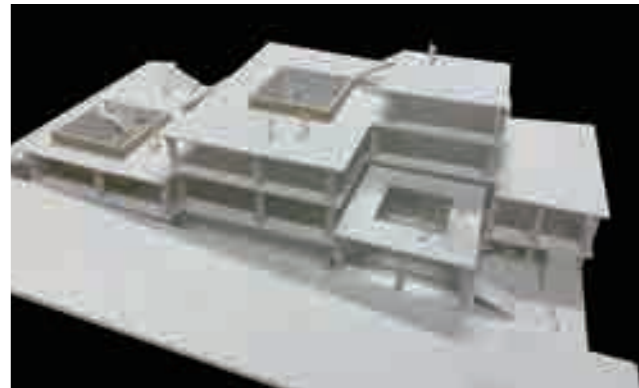


山本 紗也子

Sayako YAMAMOTO

土の箱

rammed earth box



担当

山家京子(教授)、六角美瑠(教授)、鈴木信弘(教授)、印牧岳彦(助教)、姜明采(助教)、鈴木成也(助手)、井原佳代(非常勤講師、ihrmk一級建築士事務所)、岡田雅人(非常勤講師、岡田雅人建築設計事務所)、古谷洋平(非常勤講師、アトリエドゥウエル一級建築士事務所)

Kyoko YAMAGA (Professor), Miru ROKKAKU (Professor), Nobuhiro SUZUKI (Professor), Takahiko KANEMAKI (Assistant professor), Myungchae KANG (Assistant professor), Naruya SUZUKI (Assistant), Kayo IHARA (Guest Lecturer, ihrmk Architects), Masato OKADA (Guest Lecturer, MASATO OKADA ARCHITECTS), Yohei FURUYA (Guest Lecturer, Atelier-dwell)

日下紗菜 (M2, TA)、菅野麻衣子 (M2, TA)、林真太郎 (M2, TA)、丹羽航平 (M2, TA)、兼田聖人 (M1, TA)、篠原光汰 (M1, TA)、関川吹雪 (M1, TA)、濱大智 (B4, SA)、吉濱智哉 (B4, SA)

Sana KUSAKA (M2, Teaching Assistant), Maiko SUGANO (M2, Teaching Assistant), Shintaro HAYASHI (M2, Teaching Assistant), Kouhei NIWA (M2, Teaching Assistant), Masato KANEDA (M1, Teaching Assistant), Kota SHIHOHARA (M1, Teaching Assistant), Fubuki SEKIKAWA (M1, Teaching Assistant), Daichi HAMA (B4, Student Assistant), Tomoya YOSHIHAMA (B4, Student Assistant)

授業内容

- |   |                      |
|---|----------------------|
| 1) ガイダンス：「水道道の家」出題・説明                   | 5) 設計課題1：敷地模型作成      |
| 2) トレース課題1：「水道道の家」(設計：鈴木 信弘) 意匠図 (1/50) | 6) 非常勤講師：古谷洋平 レクチャー  |
| 3) 模型課題1：「水道道の家」(設計：鈴木 信弘) 軸組模型 (1/50)  | 7) 設計課題2：(下記参照)      |
| 4) 設計課題1：(下記参照)                         | 8) 設計課題2：敷地模型作成      |
|   | 9) 非常勤講師：井原佳代 レクチャー  |
|   | 10) 非常勤講師：岡田雅人 レクチャー |

設計課題1 クラインガルテン(市民農園)に建つ「小屋」のデザイン

横浜市神奈川区神大寺の農業専用地域内の一画を借りて、小さな「小屋」を建てること。隣接する畑・菜園にて収穫した野菜を使って調理し、食事を楽しむ場所であり、季節を感じながら過ごす、理想の小屋を設計すること。

【設計条件】

- ・道路沿いに広がる農地の一画、15m×8mの範囲を計画地とする。
- ・農地には緩やかな傾斜があるが、計画地は道路を基準として平坦とみなしてもよい。
- ・小屋の面積一屋根の掛かる面積に制限はない。
- ・キャンプ程度の設備による炊事・食事ができる空間を考える。
- ・屋根は木造(線材による架構)とし小屋組を見せるので屋根面(野地面)は作らない。
- ・そのほかの壁・床などは自由。(基本的に平屋とする)



設計課題2 光・風・自然を感じるセカンドハウス

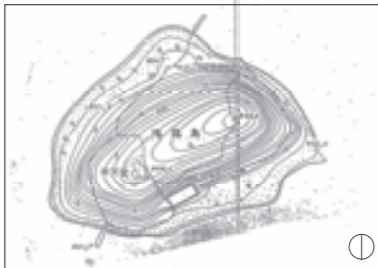
河口湖に浮かぶ「鶺鴒の島」に、セカンドハウスを設計すること。既存の考え方やスタイルにとらわれない、この島の環境を活かした、日常生活から離れたセカンドハウスならではの、自由な発想の空間による新鮮なライフスタイルの提案を期待する。

【設計条件】

- ・原則として木造とし、柱・梁の配置など、架構を具体的に表現すること。
- ・延床面積は、65㎡前後とし、外部空間は自由に設定すること。
- ・配置は島全体から好きな場所とすること。

【敷地情報】

計画敷地は、河口湖に浮かぶ、木々に覆われた高低差が激しい無人島「鶺鴒の島」。  
面積：0.028k㎡、標高：859m



品川 万由子  
Mayuko SHINAGAWA

ひかりが差す角小屋  
Horn hut with rays of light shine through



井藤 一真  
Kazuma ITO

横ハマグリー横浜のハマグリ小屋で挨拶をー  
Yokohamaguri - Greetings at a clam hut in Yokohama -



鈴木 紗来  
Sara SUZUKI

巡る  
Dwelling cycle



中田 一樹  
Kazuki NAKATA

Pentagon  
Pentagon



東海林 真依  
Mai SHOJI

木と暮らす  
Life with trees



吉田 圭佑  
Keisuke YOSHIDA

登山道の家  
Trail house



## 建築デザインⅢ

例年行っている2つの複合建築の課題に家具的スケールの短期課題を加え、3つの課題を行った。

第1課題では、各人が関内周辺で敷地を選定し、この先の暮らし方の多様化に対して意識し、新たな建築空間の構想へとつなげる必要がある。ここで紹介する、高梨さんの世代を超えた共生空間の提案、高橋さんのメガストラクチャーで街を折りたたむような提案のほかにも、道のような動線が都市の異なる高さの場を繋いだり、複雑に構成されたスキップフロアが公園のような場を創出したものなど、様々な提案があった。

グループ課題である第2課題では、周辺の交通インフラなどとの関係をとりつつ、いかにプログラムをまとめられるかが問われる。紹介する2作品は、それぞれ特徴的な形態や内部空間のつながり方をもつが、いずれも周辺との関わり方の検討を経て得られた特徴である。毎回のエスキスで提案を深めていく様子も印象的だった。

第3課題はみなとみらいに敷地を見つけ、都市的な特徴や課題に、身体スケールを意識した提案でこたえることを求めた。それぞれの眼差しで都市を観察した結果が提案に繋がった。縮尺1/10の図面を求めたが、密度的に不十分なものが多かった。今後の課題である。(曾我部)

## 建築デザインⅡ

第1シネマ課題は、大・中・小という3つのホールを埋め込み積層建築を解くことが課題の重点であるが、広場との連携、パブリックスペースの活動を強く設計に表現してほしいと思っている。堀田さん、金子さんの設計は、広場という屋外環境を動線とともに立体的に組み上げており、回遊性の中に活動の場が展開している。佐々木さんは回遊動線を形態的にも強め、ユニークなファサードを形成している。阿部さんは、三角と折れ壁によるデザインで全体をまとめて象徴的な建築として表現している。

第2小学校課題は、公園と一体化した環境をデザインし、地域施設を有することで地域に対しての関わりが求められている。高梨さんは周辺に対して1階の地域に対する開放性と2階にテラスを巡らせることで学校として

の開放性とを両立させている。東野さんは、柔らかい囲みの空間を一体的に形成することで、全体を閉じないように様々な居場所や学びの場を展開させている。春川さんは強い囲みの空間を形成しながら、中庭グラウンドに対し回廊的にも断面的にも関係を作りながら設計をしている。建築と環境が魅力的な活動の場として、また新たな環境風景として形成できている案を評価したい。(六角)

## 建築デザインⅠ

本科目は、小・中規模の施設の設計課題を通して、建築を成立させる計画およびデザインの基礎を学ぶことを目的とする。とくに与えられた課題に対する独自のテーマを見つけ、配置計画やゾーニング、動線計画、構造・工法の選択などを通して、そのテーマを建築化するプロセスを身につけ、さらに設計意図を表現するプレゼンテーション技術について修得することを目指す。

本年度は、以下の2つの設計課題を課した。まず第1課題「関内に建つオフィス」では、市街地に建つ8層程度の積層建築において、閉鎖的になりがちなオフィスビルを、いかにして街に開くのかに関するデザインを課題とした。また第2課題「公園の一角に建つ図書館付コミュニティ施設」では、図書館を中心とした複合用途を含みこむ開かれた地域施設のあり方や、立地する公園や周辺環境との繋がりでのデザインが求められた。

いずれの課題においても、周辺環境や地域の人々との関わりを創りだす、建築の新たなプログラムや空間構成の提案が求められた。(中井)

## 設計製図Ⅱ

本授業は建築学科生全員を対象とする最後の製図系必修科目であり、主に鉄筋コンクリート(RC)構造を主とする中小規模建築について、1)建築の製図及び設計に関する基礎を学び修得すること、2)空間および立体の把握力と表現力を養うこと、3)図面や模型および言葉で建築の設計内容を表現する力を養うこと、4)計画、構造、設備などを考慮し総合的な建築の構想力を養うこと等を通して、建築の設計製図に関する基本的な知識と技術を身につけることを目標としている。

具体的には、代表的なRC工法である壁式構造およびラーメン構造について、実例の図面トレースおよび設計課題を課した。トレース課題としては、壁式構造事例として「住吉の長屋(設計:安藤忠雄、併せて模型制作)」、「萩塚の長屋(設計:藤野高志)」、ラーメン構造事例として「神奈川大学6号館(設計:RIA)」を課した。

また設計課題は、「地域とつながる集合住宅」と「神大ミュージアム・パーク」の2課題を順に課し、それぞれ履修生を7ユニットに分けて指導し、中間と最終で全体講評会を行った。またこれらと並行して「代官山ヒルサイドテラス(設計:槇文彦)」等を含む代表的なRC造建築作品の見学レポートを3回と、ル・コルビュジェ著『建築をめざして』の読書感想文を課した。さらに普段は建築家として設計実務に携わる非常勤講師によるレクチャーを通して、設計実務の様子や新しい建築デザインの潮流についても学ぶ機会を設けた。(中井)

## 設計製図Ⅰ

本科目は、1年生を対象とした学部必修の製図科目で、木構造を主とする小規模の住宅建築について、設計および製図の基礎的演習を行うものである。

最初の4週は「水道道の家」を対象としたトレースと軸組模型制作である。

設計課題1「クラインガルテン(市民農園)に建つ『小屋』のデザイン」では、まず、A3判のベニヤ板に、収穫した野菜を楽しむシーンを再現し、それを覆う軸組を模型でスタイする。最終的に模型を図面化しプレゼンテーションボードとして提出させた。一つとして同じものではなく、楽しい模型が並んだ。

設計課題2「光・風・自然を感じるセカンドハウス」は、昨年度までと同様、河口湖に浮かぶうのしまを敷地としている。分散配置で外部を取り込んだ提案や、中央に吹抜けを配置し塔状に巡らせるなど、秀作が多かった。(山家)

神奈川大学横浜キャンパス31号館  
(建築ものづくり工房)

学外受賞

留学生レポート

# 神奈川大学横浜キャンパス31号館（建築ものづくり工房）



デザイン監修：神奈川大学キャンパス計画専門チーム（内田青蔵、山家京子、曾我部昌史、中井邦夫、鈴木信弘、六角美瑠）

設計・監理：総合/アトリエドゥウェル 合同会社

構造 / 株式会社 川村構造設計室 設備 / 有限会社 ZO 設計室

施工 / 東急建設株式会社

規模・構造：地上2階建・鉄骨造  
 建築面積：231.82㎡ 延床面積：388.65㎡  
 工期：令和4年2月1日～令和4年11月30日

本校舎は、2022年に建築学部設立にあたり、メディアテークキャンパス（キャンパスそのものを「知の集積体」とみなし自立的成長支援の学習環境を創出する）構想を継承しながら、建築分野に特化した専門的なものづくり体制及び施設整備を目指し建設された。

1階は木材を加工する大型機器を利用する工房、2階は木材の組み立て加工、デジタル加工機器を利用する工房、そして屋上には空に開かれた創作スペースが設けられ、実寸大の作品が創作できる。

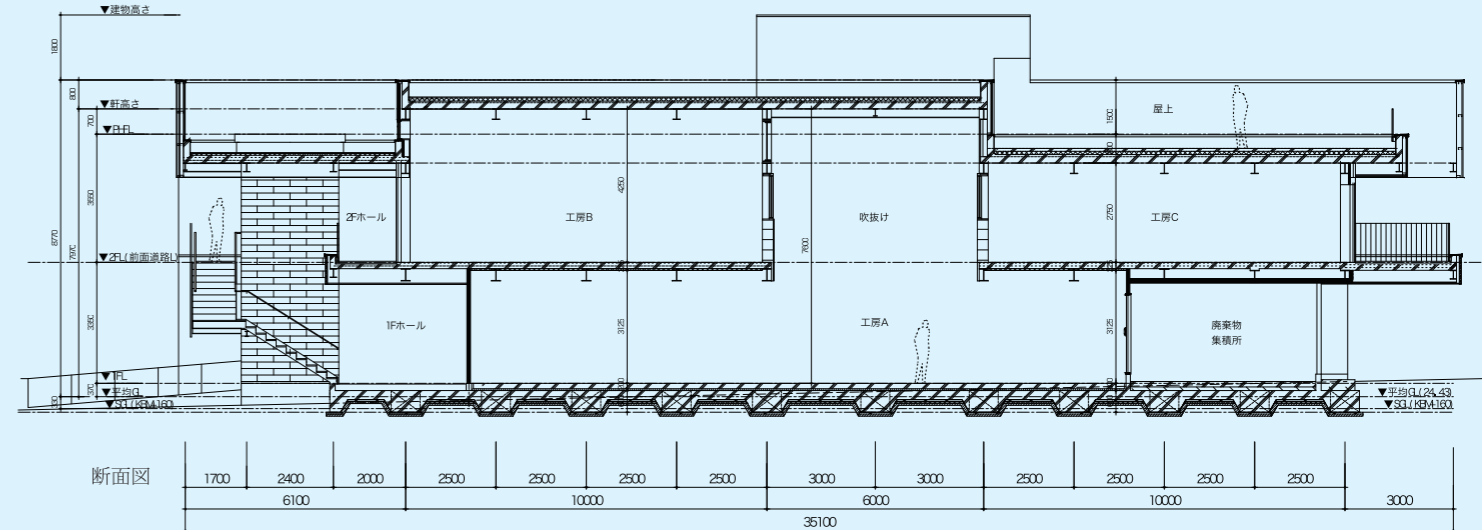
2階と屋上は、学生が大学内外に対して、学修を通して得たことを発信する場や、地域が行うものづくりイベントの独立した公開スペースなど、様々な利用方法が可能な場となっている。

ものづくりの実践と自ら発信できる能力を育むための人材育成の場として、キャンパス内で完結しない地域にひらかれた校舎である。

## 2F 工房B



## 2F 工房C



## 1F 工房A



### 制作機械



パネルソー  
大きな板材を直角に切断する



軸傾斜昇降盤  
木材の加工・切断を行い、角度をつけた加工も可能



CNCルーター  
コンピューター制御による2D/3D加工



横切り盤  
横に長い材料を正確に切断する



手押しカンナ盤  
材料の平面と直角面の削り出し



自動一面カンナ盤  
材料の厚みを揃えて削り出す

### 設計者



アトリエドゥウェル合同会社  
 一級建築士事務所  
**古谷 洋平**  
 Yohei FURUYA  
 1976年 神奈川県生まれ  
 2000年 神奈川大学工学部建築学科卒業  
 2002年 神奈川大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程 修了  
 2002～2010年 株式会社スタジオ・アルテック勤務  
 2017年 アトリエドゥウェル合同会社設立  
 現在に至る

### 教務技術職員



**河内由希**  
 Yuki KAWACHI  
 1980年 神奈川県生まれ  
 2002年 神奈川大学工学部建築学科卒業  
 2002年 設計事務所勤務  
 2004年 東京都立品川技術専門学校(木工技術科)入校  
 2005年 特注家具製造会社にて家具職人として従事  
 2022年 神奈川大学建築学部建築学科教務技術職員  
 授業や、各研究室の作業補助を担う

建物写真：畑拓/機械写真：松村桃子/紙面構成：森田泰正

**2022年度 支部共通事業日本建築学会設計競技**  
潤う大地 [優秀賞]

～土中環境から整える、多様な主体が生きるまち～  
谷本優斗、嶋谷勇希、井口翔太、半井雄汰、林眞太郎



「2022年度 支部共通事業日本建築学会設計競技」において、谷本優斗さん、(当時曾我部・吉岡研究室修士2年)、井口翔太さん(同)、嶋谷勇希さん(当時六角研究室修士2年)、半井雄汰さん(同)、林眞太郎さん(当時山家・柏原研究室修士2年)が優秀賞を受賞しました。

**第1回 玉善家のデザインコンペティション**  
重なる囲い [銀賞]

～家族の多様な距離によるカタチを包み込む住空間の提案～  
嶋谷 勇希



「第1回 玉善家のデザインコンペティション」において、嶋谷勇希さん(当時六角研究室修士2年)が銀賞を受賞しました。

**木の家設計グランプリ 2022**

蔵暮 [優秀賞]  
～2つの解釈を有する蔵の計画及び蔵ネットワークライフの提案～  
半井 雄汰、城所 真緒



表裏一体 [株式会社土屋ホームトピア賞]  
～表裏の連続で生まれる境界空間による二世帯住宅～  
高橋 昇太郎、仁昌寺 天心、萩原 脩斗



「木の家設計グランプリ 2022」において、半井雄汰さん(当時六角研究室修士2年)、城所真緒さん(当時山家・柏原研究室修士2年)が優秀賞を受賞し、小野美咲さん(当時曾我部・吉岡研究室学部4年)、三井田昂太さん(同)、相澤萌さん(同)、森永友馬さん(同)が堀部安詞賞を受賞し、高橋昇太郎さん(当時六角研究室学部3年)、仁昌寺天心さん(同)、萩原脩斗さん(当時立花研究室学部3年)が株式会社土屋ホームトピア賞を受賞しました。

まもり、ひろがる家 [堀部安詞賞]  
小野 美咲、三井田 昂太、相澤 萌、森永 友馬



**歴史的空間再編コンペティション 2022**  
まもり、ひろがる家 [19位入賞]  
小野 美咲、三井田 昂太、相澤 萌、森永 友馬



「歴史的空間再編コンペティション 2022」において、曾我部・吉岡研究室の小野美咲さん(当時学部4年)、三井田昂太さん(同)、相澤萌さん(同)、森永友馬さん(同)が19位入選しました。



## 学外受賞

### CLT DESING AWARD 2022

CLTの扇で織る駅  
孫 銘遠

[環境大臣賞]



「CLT DESING AWARD 2022- 設計コンテスト -」において、孫銘遠さん(当時曾我部・吉岡研究室修士1年)が環境大臣賞を受賞しました。

### 住宅課題賞 2022

寿町の循環集落 - 高齢者の生活と生存に関わる公共空間として -  
久世 文

[優秀賞 2 等]



「住宅課題賞 2022」において、久世文さん(当時六角研究室学部4年)が優秀賞2等を受賞しました。

### 第 6 回 未来こども園デザインコンペ U30

古モノが織りなす地域とこどもの縁  
小野 美咲

[US 賞]



「第6回 未来こども園デザインコンペ Under30」において、小野美咲さん(当時曾我部・吉岡研究室学部4年)が US賞を受賞しました。



## 学内受賞

### 2022 年度 神奈川大学 SDGs アワード

知って驚き!ハイテク・エコな茅葺住宅 [最優秀賞]  
~解体されてしまう住宅から持続可能な住宅へ~  
大石 純麗、亀田 真瑛人、春川 桃子



「2022年度 神奈川大学 SDGsアワード」において、鈴木研究室の大石純麗さん(当時学部3年)、亀田真瑛人さん(同)、春川桃子さん(同)が最優秀賞を受賞しました。

その他に下記の卒業設計・修士設計・設計課題に関連する賞につきましては、記載ページに詳細が掲載してあります。

### 第 21 回 JIA 大学院修士設計展 2023 [奨励賞] 東京建築コレクション 2023 [ファイナリスト]

人間のためでもある建築  
谷本 優斗(当時曾我部・吉岡研究室修士2年) 詳細 18P

### 東京建築コレクション 2023 [ファイナリスト]

開拓される鉄道土木  
~民芸的工法に基づく「関わりしろ」を持つ廃線跡地の建築提案 -  
嶋谷 勇希(当時六角研究室修士2年) 詳細 22P

### 全国合同卒業設計展 2023 [優秀賞] [学生賞] せんだいデザインリーグ [30 選] JIA 神奈川卒業設計コンクール [木村吉成賞]

一休集伝器  
~祖母からの伝承と焼き鳥を介した集いの創出 -  
梅澤 達紀 (当時六角研究室学部4年) 詳細 52P

### せんだいデザインリーグ [100 選]

自他の葺き替え  
~「むさしの方式」を背景としたこの先のコミュニティ形成建築 -  
三井田 昂太 (当時曾我部・吉岡研究室学部4年) 詳細 50P

### 建築学縁祭 2023 ~Rookie 選~ [100 選]

六角橋プラザ  
阿部 凌大 (当時曾我部・吉岡研究室学部3年) 詳細 77P

ダイケイシアター  
金子 遥 (当時立花研究室学部3年) 詳細 77P

表裏  
~展延する屋根と生物の居場所 -  
高梨 颯斗(当時六角研究室学部3年) 詳細 78P

## 留学生レポート

### 池原 なつ子 Natsuko IKEHARA

モナシュ大学へ  
中井研究室修士 2 年

文部科学省と独立行政法人日本学生支援機構が主催する官民協働海外留学支援制度へトビタテ!留学JAPAN日本代表プログラム〜でオーストラリア南東部に位置する都市メルボルンのモナシュ大学へ 2022年2月から12月までの約 11 ヶ月間の留学をしました。現地では、モナシュ大学のナイジェル・パートラム教授の指導のもと修士のデザインスタジオの「Transitioning Bogong Village」という、ビクトリア州山間部の村再生プロジェクトに参加しました。グループでキオスクの提案とモックアップを作製し、最終発表ではバーとして利用するなど実践的で学びの多い授業でした。グループでの作業だったため英語力や設計のスピード感など現地の学生についていき対等に話すことは難しく時間がかかりました。また同時に、パートラム教授が共同主宰する設計事務所である NMBW にてインターン生として、郊外の住宅街の緑化プロジェクトの冊子作製や、後期にはマリカ・ネウストプニー氏が共同主導するオーストラリアの住宅システムに関するリサーチプロジェクトのサポートとして図面を描くなどしました。そういった様々なプロジェクトを通して、オーストラリアではとても長いタイムスパンでまちや村、建築を考えることに驚きました。

トビタテ留学プログラムの活動の一環として求められる日本発信プロジェクトでは、現地ですでにできた友達やお世話になった先生方を招待し、沖縄文化を発信する交流会を開催しました。新型コロナウイルスによる混乱のため、思い通りにならないことも多々ありましたが、そんな中だからこそ人との繋がりがいつも以上に広がっていった気がします。私の留学に関わり助けてくださった全ての人に感謝します。



キオスク作製の様子

ボゴン村でバーとして利用

### Kilian Krass

ミュンヘン応用科学大学より  
曽我部・吉岡研究室



The start of my long-awaited exploration of Japanese architecture began in September 2022 when I was allowed to visit Studio Sogabe for the first time. Since I was a child, I have had a deep interest in Japanese culture and later its translation into built spaces. Both traditional architecture and its continuation into the contemporary architectural discourse have been a major reason to pursue a career in architecture since it questions my understanding of architecture whilst also showing me its potential to experience life and one's entire surroundings with a new set of eyes. My ambition to study at Kanagawa University was to learn about Japanese culture in order to better comprehend its people, cities and architecture, and to apply these principles and conclusions to my own understanding and practice of architecture. Being accepted into Studio Sogabe was just one moment of many that I associate with my six-month stay in Japan with a deep sense of happiness and gratitude. Because besides my choice of university subjects, my newly found fellow students and friends, my lecturers, the architectural field-trips and the work that went along with them were the reason for one of the most fulfilling, exciting and interesting times of my life. I learned that personal engagement and the pursuit of one's personal passion and interest leads to many intriguing topics and people from which I was able to profit a lot, like the cultural exchange and discussions with professors and friends, the discovery of unknown architects and their works and even in the mundane but much beloved visits to izakayas in the evening. Besides all the positive experiences I had, there is one bittersweet feeling that lasts after having parted with Japan: I only had the opportunity to be a guest in this fascinating and foreign world for six months. I think that with an improved proficiency in the Japanese language and a longer stay at Kanagawa University, I would have gained even more knowledge in Japanese architecture and its application. In conclusion, I would like to express my deepest and heartfelt gratitude to my lecturers, fellow students, friends and Kanagawa University for their dedication, patience, kindness and tolerance. I sincerely hope that in my future I will find work in Japan for a few years or at least be able to travel there again. Conversely, I would also like to warmly welcome everyone from Japan to Germany if the opportunity ever arises. I hope that we will stay in contact!

### デザインコース

**松隈 洋 | Hiroshi MATSUKUMA**  
教授  
建築史研究室  
[担当授業] 近現代建築史A、  
建築グラフィックス 他  
[部屋番号] 8-510

**曽我部 昌史 | Masashi SOGABE**  
教授  
都市デザイン研究室  
[担当授業] 都市デザイン論、  
建築デザインIII 他  
[部屋番号] 8-61

**中井 邦夫 | Kunio NAKAI**  
教授  
建築計画研究室  
[担当授業] 設計製図II、  
建築デザインI 他  
[部屋番号] 8-67A

**六角 美瑠 | Miru ROKKAKU**  
教授  
建築デザイン研究室  
[担当授業] 建築設計論、  
建築デザインII 他  
[部屋番号] 8-68A

**内田 青蔵 | Seizo UCHIDA**  
特任教授  
[担当授業] 横浜建築、  
近現代建築史B、  
建築史フィールドワーク 他  
[部屋番号] 8-510

**姜 明采 | Myungchae KANG**  
助教  
建築史研究室  
[担当授業] 設計製図I・II、  
建築グラフィックス 他  
[部屋番号] 8-510

**吉岡 寛之 | Hiroyuki YOSHIOKA**  
助教  
都市デザイン研究室  
[担当授業]  
建築デザインI・II・III 他  
[部屋番号] 8-61

**鈴木 成也 | Naruya SUZUKI**  
助手  
建築計画研究室  
[担当授業] 設計製図I、  
建築デザインI・II 他  
[部屋番号] 8-67

### まち再生コース

**山家 京子 | Kyoko YAMAGA**  
教授  
都市計画研究室  
[担当授業] 都市計画、  
設計製図I 他  
[部屋番号] 8-66A

**野村 和宜 | Kazunori NOMURA**  
教授  
建築保存活用研究室  
[担当授業] 建築保存活用計画論、  
まち再生演習III 他  
[部屋番号] 9-62

**高橋 寿太郎 | Jutaro TAKAHASHI**  
教授  
不動産デザイン研究室  
[担当授業] デザイン系不動産学基礎、  
まち再生演習IV 他  
[部屋番号] 9-62

**上野 正也 | Masaya UENO**  
准教授  
まちづくり研究室  
[担当授業] まちづくり論、  
まち再生演習I 他  
[部屋番号] 9-63

**柏原 沙織 | Saori KASHIHARA**  
助教  
都市計画研究室  
[担当授業] 建築CAD演習II 他  
[部屋番号] 9-61

**塩脇 祥 | Syou SHIOWAKI**  
助手  
建築保存活用研究室  
[担当授業] まち再生概論、  
まち再生演習III・IV 他  
[部屋番号] 9-61

### 住生活創造コース

**鈴木 信弘 | Nobuhiro SUZUKI**  
教授  
住宅デザイン研究室  
[担当授業] 住宅設計論、  
生活空間デザイン演習II 他  
[部屋番号] 9-63

**須崎 文代 | Fumiyo SUZAKI**  
准教授  
生活デザイン史研究室  
[担当授業] 生活空間デザイン演習I、  
居住空間史 他  
[部屋番号] 9-64

**立花 美緒 | Mio TACHIBANA**  
准教授  
居住環境デザイン研究室  
[担当授業] 生活環境論、  
生活空間デザイン演習III 他  
[部屋番号] 9-65

**印牧 長彦 | Takahiko KANEMAKI**  
助教  
生活デザイン史研究室  
[担当授業] 設計製図I  
生活空間デザイン演習I 他  
[部屋番号] 9-64

**菊井 悠央 | Hisahiro KUKUI**  
助手  
住宅デザイン研究室  
[担当授業] 設計製図II、  
生活空間デザイン演習 他  
[部屋番号] 9-63

### 学部共通

**スタンリー・ラッセル | Stanley RUSSELL**  
特任教授  
[担当授業] 建築批評特論  
建築デザイン特別講義 他  
[部屋番号] 9-63

**河内由希 | Yuki KAWACHI**  
教務技術職員  
[担当授業] 工房ものづくり演習  
[部屋番号] 31-101-1

## 神奈川大学工学部建築学科・大学院工学研究科建築学専攻 沿革

- 1928 米田吉盛が「横浜学院」創設(旧横浜市中区桜木町)
- 1929 専門学校令により「横浜専門学校」設立認可
- 1930 六角橋に移転、横浜キャンパス開設(5月15日 創立記念日)
- 1949 学制改革により「神奈川大学」設置
- 1952 神奈川大学整備拡張計画(設計:山口文象/RIA)
- 1965 神奈川大学工学部建築学科創設(初代学科長:谷口忠教授、定員80名)  
8号館(建築学科研究室、製図室)竣工
- 1967 12号館(建築学科総合実験棟)竣工
- 1971 大学院工学研究科建築学専攻博士前期(修士)課程設置
- 1973 かなな会(建築学科同窓会)設立
- 1985 建築学科創設20周年 記念誌発刊
- 1990 大学院工学研究科建築学専攻博士後期課程設置
- 1994 建築学科にシステムコースとデザインコースの2コース制導入
- 1998 横浜キャンパス再開発開始(2002年完了)
- 2005 RAKU(デザインコース年鑑)vol.1発刊
- 2006 建築学科に建築環境コース、建築構造コース、建築デザインコースの3コース制導入  
第1回東アジア大学建築学術交流セミナー(以後毎年開催)  
日本建築学会120周年記念大会を神奈川大学で開催
- 2008 神奈川大学創立80周年、「学校法人神奈川大学将来構想」公表
- 2015 建築学科創設50周年 記念誌発刊
- 2022 建築学部建築学科設立。建築学系、都市生活学系の2学系を設置し、構造コース、環境コース、デザインコース、住生活創造コース、まち再生コースの5コース制導入

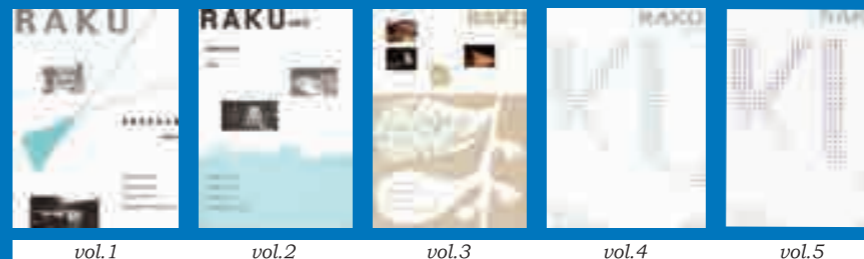


8号館

### 建築学科・専攻関連の主な学術交流協定校 \*派遣交換留学有り(U:全学、E:部局間)

- アジア: 同済大学(中国、1982～)、武漢理工大学(中国、1982～)、成均館大(韓国、2002～)、  
国立台湾科技大学(台湾、\*E 2005～)、モンクット王工科大学トンプリー校(タイ、\*E 2019～)
- 欧州: デンマーク王立芸術アカデミー建築大学(デンマーク、2010～)、国立モンペリエ高等建築大学(フランス、\*E 2013～)、  
バスク大学(スペイン、\*U 2017～)、ルツェルン応用科学芸術大学工学・建築学部(スイス、\*U 2017～)、  
チェコ工科大学(チェコ、\*U 2018～)、カールスルーエ応用科学大学(ドイツ、\*U 2018～)、  
ケルン工科大学(ドイツ、\*U 2018～)
- その他: タスマニア大学(オーストラリア、\*U 2011～)、南フロリダ大学(アメリカ、\*E 2020～)

## RAKU バックナンバー



vol.1 vol.2 vol.3 vol.4 vol.5



vol.6 「室伏次郎研究室」 vol.7 「白濱謙一先生 追悼特集」 vol.8 「山口文象/RIAの神奈川大学総合計画」 vol.9 「大学との連携による六角橋商店街のまちづくり」 vol.10 「東アジア建築都市学術交流セミナー」



vol.11 「西和夫先生 追悼特集」 vol.12 「重村力の足跡」 vol.13 「JINDAI KENCHIKUの記憶」 vol.14 「私たちのキャンパスの建築」



vol.15 「廃材標本 学生によるセルフリノベーションの軌跡」 vol.16 「まちのように住む 国際学生寮・栗田谷アカデミア」 vol.17 「コミュニティから地域防災を考える」 vol.18 「破壊と復興」

RAKUは、神奈川大学工学部建築学科建築デザインコースで2005年から発行を始め、2022年からは建築学部建築学科都市生活学系から発行しています。第6号以降は、毎号多彩なテーマの特集を組み、大学院生主体の取材と制作により、単なる学生作品紹介誌を超えた建築誌としても楽しめるように企画しています。第15号からは編集者の二階さちえ氏を起用し、第12号からご担当頂いているデザイナーのqp氏とともに、さらにパワーアップしました。読んで眺めてお楽しみください。  
(デザインコース主任 中井邦夫)

### 学生編集委員

制作代表 松村桃子、三井田昂太、森田泰正  
特集班 山下由聖(代表)、伊東歩武、袁文玥  
顔曉天、小菅大雅、田中宏武  
富田響真、長谷莉奈、濱大智

### 制作メンバー

伊東歩武、袁文玥、王イク輝、小野美咲、顔曉天  
黄凱、小菅大雅、齊川優香、蘇彦伯、田中宏武  
富田響真、長谷莉奈、濱大智、松村桃子  
三井田昂太、森田泰正、山下由聖、楊志鵬

監修/中井邦夫

姜明采

特集ページ編集/二階さちえ  
デザイン/qp

「RAKU Vol.19」 発行/神奈川大学建築学部建築学科都市生活学系  
発行日/2023年8月1日 [横浜キャンパス]横浜市神奈川区六角橋3-27-1



*REVIEW OF STREAM OF URBAN AND LIFE DESIGN,  
FACULTY OF ARCHITECTURE AND BUILDING ENGINEERING,  
KANAGAWA UNIVERSITY*